

# 研 究 紀 要

第 4 号

1988

財團法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

## 目 次

### 神子柴文化をめぐる諸問題

——先土器・縄文の画期をめぐる問題(一)——

栗島義明……1

### 縄文時代の土偶装飾をもつ土器について

浜野美代子……93

### 北武藏における古瓦の基礎的研究II

昼間孝志・宮 昌之

木戸春夫・赤熊浩一……109

### 関東における中世在地産土器について

浅野晴樹……197

### ガラス小玉の製作と着色技法について

——御伊勢原遺跡出土のガラス小玉を中心として——

立石盛詞・井上 巍……213

# 神子柴文化をめぐる諸問題

——先土器・縄文の画期をめぐる問題(一)——

栗 島 義 明

## 1. はじめに

日本に於ける先土器時代と縄文時代との境界をどこに求めるか、という問題は学史的には幾たびか論争の繰り返された古いものではあるが、同時に極めて今日的な問題でもある。何故ならば、こうした問題設定の内に以下に述べる如く二重の意味が含まれているからである。一つは、両時代の境界を求めるということ自体が、先土器時代の終末と縄文時代の起源という二つの検討課題を同時に孕んでいることにあり、少くともこうした二者（先土器・縄文）の比較検討なくしては相互の影響、関連或いはその変化、対立といった実相的な境界及び区分原理を見い出すことは困難となろう。第二としては、両時代の境界を求めるということは単に時代的に相接した時期の差異的様相の抽出に留まるものではなく、むしろ統体的な両者間の時代的な特質間相互の比較の上ではじめてなされるであろう点にある。換言すれば、先土器時代と縄文時代との差異（画期）を求めるということ自体は、両時代を人類史の発展段階の内で一体どのように評価するか、ということに他ならないのである。こうした問題は多分に研究者個人の歴史観に左右されるものである点、留意すべき事柄のように思われるが、いずれにせよ時代的特質と規定とが求められてはじめて相互の差異と画期、すなわち二者の境界問題が検討俎上に置かれるべきなことは言を待たない。

ところで、上記したような問題意識の基に該期研究に取り組む場合、必ずや突き当たるものとして、謂所「神子柴文化」（註1）をどのように評価するかという問題がある。重量感のある大形の石斧と、左右対称形状を呈する優美で大形の石槍等を組成することによって弁別される「神子柴文化」は、それを先土器時代最終末と評価するのか、或いは縄文草創期とするか、更には中石器とし両時代の過渡期的様相を示すものと捉えるか、今をもって研究者間の見解の一致を見ていよい。さらに原土器時代、或いは土器出現期という先土器から縄文への時代的過渡期説をも含めて、先土器と縄文との境界問題はこの「神子柴文化」をどのように評価するか、ということに全て問題が集約されているといつても過言ではあるまい。これと関連して「神子柴文化」の重要性は、今日、神子柴文化の内に土器が共伴するか否かをめぐる問題をもその内に孕む点にある。かつて最古型式の土器を追求するという縄文文化起源探求の方向性は、長野県の神子柴遺跡（註2）と長崎県の福井洞穴遺跡（註3）の調査を経て、それぞれ土器と縄文文化の起源並びに系統を細石器文化と神子柴文化のいづれかに求める方向へと変化してきた。前者が鎌木義昌、芹沢長介両氏、後者が山内清男、佐藤達夫の両氏（註4）によって各々、強力に押し進められてきたことは学史的に鑑みて周知のところである。こうした言わば「土器起源をめぐる二説」は、福井洞穴での細石器と土器との共伴という事例及びその後の泉福寺洞穴でのより確実な追認と新たなる「豆粒文土器」（註5）の発見とをもって、より一層明確な論拠が加えられたことにより、一段と縄文土器の細石器文化起源説（註6）への傾斜を強めつつあった。

しかしながら、後野遺跡(註7)、大平山元I遺跡(註8)という相次ぐ調査で神子柴石器群に土器の共伴する可能性が提示されたことにより、新たに神子柴文化への注目が高まっている現況にある。そして、近年、隆起線文土器及び爪形文土器のそれぞれ全国的視野での検討から、福井・泉福寺の土器群が本州地城との比較からも決して最古段階のものではなく、同時にむしろ新期段階に対比すべきとの見解も提示され(註9)、その系統関係も問題となりつつある。加えて「本ノ木論争」の再検討からは、本ノ木遺跡をはじめ類似した石器群を出土する各地遺跡の組成が隆起線文段階の系統を受け継いでおり、石器型式の連続性も疑われる事実が示されている(註10)。今後は、神子柴文化の石器群研究を通じて該当段階への本の木石器群の介存の当否を検討すべきであろう。神子柴文化の正統な位置付けと評価を現在行なうこと、それが縄文文化起源の問題へ大きな寄与をすると同時に、「神子柴文化」を中心にゆれ動くかの如き、区分の定まらない先土器時代と縄文時代の境界の問題に対しても一段と明確な視座と史観を持つに違いない。本論で神子柴文化の検討を行なう目的とは、まさにこうした認識にそった方向性での実践に他ならないのである。

## 2. 示準遺跡の検討

これまで神子柴文化に関しては、そこに見い出される特異な石器形態を中心に論じられることが極めて多かった。何故なら、神子柴文化の所産と考えられる遺跡は北海道から一部九州まで広範囲に認められるものの遺跡分布の濃淡が著しく、しかも多くの遺跡にあっては関連資料の多くは単独出土に留まり、良好なセットに恵まれていない。こうした状況に於ける必然的結果として該期研究は、特徴的な石器形態に論点が集中してきたのである。とりわけ大形で横断面が三角形状を呈す所謂神子柴型石斧に関しては、その草分け的存在である森鷗 稔氏(註11)をはじめ、岡本東三氏(註12)、中東耕志氏(註13)等多くの研究者がその分布や型式的変遷を説いた。そうしたなかにあって岡本東三氏は、石斧の型式変遷に論点を絞りながらも、石器組成や埋納遺跡の評価を通じて神子柴文化の総体的評価を行ない、研究の著しい発展を促されたことは記憶に留めておく必要があろう。

このような各氏の研究を踏まえて、本論では神子柴文化の論及へ前段階の作業として、その時間的変遷の検討を最重要項目として取りあげることとした。何故ならば、少なくとも現状を鑑みる限り、神子柴文化の編年は、確固たる論拠の基に提示されておらず、或る意味では系統と言ふ名の基に伝播のみが論じられその列島内での変容の姿に対しあまり注意が払われなかったことも一つの要因かと考えられる。同時にそこは石器形態偏重の研究方向と、神子柴遺物をはじめとする遺跡性格(遺跡埋納=デボ)の問題も少なからず影響を与えてるのであろう。そこで以下、本論に於いてはまず「神子柴・長者久保文化」と並び称される、該期の示準遺跡である神子柴遺跡と長者久保遺跡の石器群を検討することからはじめたいと思う。両遺跡出土石器群の分析と、その相互間の比較検討なくして神子柴文化を語ることはできない。そうした過程のなかで両遺跡の組成差と、石器形態の型式的差異をその有無をも含めて問題とし、その後に派生する問題をより広範囲に分析対象を広げてゆくなかで論及して行くこととした。

### 〈神子柴遺跡の検討〉

神子柴遺跡は1958年に調査され、軟質ローム層内20cmの深さから約50点の石器が発見された。石

器群は南北5m、東西3m程の楕円形状の分布をもち、そのうちにあっても器種単位の偏在性が認められるという（註14）。報告者によって分類された出土遺物を器種的単位に見ると槍先形尖頭器16点、石斧14点、石刃12点、搔器3点、錐1点、石核7点、砥石1点、他に剝片、碎片等20点程が検出されているが、それらは相互に接合し原石形状に復原される。

こうした石器数量を見てまず第一に注意されるのは、神子柴遺跡の約50点程の石器群の半数以上を占める石槍、石斧の量的安定性であろう。とりわけ石槍に関しては別に採集品が既に7点あり、それらを含めた合計23点という数は石斧数量をはるかに上回り、石器群总数の三分の一以上を占めることになる。ここに見る石槍及び石斧、とりわけ前者の量的安定性は、神子柴遺跡の最も顯著な特徴であり、その神子柴文化内での編年的位置を考える場合の一つの根拠ともなりそうである。

さて、次に神子柴遺跡に於ける各石器形態の型式的特徴を概観してみることにしよう。石槍はそのほとんどすべてが両面調整の施されたもので、各々の間にその調整加工をもって何らかの差異を見い出すことはできない。いずれも尖鋒な先端部とやや丸みを持つ基部とを併せ持った左右対称形状を基本的形態とし、石槍の概形は柳葉形と木葉形との二大別が可能である。石器の最大幅は身部中央からやや基部寄りにかけて存在し、そこからの長さが先端部と基部とでは約2：1の比率を示す傾向がある。一方大きさに関しては最長25cmのものから最短9.6cmのものまで幾つかのバラエティを有するものの、概略15～16cm前後のものと10cm前後のものとの二弁別が可能である。前者を大形、後者を中型とすれば一般的に言って柳葉形を示すのは前者で、木葉形を示すのは後者であると言えようか。加えて見落すことのできないのは各群内に極めて形状・大きさ等の石槍を構成する要素に於いて、酷似した複数の石槍を単位として認め得る点である。こうした石槍に於ける群構成と各群内での量的な安定性及び技術的齊一性とは、神子柴遺跡とその段階を語る場合に欠くことのできぬ視点となるであろう。

次に石斧に目を転じてみよう。神子柴遺跡からの石斧の出土は13点であるが、報告されているものはわずかに2点に留まる。為に石斧群の總体を窺い知ることは困難であるが、林氏に據れば神子柴遺跡から出土した石斧群には次のような特徴が認められるという。「……大部分は長さ22cm、幅8cm、厚さ5cm内外の短冊形に近い大形製品であって、側縁の中ほどの部分が心もち狭くなり、刃部は孤状に張り出した厚さは薄くなっている基部はやや細く分厚い。断面三角形で正面の基部より中部にかけて稜が盛り上がり背面は扁平である。この両面共に両側の縁辺から中軸に対して直角方向へ薄く幅広いflakingが加えられ、並列しながら繰り返されている。正面の刃部は刃線方向から階段状剥離が數各加えられ、基部から来る厚い稜を剥取して刃部と薄く調整している。また刃部は背面から正面側に向かって張り出すような傾向をもっている。剥離を施した上にさらに刃部を研磨したものが多く、約半数の七箇を占めている」。公表されている二点の石斧を見ても、ほぼ同様な形態的特徴を備えていることが窺い知れ、この二点は打製及び磨製と相互に製作技術上の相違は認められるものの、平面及び断面形態・刃部形態等に酷似した様相を認めることができ、共に基部に素材礫面を残存させている。刃部及び基部は双方共に孤状を呈しているものの、その度合は前者に於いてより大きい。石器最大幅は刃縁と側縁とが接する部位にあり、直線的な刃部と相俟って全体的にやや楔形に近似する長方形状の平面形態が作出されている。これ等石斧の刃部形態を見ると所謂

丸ノミは少なく、むしろ始刃に近似した形態を呈することが理解される。このことは石斧の側面形態とも呼応関係にあるようで、側面から石器を観察すると石器側縁は石器裏面の輪郭と接するのではなく、むしろ表面の輪郭線との中間部付近に位置する。これは石器の側面図を見れば一目瞭然で、石器の側縁線が表・裏面線のほぼ中央部に描かれている。言うまでもなくこうした側面形態からは該当石斧の横断面が、林氏の述べられたように三角形状と言ふよりはむしろ凸レンズ状に近い形態をとるということと補完的関係にあることが窺われる。同様な指摘は石斧裏面の調整加工からも看取し得るところであり、また研磨された石斧にあっては表面と同様に裏面もまた凸状に研磨されている。このような表裏にわたる凸状の刃部研磨に関しては、始刃状の刃部作出を目的とした意識的な研磨技術の過応と見做すことが可能であろう。

これらの大形の石斧と共に神子柴遺跡では小形の、しかも型式的に極めて特異な石斧の出土が認められている。一点は長さ10cm、幅5cm、厚さ1.5cmで、石器最大幅な刃部にあり平面形態は撥形に近い。石器裏面は両側縁からの調整加工により平坦な面が形成されているのに対し、表面は調整の後に基部近辺にまで研磨が施され凸状の面構成が意図的に作出されている。石斧刃部は研磨面側から平坦な裏面に向かって身を断ち切るような調整加工を施すことによって作られ、約60度の刃部角が形成される。刃部は石斧面からオーバーハングして表面に接しており、全体形成とこのような刃部形態とを併せ考えると他の大形の石斧とは機能を異にするものとも考えられる。もう一点の特異な石斧は、長さ7.5cm、幅4.2cm、厚さ1.1cmの小形品で、平面形態は木葉形の槍先形尖頭器に類似し、横断面は凸レンズ状を呈す。研磨の施された刃部はやや弧状で、それに続く側辺は大きく湾曲して、先端部で交叉し尖鋭な基部を形造っている。

以上、神子柴遺跡の公表されている限りの石斧を検討してきた訳であるが、所謂「神子柴型石斧」と呼された一群と共に単独資料ではあるが、他に二種類の型式を異にした小形品の存在することが注意される。全資料が今だに公表されて我々の周知するところとなっていない現状では、神子柴の石斧に関する総体的評価は行ない得ないものの、ここでは次のように注目しておきたい。それは石斧の型式を越えた研磨技術の盛行した姿で、石斧の表面ばかりでなく裏面へも、刃部だけでなくその身部（胴部）にまでも研磨の及んでいる事実である。加えて、小形の石斧は調整加工技術と相俟って平面及び断面形態が槍先形尖頭器に酷似しているにも拘らず、その刃部には研磨が施され、弧状の平面形態を呈している。言わばこれをもって石斧、槍先形尖頭器という器種単位に分化していく技術の重複性とその流動的関係の一端を知ることができる点にある。

神子柴遺跡では上述した石槍、石斧の他に石刃、擂器、錐、砥石、そして石核が出土しているが、その石器組成の全体像は今だに明らかとはなっておらず、とりあえず公表されている資料に限定されるが一応の記載を行なっておきたい。最初に石刃であるが、10点の出土が報じられており、うち2点が報告されている。全体としては長さ18cm～10cm、幅4～5cm、厚さ1～1.5cmの大形品が主体的で、いずれも調整石核から剥離されたものであるという。報告されたえみ2点の石刃は、共にその表面に1、2本の稜線を持ち両側辺が平行した形状を呈するが、表面と裏面の剥離方向は同一ではなく若干のズレが存在するようである。石核形状等の比較から表面に観察される剥離と裏面の主要剥離とは方向に於いて平行関係を保たない。こうした「石刃」の形態は、伴出している円盤状石

核と呼応関係に在るものと考えられる。石核は背面に於いては求心的な剥離が見られるものの、その表面にあっては同一方向への剥片剥離が行なわれており、それは水平ではなく弧状(湾曲)した打面に展開する為か、同一方向ではあるものの打面の湾曲に対応したやや求心的なものとなっている。石核の面構成から逆算しても、先の石刃の作出背景を窺い知ることができる。神子柴遺跡出土の削器・搔器は、実はこうした石刃を素材に用いて製作されており、前者は石刃の側辺に、後者はその側辺及び端部にそれぞれ調整加工を施したものである。素材形状の不明な石槍を除き、他の剝器はこうした石刃というよりも言わば縦長剝片を素材として用い、先の円盤状石核に残る剝片剥離の面構成によって復原できる剝片剥離技術がその技術基盤として機能していたものと考えられる。

#### 〈長者久保遺跡の検討〉

長者久保遺跡は1959年に発見され、1962、63、64年と計三回の発掘調査が行なわれ、計11点程の石器が出土した(註15)。石器群は採集品、発掘品を含めて総数50点で、その内訳は石斧3点(うち丸ノミ1点)、石槍2点、彫器7点、搔器3点、削器10点、雜器1点、剝片23点、磚1点である。出土点数が少なくこれをもって一律に組成問題に論及することは困難と言わざるを得ないが、次の点には注意しておく必要があろう。第一に石斧、石槍類の石器組成に占める割合の少なさで、とりわけ石槍の量的稀少さは神子柴遺跡でのあり方と比較した場合に著しい差異と映る。数量的制約の為か、長者久保では神子柴で看取されたように石斧、石槍の各々が数量的安定性を背景に持つ型式群から成り立っているとは考え難い。言わば長者久保遺跡にあっては、器種単位内の型式分化の見い出しえない点は注意しておく必要があろう。出土点数の稀少さは、或る意味ではこうした器種での型式の未分化を要因とすると考えることが可能なのかも知れない。第二点として神子柴遺跡には見い出すことのできなかった彫器の石器組成への参入が長者久保遺跡では顕著に認められる。しかも長者久保遺跡出土の彫器は、後述するように幾つかの型式的バラエティーを持っている。

さて、長者久保出土の各石器形態の特徴を見て行くことにしよう。最初に石槍であるが、大形のものと小形のものとが各々一点ずつ計2点が出土している。大形例は、尖端と基部とを欠損しており全体的形状は不明であるが、石器最大幅を基部に持つ細身で長身の石槍である。現存長13.5cm、幅3.5cm、厚さ0.9cmで表裏面にわたって調整加工が施されている。小形品も両面調整品でその基部を欠くが、おそらく木葉形に近い形状を呈するものと考えられる。現存長5.6cm、幅2.9cm、厚さ0.8cmで、最大幅は石器中央部のやや基部側にある。このように長者久保出土の石槍は型式差はあるものの、両面調整である点と基部付近に最大幅を持つ点で二点とも共通した属性を有している。ただし長者久保遺跡の石槍に見られる調整加工は神子柴遺跡石槍のそれと比べると器面調整が大きく、いずれかの側縁から加えられた調整が石槍の中心軸を越え、対する側縁近くにまで及び幅広の調整剝片が剥離されている。加えてその後の器面及び側縁への調整は、神子柴例のように全周縁に施されるのではなく、類似の調整はわずかに先端部付近にのみ認められ、神子柴遺跡との間にはこうした技術面に於いても時間差と考えられる差異が介在するようと思われる。

長者久保遺跡出土の石斧はどうであろうか。3点の石斧のうち1点に関しては既に良く知られているように丸ノミ状の刃部を有する石斧である。本例は長さ14.9cm、幅5.0cm、厚さ3.8cmで基部と

刃部は共に弧状を呈し、平行する直線的な側縁へと繋がっている。石器裏面の平坦な調整と両側縁からの急斜の調整とによって本例の横断面は正三角形状を呈す。刃部は裏面を除き全面的に研磨が施されているが、その度合は中央の稜部分に於いてより著しく、側縁側には若干の調整剝離の痕跡を留めている。おそらく刃部の基本的形状は、調整剝離によって作出されていたものと考えられ、研磨はあくまでその修正を技術目的としたものであろう。また刃部裏面には、表の研磨面を打面に細かな調整剝離が加えられており、これによって周知のように刃先は「アヒルのくちばし」状の湾曲を呈している。実見したところによると刃部裏面の調整は同じく裏面の側縁調整を切る関係にあること、そして調整加工が研磨面を打面として施されていること等を考え併せると、本例は刃部のみ再生されている可能性が強い。他の2点の石斧はいずれも打製で、大形の石斧に関しては表面に部分的に擦痕が認められるが、刃部に明確な研磨痕を観察することはできない。そのうち大形の1点は長さ15.3cm、幅5.8cm、厚さ2.6cmで、厚さ（断面形状）を除けば長さ・幅等で先の円ノミに極めて近似した数値を示している。石斧表面には素材作出以前の剝離面を大きく残存し、基部側からはそれに直交する剝離痕が認められ、両剝離面によって石斧の左右の面と中央の稜線とが既に形成されており側縁調整の施されている部位は極めて少ない。一方裏面は比較的入念な調整が両側縁側から加えられ、平坦な石斧裏面が作出されている。横断面形状は、先の円ノミ程ではないにせよ三角形状に近い形態をとる。刃部は表裏面に調整剝離が施され両刃で弧状の刃部が形成されている。本例の側縁はやや湾曲し、基部に至って交叉し尖鋭な基部形状が作られ、平面形態は円ノミよりも後述する石斧により近いものである。長者久保出土の小形石斧は、長さ7.4cm、幅3.2cm、厚さ1.0cmである。表裏面にわたって調整剝離が施されており、特に表面に於いては両側縁からの調整が中央部で交叉し稜状の形態を呈すが、横断面は薄いレンズ状である。裏面に一部礫面を残している。刃部は表裏の調整により弧状に仕上げられ、湾曲した側縁へと連続し基部に至って交叉する。石器の最大幅は前者と同様に刃部と側縁の接点部位に存在する。本例は平面及び側面、断面形態等に於いて併出した小形の石槍に酷似しているが、刃部に見られる調整と、基部が石槍のように尖鋭でないことから、從来考えられているように石斧と捉えておくのが該当であろう。

長者久保遺跡の石器群を特徴付けるものとして石斧の他に安定した彫器の存在があげられる。10点の彫器はいずれも縦長の石刃状の剝片を素材に用いたもので、そこには削片を素材とした彫器1点も含まれている。またこれ等彫器のなかには、彫刀面に対する素材の端部に調整加工を施し、搔器としたもの（仮にこれを彫搔器と呼称しておこう）も3点見受けられ看過できない。彫器は彫刀面の位置、その数、彫刀面作出の方法及びその打面等によって大きく二つの区分が可能である。一つは素材の一端に於いて交叉するように彫刀面が作出されているもの。このなかには彫刀面を形成する剝離が单一のものとそうでないものとの区分が可能である。もう一つは彫刀面を作出する前に素材である剝片の主要離面側から急傾斜の調整加工を施し、これを打面として彫刀面作出の為の加熱が加えられたもの。この型式には素材の一端にのみ彫刀面を持つものと両端にそれを持つものとがある。そして先の彫器と同様に彫刀面が单一の剝離によって作出されたものと複数の剝離によって形成されたものとの細分も可能である。このように長者久保遺跡では彫器が石器組成の中で安定して、しかも複数型式を持って見い出されることは大いに注意されるべきであろう。

長者久保遺跡からはこれらの石器以外に搔器、削器、錐の出土が報じられているが、全資料の公表がなされていない為に不明な部分が多い。そのなかで搔器については、通常の搔器(End-scraper)と円形搔器(Round-scraper)の二種類の存在が認められ、削器2点のなかには表裏に側線を違えて調整加工の施されたものが1点含まれている。他には剥片23点と自然礫1点があり、後者は長さ約8cm、幅3cmの精円形の黒曜石の原石である。

#### 〈神子柴・長者久保両遺跡間に見られる石器群の差異〉

前章では、本文化の代名詞ともなっている神子柴遺跡と長者久保遺跡の石器群を、組成と石器型式二つの観点より検討を加え相互に相違の存在することが素描できた。ただし、両遺跡の石器群の全貌が未だに明らかになっていない現状では、限定された公表資料を拠り所とせざるを得ず、全体との間には埋め難いギャップが存在するかも知れない。本文もあくまで公表資料と資料実見の際の記録に拠ったもので、その妥当性如何については若干の不安を感じるところである。いずれにせよ本文化研究の進展には、両遺跡の石器群の公表、わけても神子柴遺跡のそれが重要な鍵を握っていることを付言しておきたい。

さて以下、両遺跡の石器組成及び石器型式の差異の検討を通じて本文化の時間的変遷の骨子を抽出して行くこととした。まず第一に両遺跡間に見られる石器組成の差異に注目しなければならないだろう。すなわち本文化を代表する石斧、石槍の神子柴遺跡での卓越した石器組成内への参入と、長者久保遺跡での彫器存在である。石槍、石斧に関してみると、長者久保ではそれぞれ2点、3点と石器群を構成する他器種、例えば搔器などと同様な数量を保つに留まっている。これに反して神子柴遺跡にあっては石器総点数60点程のうち石槍は22点、石斧は14点と両者をもって石器群の半数以上を占めており長者久保との著しい差異を示している。ここに見る石槍、石斧の石器組成内での量的安定性を、まず第一に同文化の時間的経緯に伴う変化事象として捉えておきたい。すなわち、まずはこうした石器組成の差異をもって長者久保→神子柴という時間的変遷を抽出したいのである。ここで看過できないことは、先にも触れたが神子柴遺跡にあっては両器種の量的安定性は単に数量的に限定されるものではなく幾つかの型式群から成り立っていることにある。具体的に言えば、長者久保で認められた大形品と小形品は各々単品であったが、神子柴遺跡にあっては大別された各々の内により左右対称的一群や幅広的一群、基部が尖鋭な一群と、より丸みを帯びる一群、さらに神子柴には全長25cmを越える超大形品の存在する事実がある。これらの石槍は、長者久保例が比較的粗い器面調整を施し、その後に先端部付近にのみ限局的に調整剝離(主に側縁調整)を加えるのに対し、神子柴にあっては器面調整が規則的に両側縁より施され、その後さらに細かな調整が施されて、前者の剥離面相互の接点部分の高まりと側縁の修正が行われている。石槍器面の調整は左右の側縁側から施されて、石器先端部と基部とを結んだ線上で交叉する為、表面で二面、裏面で二面、計四面の器面調整が行われている。側縁修正の加工と合わせて、石器中心軸を基本とした左右側縁からの同等・同質の器面調整は、神子柴遺跡の左右対称の細身で優美と称される石槍を作出する為の工程上欠くことの出来ぬ技術基盤と評すべきものであろう。

長者久保遺跡と神子柴遺跡の石器群の双方を比較した場合、石槍と全く同様な相違を石斧群にも認める事ができるようである。まず第一に長者久保では石斧の出土はわずかに3点に留まるが、

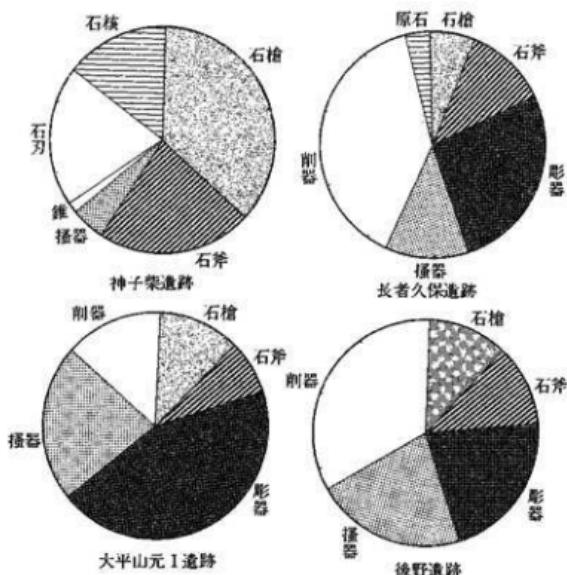


図1 各遺跡の石器組成

神子柴遺跡ではその約5倍に相当する14点が出土しており、全石器組成のうちの約四分の一を占め、石器組成内での石器群の全体に占める割合の高さは長者久保遺跡のそれの比ではない。まずはこの点をもってしても石槍群と同様に、長者久保→神子柴という時間的変化に伴う石斧群の型式的安定化と量的増加傾向を看取することができるであろう。先にも述べたとおり、神子柴の石斧は長さ22cm、幅8cm、厚さ5cm前後の所謂「短冊形」に近い大形の製品が多数

を占めている。言うまでもなく、製品の均一化傾向の背景には、それを生成する製作技術工程の均一化及び均質化が不可欠であり、それはデボ、生産跡を問わず完成された神子柴の石斧群より看取される重要な特徴である。加えて神子柴ではその半数以上に刃部を中心に研磨技術が施され、同技術工程が石斧製作の最終工程上に確固たる位置付けを有していたことを物語つてもいる。長者久保遺跡の石斧にあっては、磨製技術は刃部のみ、しかも石器表面の刃部にのみ限定的に施されており、研磨も石斧の形状（刃部形状）を著しく変形させたものではなく、それは先に指摘したとおり研磨面の下位に器面調整の剝離が観察できることからも裏付けられる。これに対して神子柴例に見る研磨は、刃部ばかりでなく身部にまでも及んでおり、しかも石器表面のみならず裏面にも認められる。長者久保遺跡例があくまでも刃部形態の修正を目的とした研磨であるのに対し、神子柴例は、同時に器面調整までを行なっているようである。つまり刃部という石斧の機能部位に限定的に適応されていた研磨技術が、石斧器面の調整加工技術をもその内に含みつつある姿がそこからは窺うことができる。もちろん、こうした研磨技術の盛行も、両刃（始刀）石斧の盛行という石斧型式の変化過程と何らかの呼応関係を成り立てるものではあろうが、神子柴遺跡ではこれ等大形品ばかりでなく、小形品のなかにも磨製品が見い出されるという事実がある。小形品の一例は、石斧表面をその基部付近に至るまで研磨が施されており、これ等の研磨は明らかに器面調整までを意識したものと言える。石器側縁の研磨も同様な点に於いて注意を払う必要があろう。また、小形品のうち一例は、概形が石槍状を呈し長者久保例に通ずるが、もう一例は器面まで研磨が及び、その刃部を断ち切っ

たかのような調整が加えられており、同様の石斧型式は長者久保には見られず、神子柴の段階に至り新たに出現した石斧型式と見做すべきものである。

以上、長者久保遺跡と神子柴文化の石器組成の変化、とりわけその内で大きな差異を示す石槍・石斧の検討を加え両者間に時間差異、すなわち長者久保→神子柴という該期編年の骨子を抽出し得た訳である。同様な編年観は石器組成への彫器存在の有無とも対応し、長者久保に多く認められた彫器を神子柴には1点も見ることができない。削器、搔器という他器種をもって両遺跡間の差異を指摘できない現在、彫器の石器組成への参入の姿は神子柴文化の細分のうえで看過できない観点と見做されるべきであろう。

### 3. 神子柴文化の編年

これまでに「長者久保・神子柴文化」

と並び称され、同文化の示準遺跡となっている長者久保遺跡と神子柴遺跡の石器組成と石器型式の検討から、両遺跡間に時間的前後関係の存在することが予想された。両遺跡出土遺物の公表と詳細な分析報告が未だに無き現状では、資料不足の観は拭い得ないが、少なくとも石斧の断面形状の変化や彫器の有無といった観点のみでの神子柴→長者久保、或いは長者久保→神子柴といった本文化の編年の二説よりは、明確にその変化及びその要因、内容を指摘することができたとも考えられる。そこで、本章では長者久保→神子柴という編年の骨子を基軸に据えて、全国的に視野を広げることから、その細分の可能性の有無を含めた同文化の階梯的変化と各々の内容をより明らかにして行きたい。なお、同文化段階の資料は全国的に見れば莫大な数にのぼるし、未発表資料も多数存在する為、先の編年と個々の資料対比は行なわないこととする。単独資料は同文化理解の分布論的観点にあっては有意なものであるが、他に於いては意味を持たない單なる点でしかないと考える為である。

#### 〈長者久保段階〉

最初に本州地域に於ける神子柴文化の比較的良好な資料をセットで出土している遺跡の比較検討を行なってゆきたい。まず、長者久保遺跡と同様に石斧、石槍が石器組成の内に際立って凌駕した姿を示さず、しかも搔器、削器に加えて、彫器が安定して見い出される石器組成を持つ遺跡として



図2 石斧の研磨状態

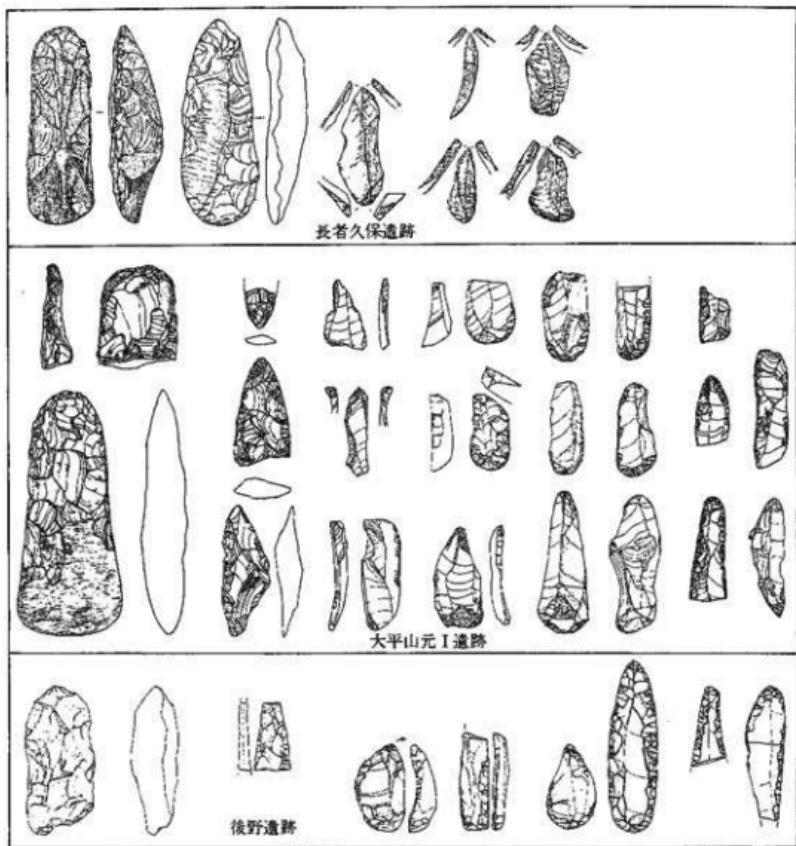


図3 長者久保段階の石器群

は青森県の大平山元I遺跡(註16)、茨城県の後野遺跡(註17)等があげられる。大平山元I遺跡からは石槍4点、石斧3点、彫器16点(うち彫搔器7点)、搔器8点、削器4点、錐1点が出土している。この他、大平山元I遺跡ではナイフ型石器1点と石鎌2点の出土が報じられているが、前者は削器、後者のうちの一点は石槍の欠損品と考えるべきもので、他の1点も調整加工がその形状から見て石鎌とは考え難い。出土層位からもその伴出には不安が残る(註18)。大平山元I遺跡の石器組成は、既に指摘されているとおり長者久保遺跡と極めて類似した内容を示している。とりわけ石器組成内に占める彫器の数量は、両遺跡間ではほぼ重複するかのようである。加えて彫搔器という限定性を伴う石器形態の組成参入は、両者の時間的併行関係を強く支持するように思われる(註19)。しかし、長者久保・大平山元I両遺跡間に看取されるこうした組成レヴェルでの類似性とは別に本文化を代表する石斧、石槍等の石器形態へと目を向けた場合、両遺跡間には類似点がむしろ少ない

ようにも見受けられる。例えば石斧に関して言えば、長者久保には断面が三角形状を呈する刃部磨製の丸ノミ型石斧が存在するが、同様な石斧を大平山元Iに認ることはできない(註20)。しかも扁平な石槍状の小型石斧の大平山元Iでの欠落、一方直線的刃部を持つ石斧の大平山元Iでの存在等、両遺跡間の石斧には差異が目立つようでもあり、石槍も長者久保例はより左右対称の形状を持ちその最大幅が基部付近に存在する。こうした点に注意すれば、或は両遺跡間には時間差を認め得るという見解も提示されようが、数量的に稀少な遺物相互の比較は一般性レヴェルでの比較とはなり得ないであろうし、長者久保の丸ノミを取りあげるまでもなく石斧、とりわけその刃部は欠損後に再生が繰り返し行われる可能性が強く、形状もそれに伴い変化する蓋然性が高いものと考えられる。一見差異の目立つ両遺跡間の磨製の石斧も、断面形状を別にすれば刃部、頭部そして側縁形態等に於いて類を見ることができようし、長者久保の打製石斧は大平山元I例に比較的類似した形態を持つと捉えることもできる。先に示したような差は、あくまで遺跡単位での顕存化に於ける差異として捉えておくこととしたい。同様なことは後野遺跡の石器群に関しても言い得るところであり、石器組成上の類似性と共に伴出石斧の形態は長者久保例と若干の違いが認められるが、これもあくまで個体比較による差と見做し得るものであろう。断面形状や丸ノミ状の刃部という属性での類似点は少ないものの、併行した側縁と丸みを帯びる刃部及び基部の形態は相互に共通したところである。石槍、石斧、彫搔器、搔器を含む石器組成に於いては、数量的な差は存在するものの長者久保・大平山元I両遺跡と強い類似性を示している。だが、後野遺跡の石器組成のうちで注意しなければならないことは、そこに単独の彫器が見い出せない点である。石器組成内で安定した彫器数量の認められない長者久保・大平山元Iとはこの点に於いて隔たりを感じざるを得ない。両遺跡に近似した大森勝山遺跡でも安定した彫器の出土が認められることからも、彫器存在の優位性は長者久保段階の一般的傾向と受けとめるべきである。後野遺跡は、後出する神子柴遺跡等に於いて彫器が組成しない事実等を考慮する時、長者久保段階にあってもやや新しい段階に対比すべきものなのかも知れない。同様な観点から見ると、後野に存在する尖頭状の搔器——石刀(縦長剥片)の端部に凸状の刃部を設けると共に素材の両側縁に調整加工を施し、打面部側に於いて尖頭状の基部を作出している——は、大森勝山には類似品が見受けられるものの、大平山元Iや長者久保等の遺跡には認めることのできない搔器型式で、大森勝山遺跡例(註21)などに比べて後野例はより面的な調整へと変容し、それは片面加工の石槍を想起させるような調整である。同様な搔器型式は、神子柴遺跡と同じぐ石槍、石斧を中心とした石器組成を示す唐沢B遺跡に存在しており、こうした後野遺跡の長者久保段階での後出性を強く支持するように思われる。長者久保と同じ東北地方にも後野遺跡併行と考えられる山形県東山・紺野遺跡(註22)がある。東山・紺野遺跡には長者久保の石槍類似の木葉形状を呈する石斧をはじめとし、石槍、削器、搔器が存在しており、搔器のなかに後野と同様な尖頭状のものも含まれている。

このように各資料を検討すると、長者久保段階は前後二つの細分が可能となってくる。石斧、石槍は大きな型式学的变化を伴わないものの、共に石器組成への安定した参入が認められ、とりわけ石槍は東山・紺野を念頭におく限り、新段階への移行に伴いより安定化の傾向が予測される。石槍の最大幅は、長者久保例のように基部付近にではなく、身部付近へ移動し、その形状も左右対称形

状に近くなる。おそらくそうした背景には、器面調整と共に側縁調整をほぼ全周に施していることが一つの要因として関与しているものであろう。石斧に関しては資料が限られている為か大きな変化を認める事はできないが、いずれにせよ後野や東山・紺野例から断する限り、長者久保からの伝統を色濃く残存していることは事実である。新段階に於いて彫器はほとんど見い出されなくなり、後野でも彫搔器は認められるが単独の彫器の出土は認められていない。東山・紺野にあっても同じ状況を示している。前器は同じく石刃の側縁に調整加工を施したものが存在するが、搔器のなかには調整が基部にまで及んだ木葉状を呈す尖頭状搔器が特徴的に組成する。以上、ここにあげた諸点をもって長者久保段階を二つに細分することが可能かと考える。今後の良好な、特に組成レヴェルでの良好な資料蓄積を期待するところではある。

#### 〈神子柴段階〉

さて、次に神子柴段階の細分の当否に関して触れて行くことにしてゆこう。大形の石斧と優美な石槍群を特徴とし、石器組式内で両石器形態が安定して見い出される神子柴に強い類似性を示す遺跡とし同じ長野県の唐沢B遺跡(註23)がある。唐沢B遺跡からは石斧10点、石槍4点、彫器1点、搔器2点、石刃2点、磨石2点、その他に剝片を含めて30点程の石器群が、神子柴と同様に橢円形のプランを形成して検出されている。まず第一に、こうした石器組成の点で神子柴遺跡と強い共通性を示すものであるが、ここで看過できないのは、唐沢Bでは石器群のうちに彫器を組成する点である。先の両側縁へ調整加工の施された搔器の存在と共に神子柴に比べ唐沢Bのより占相段階への時間的位置付けが可能なことを示唆している。質量共に安定している石斧、石槍に目を向けた場合にも、神子柴例と唐沢B例との間には若干の型式的ギャップが導き出されてこよう。すなわち前者にあっては、神子柴例のほとんどが石器最大幅を刃部付近に有する、大略橢形の形態を有するのに對し、唐沢B例は身部中央部付近にそれを持つ。加えて、石斧刃部を中心とした研磨度の割合とその全体に占める比率も両遺跡間には差異が認められる。神子柴に認められた小形で、しかも裏面側に向かって連続的に剥離することによって刃部をあたかも断ち切るように作出した石斧も、唐沢B遺跡からの出土が報じられており両遺跡間の類縁関係を良く示しているが、唐沢例はその基本的形態を大形の石斧形態に拡張している。すなわち刃部は直線的であるものの、側縁はやや湾曲して丸みを帯びた基部へと連続する。一方、神子柴例は実見した限り二例あり、一つは唐沢例と同様に併出した大形石斧の形態に準ずるもの、もう一例は湾曲した側縁と尖鋭な基部を併せ持つ、概形が木葉形を呈する製品で、言うまでもなくその形態は石槍に相通ずるところである。このように見倣すると、神子柴にある他の小形石斧一例も加えて、小形の石斧と石槍との関係が、例えば製作技術やその形態等に於いて極めて流動的であることが窺い知れてこよう。刃部を除き側縁及び基部形状、そして調整加工、概形等を見る限り小形石斧と石槍とは製作工程を共有している。反対に本例を石斧と見倣さない場合、すなわち石斧とせず石槍とした場合にも、その基部への研磨技術の適応は両器種間の技術的重複性を物語るものとすべきであろう。いずれにせよ、石器の種別を越えた製作技術の共有という事実が認められる神子柴の石器群は、それが独立した状態にある唐沢Bよりも時間的に後出することを明示している。石槍に目を転じても、唐沢B遺跡では柳葉形や木葉形を呈する大形、中形の石槍がそれぞれセットとして認められ、各々が最大幅を基部付近に持つなどして神子柴

に類似している。だが、神子柴例が全て両面調整品であるのに対して唐沢例は、そこに周縁調整や半両面調整の石槍が含まれており、より古相的な様相を示している。先の後野遺跡に存在した周縁調整器と彫器の参入という石器組成、そして石斧、石槍の神子柴との比較によって抽出される先行的様相、こうした唐沢B遺跡の石器群の諸点をもって神子柴段階に於ける編年的細分を唐沢B → 神子柴というように想定しておくこととしたい。

このようにして神子柴段階は、唐沢Bと神子柴という二階級の変遷が考えられる訳であるが、本州地域での広がりはどうであろうか。まず関東地方では唐沢B併行の遺跡として東京都井の頭A遺跡(註24)がある。井の頭Aは石槍を主体とした石器組成を示しそこへ削器、石斧等が加わったもので、削器のなかには素材の側縁や末端に調整加工を施したものや刃部を尖頭状に作出したもの等、幾つかの型式が認められる。石槍は中形と小形のものによって占められ、いずれも石器両面に調整加工が施されており、その形状は木葉形と菱形を呈する。石斧は概形が橢円形状を呈する打製品でその最大幅は身部中央部に存在し、刃部への研磨は施されていない。井の頭A遺跡の石器群に見られるこうした石槍の凌駕、その型式性、彫器・搔器の欠落、削器の型式的安定、石斧型式等は、その唐沢併行への時間的帰属を明示している。井の頭Aと同様な石器組成は神奈川県の上野遺跡第1地点(註25)にも見られ、そこでは唐沢例に通ずる面的調整を施した尖頭状の搔器の出土があり、その共時性を一層補強する。ただし上野遺跡には他に類例を見い出し難い敲打により器面が整形された石斧が出土しており、時間的差異を想起させるが、その概形、断面形状もそれぞれ橢円形・三角形形状を呈し、側縁の面的構成を含めて唐沢や神子柴に相通するものとも考えられる。上野遺跡の石器群については後述するのでこれ以上の論及は重複するので避けるが、上野例に見るよう石斧型

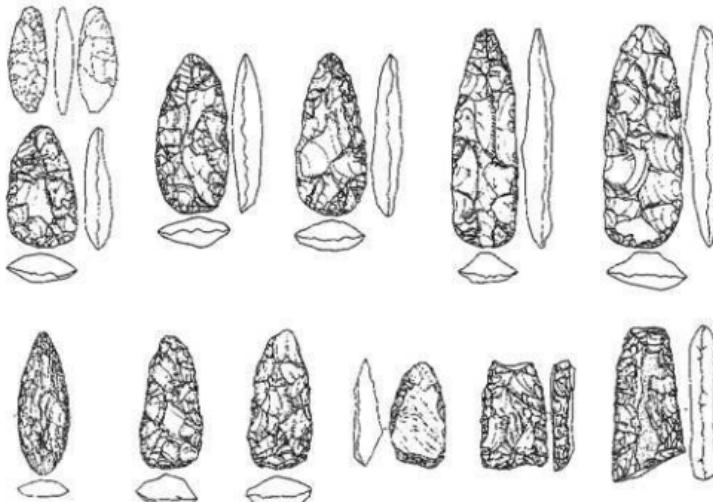


図4 大坂遺跡(上)と中道遺跡(下)の石器

式は、神子柴文化のうち同階梯にありながらも実に多様な形状を持つものであることは注意すべき事項であろう。同様な点に於いて看過できない石器群として埼玉県中道遺跡(註26)出土の資料がある。中道遺では、石斧を主体とし他には木葉形状の石槍と削器が若干伴うのに過ぎないが、石斧は唐沢や神子柴例のように断面が三角形、或いは台形といった形状を呈さずレンズ状で、丸みを持った刃部に続くやや湾曲した側縁は、交叉して山形の石斧基部を形成しその形態は三角形状を呈し、所謂石鎧に酷似する。同様の特徴を持つ石斧を唐沢Bや神子柴に求めることは不可能であるが、中道にはこれらの石斧に混じって刃部を断ち切るように調整を加えて比較的小形の石斧が二例伴出している。この石斧は長者久保段階には認め得ず、神子柴段階を特徴付ける石斧型式の一つである可能性は先に指摘したとおりである。すると神子柴段階には中道例のような石斧群も存在するものと考えなくてはならない。中道のこれ等石斧形状や石槍から断じる限り神子柴との関連が色濃く認められ、両者は時間的にはほぼ併行するものと考えておきたい。すると中道と類似した石斧群から成る福島県大坂遺跡(註27)も東北地方に於ける神子柴併行の石器群と見做さなければなるまい。このように石斧型式を準準とすると刃部が撥形に開かず、両側縁が平行した石斧群を持つ山形県上屋地A遺跡(註28)、岩手県持川遺跡(註29)、同夏油温泉遺跡(註30)などは、それよりも若干古い、唐沢併行への時間的位置付けを有するものであろうことが導き出されてこよう。

神子柴段階の良好な資料は、現在、関東、東北地方に見い出すことは困難な状況にある。だが、こうした現状は神子柴段階の存在を直ちに否定するものではない。何故ならば神子柴遺跡で出土した石斧、石槍、所謂神子柴型のそれであるが単独の出土例は極めて多いからである。事実、武藏野台地や下総台地に於いては神子柴型の石斧や石槍がほぼ単独に近いかたちで数多く発見されており、今後、神子柴遺跡と同様に石斧、石槍を中心とした石器群がセットとして発見される可能性は高いものと考えている。

神子柴文化の時間的経緯は、長者久保段階と神子柴段階とに大きく二大別され、各々の段階は少なくとも二つの階梯への細分が可能であることがこれまでの検討により抽出されたかと考える。以上の検討から本州地域に於ける神子柴文化の変遷は明らかとなったが、その編年に拠る限り最古の長者久保段階、わけてもその古相段階の遺跡は全て本州の北半部、青森県を中心に認められ、本文化の伝播経路の姿を物語っている。先の本州地域の神子柴文化編年から断する限り、その出現は東北地方に於いてより古く、順次、関東、中部へとその時間的経緯と共に分布を拡げており、同文化の流入が北海道を含めた北方地域からのものであった可能性の高いことを示唆している。そこで、以下、北海道地域の同文化期の石器群を検討俎上に置き、同地域での神子柴文化の変遷を追求し、併せて本州地域との関連、或いは相違を見い出して行くこととしたい。

#### 〈北海道に於ける神子柴文化の変遷〉

北海道地域に於ける神子柴文化に属する石器群の存在は周知のところであり、遺跡数や遺物量も本州地域のそれと比較した場合、決して貧弱なものではない。だが從来、北海道の神子柴文化の石器群は、細石刃及び細石刃核の伴出や、或いは反対にそれらを出土する遺跡での石斧、石槍等の神子柴石器群の伴出という現象をもって不當にも細石刃石器群の一組員と見做されてきた背景がある(註31)。その為か北海道内での神子柴文化の段階的存在が積極的に評価されたことは少なく、当

然の帰結として同文化の変遷がどのようなものであったか、という基本的な問題に関しては現状に於いてもほとんど不明と言わざるを得ない。

さて、北海道での神子柴文化の古相段階、すなわち長者久保段階の遺跡としては、モサンル遺跡(註32)が存在する。モサンル遺跡からは、横断面が三角形状を呈する石斧と共に彫器、搔器、彫搔器、削器等が出土しており、一見して長者久保段階に特有な石器組成を持つことが明らかである。とりわけ搔器、削器の類と彫器は石器組成のうちにあって安定した位置を占め、それ等の各々の型式は長者久保、大平山元Ⅰ、そして大森勝山などといった長者久保段階の古相遺跡の内容に相通ずるものである。例えば小形円形搔器と石刃素材の搔器の存在は大平山元Ⅰに通じ、搔器の基部を両側縁から調整加工を加え尖鋒に仕上げた尖頭部の基部を持つ搔器は、周縁加工の搔器と同様に大森勝山に類例が求められる。石刃の両側縁、特に打面部側を中心に調整加工を施す削器もモサンルと大平山元Ⅰとでは共通している。彫器でも角ノミ状の彫器や双面調整等の存在は大平山元Ⅰ、長者久保に共通している。モサンル遺跡出土の石斧は刃部が撥形に開く、一見特異な形態を持つものであるが、大平山元Ⅰ遺跡には同型式と考えられる石斧欠損品が存在する。

以上の如く、モサンル遺跡は長者久保段階に特有な石器群を組成し、各々の石器型式保有というレヴェルでも本州地域の同時期の遺跡と強い類似性を示している。しかし、モサンル遺跡の石器組成のうち一つ見落すことのできないのが石槍の欠落である。石槍の欠落にのみよってモサンル遺跡の上記したような編年的位置付けが変更されることはないと推察するが、これまでには、石槍の欠落と1点のオショロッコ型細石刃核の伴出がモサンル、ひいては北海道に於ける神子柴文化の存在及びその編年を考える場合、一つの障害となっていたであろうことは否めない事実であろう(註33)。しかしながら長者久保段階の古い時期にあって石槍は絶じて少量であるし、大森勝山例に見られる如く石槍、石斧を組成しない場合も存在する。モサンルの石器組成も同様に捉えるべきなのかも知れない。事実、モサンルには彫器素材(或いは転用の可能性もある)の両面調整石器と石槍の欠損品とも見られる石器が存在し、石槍の欠落も遺存差の範疇で理解しておきたい。

このモサンル遺跡と同様な石器組成を示す遺跡として東麗郷2遺跡(註34)があげられる。東麗郷2遺跡の石器組成は數型式から成る搔器、削器を中心とし彫器、彫搔器、石斧等を含んでいる。だが、モサンルとは相違ここでは石槍が安定して組成参入している姿が看取できると共に、彫器はむしろ少量で型式的バラエティも少ない。加えて、これらの点と呼応するようにモサンル遺跡に特徴的であった尖頭状の削器や搔器がここでは見受けられず、東麗郷2遺跡の長者久保段階での時間的後出性を物語っている。

資料的には確かに少ないので、この二遺跡の石器群をもって本州地域の長者久保段階と対比しえると考えておきたい。川向・吉田遺跡(註35)にもほぼ同様な石器組成が認められ、いずれと併行関係を持つかは明らかとし難いが、北海道地域に於ける長者久保段階の遺跡として留意すべき必要があろう。

次に、神子柴段階に対比される石器群を検討してみたい。北海道地域での神子柴段階を考える場合、極めて重要な遺跡として上口A遺跡(註36)がある。上口A遺跡には丸みを持った刃部、基部と湾曲した側縁を併せ持つ長楕円形状を呈する典型的な神子柴型石斧が3点存在し、ここに見る石斧

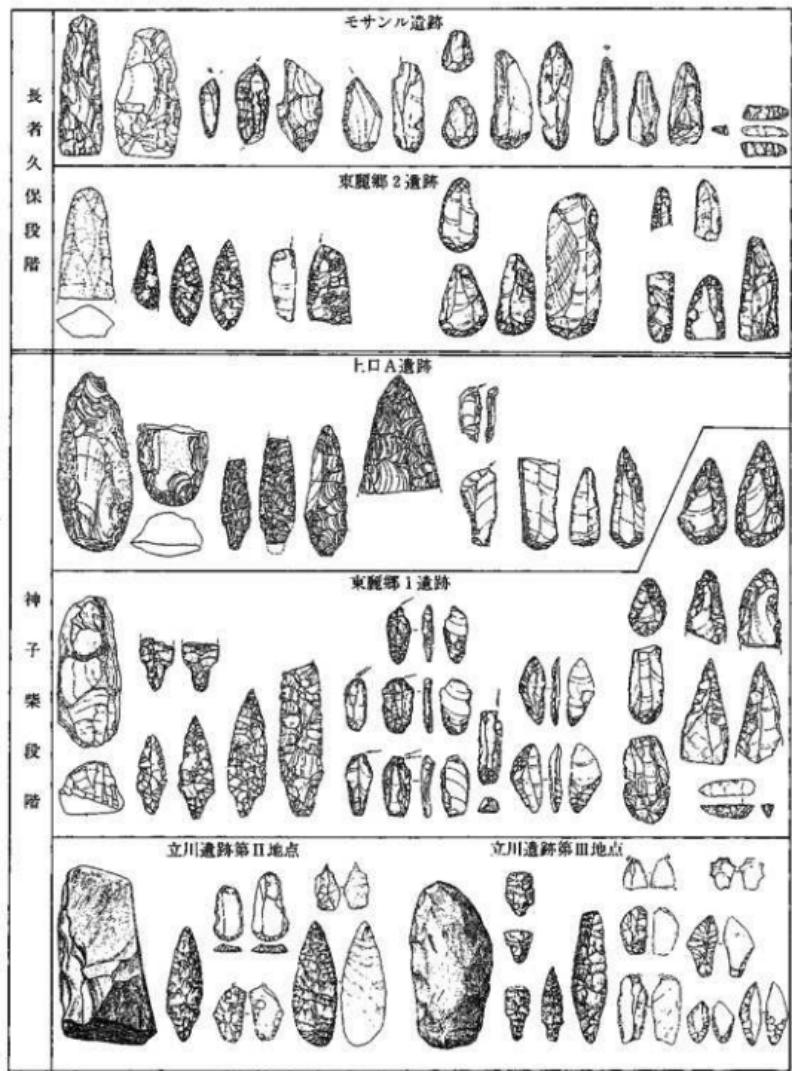


図5 北海道の神子柴石器群の変遷

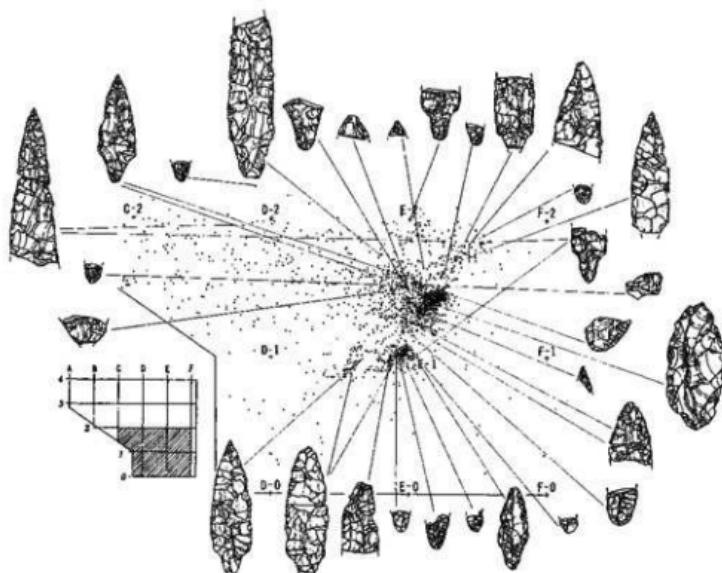


図6 東龍郷1遺跡のブロックと有茎尖頭器の分布

の諸属性は唐沢B例や神子柴例に酷似している。加えて片刃という刃部形状と台形状の横断面形状は、上口Aの神子柴文化中の後出性を物語っており、刃部研磨の状態、最大幅の位置、全体形状等を加え総体的に評する限り唐沢Bに併行する編年的位置付けがなされてこようか。伴出している尖頭状の基部を持つ搔器の存在は、このような時間的対比を補強する資料のようにも思われる。だが、ここで看過できない点がある。上口A遺跡ではこうした石器群に有茎尖頭器を組成することであり、出土している有茎尖頭器も複数存在し、しかもその型式学的検討からは最古型式の有茎尖頭器と目されている。このように上口A遺跡は石斧や搔器の各型式は長者久保段階の伝統をむしろ色濃く受け継ぎながらも、有茎尖頭器という神子柴文化には認め得なかつた新しい石器形態を含む点に特徴がある。この上口A遺跡に見る石器組成を、単に有茎尖頭器の混在した姿と見做すことはできない。何故ならば同様な石器組成は中本遺跡(註37)、広郷31遺跡(註38)、広郷20遺跡(註39)、広郷角田遺跡(註40)、日出-11遺跡(註41)にも認められ、さらにタチカルルシャナイ第V遺跡(註42)や立川第II・第III遺跡(註43)へと引き続き看取られるものだからである。とりわけ重視すべきは近年報告された東龍郷1遺跡(註44)で、ここでは同一層準に石器群が整然としたブロックを形成しており、有茎尖頭器の該期石器群との共伴関係が動かし難いことを明示している。東龍郷1遺跡では有茎尖頭器の他に石斧、石槍、搔器、削器そして彫器を組成している。ここに見る石器組成は確かにモサンル、東龍郷2、上口Aと異なるところが少ないようでもある。だが、例えば搔器などは全周縁に調整加工の施された木葉形状を呈すものが特徴に存在し、後続する立川第IIなどと様相を同じく

する。この彫器と共に見落すことのできないのが彫器で、東麓郷1遺跡には彫彫器が1点存在するものの、他には周縁に調整加工を施し、とりわけその基部に入念に施した彫器で、荒屋型彫器に類似した形態を有す。彫器の楕形はペン先形を呈し、周縁加工を施した側縁を打面に右肩から左肩にかけて加筆を行い彫刀面を作出し、石器長軸と彫刀面とは比較的大きな角度をもって交叉しており、基部裏面の調整と共に本彫器の型式学的特徴を構成する(註45)。少くともこうした彫器型式は長者久保段階には認められず、唐沢段階に北海道地域に於いて凌駕する彫器型式と捉えることができるかも知れない。同様な点で留意すべきものは所謂「立川型ナイフ(註46)」と呼称された石器で、これは既に指摘されているようにこうした彫器型式のブランクの可能性が極めて高い。同じ「立川型ナイフ」はタチカルシュナイ第V遺跡や立川遺跡第III等に顕著に見受けられる。ただし、これ等の遺跡の石器組成のうちには側片の側縁の一部を加工し、角状の端部を作出した特徴的な筆を組成しており、東麓郷1遺跡とは若干の時間差を考慮すべきであろうか。すると北海道に於ける唐沢段階は、上口A→東麓郷1→タチカルシュナイ第V・立川IIIという変遷が導き出されてくる。ここで抽出される石器組成を中心とした編年案は、有茎尖頭器の型式学的検討から導き出された編年とも重複し、矛盾するところがないように思われる(註47)。

#### 4. 神子柴文化をめぐる諸問題

前章までの分析、検討により神子柴文化の石器群の組成とその時間的変遷が素描できたものかと考える。本論のこれまでの分析結果からすれば、同文化は編年的に大きく長者久保段階と神子柴段階とに二大別され、各々が少なくとも新旧二つに細分される可能性のあることが示唆できた。そうした編年を汎日本的に試みたのが第I表である。神子柴文化と第I段階、すなわち長者久保段階の石器群を出土している遺跡は北海道、東北を中心に認められ、その新段階に至って一部関東まで及んでいる(註48)。こうした長者久保段階遺跡の北高南低傾向に対して、神子柴段階の遺跡はむしろ

表 神子柴文化の編年

段階 \ 地域	中 部	關 東	東 北	北 海 道
長者久保段階	(+)	(+)	長者久保 大平山元I 大森勝山	モサンル
	(+)	後野A 東山越野	東麓郷2 吉田	
神子柴段階	唐沢B (宮ノ入)	井の頭A 上野 中道	上屋地A (持川) 大坂	上口A 日出一11
	神子柴倉 横	上ノ台 (大宮BP. NO 4)	月山沢 (沼ノ平)	東麓郷1 立川III

中部、関東を中心に認められ、神子柴文化の時間的推移に伴う遺跡分布の濃淡が指摘できようか。このような傾向は、確かに從来から言われ続けてきたように神子柴文化の北方起源という、その文化系統の姿を如実に物語っているものと評すべきではある。ただし、これまでの同文化の系統は類似遺物が大陸（シベリア・沿海州）に分布していることを論拠としものであったが、このように石器組成の変化やそこに含まれる石器形態の型式的変化を追求するなかでも列島内の神子柴文化の動態が抽出できるのである。ここに提示された編年表からもその源郷土の特定は行ない得ないにせよ神子柴文化の北方起源説の正統性が、そして同文化が列島内を南下するが如き伝播経路をもっていたことが改めて把握されてこよう。編年表、並びに本文中に取りあげられた各遺跡の編年的位置とその分布を考慮すれば、長者久保段階は大きく列島内に分布を拡げた段階であり、一方、神子柴段階は同文化が列島内にて発展した姿を示している、と受けとめることもできようか。神子柴遺跡に見る石斧、石槍両石器群の型式的及び量的安定性の生成背景には、こうした同文化の地域的適応と発展があったものと解すべきなのであろうか。

さて、本文の目的は神子柴文化の石器群の検討を通して同文化の編年、わけても北海道を含めた汎日本的な神子柴文化の拡がりを確認し、その相互の関連を石器組成と型式学的検討を通じて抽出し時間的に位置付けることになった。一応前章までをもってその検討とし、以下、本章では先の目的に基に行った資料集成及び分析の過程で警視した神子柴文化の問題点を取りあげ、その整理と今後の研究の課題と方向性を提示できたならばと考える。

#### 〈土器共伴の問題〉

神子柴文化の石器群は、從来、先土器終末或いは晩期旧石器、中石器、縄文草創期等々と把握され、その呼称からも窺われるよう土器を伴わない石器文化と考えられてきた。事実、神子柴遺跡や長者久保遺跡からは一片の土器も出土しなかったのである。しかしながら、1975年の後野遺跡、大平山元Ⅰ遺跡という次々調査により、長者久保遺跡に類似した石器群に無文土器の伴出が確認され、土器起源の問題はここに新たな局面を迎えるかのように思われた。だが、こうした神子柴文化の土器共伴の問題は、同文化の遺跡資料の稀少さに加え、一方で西北九州の泉福寺洞穴(註49)からの「豆粒文土器」の発見によって隅に追いやられてしまった感がある。その結果、現在に至っても土器起源の問題は、西日本を中心に展開していることは否めない事実であろう。むろん、こうした背景には福井、泉福寺両洞穴からの多量の隆起線文土器の出土、そして層位的連續性の基に出土した「豆粒文土器」が、その文様作出の点に於いて隆起線文と極めて類似し相互に型式的連續性が窺われるのに対し、後野、大平山元Ⅰの土器はいずれも無文土器で、神子柴石器群に伴出した、という事実レヴェルのみが強調されていたといふ見方もある。だが、前者の土器最古説も基をただせば細石刃石器群への伴出という事実レヴェルを大きな拠り所としていることは既に指摘された通りであろう(註50)。神子柴文化の石器群に土器が伴出した事例は後野、大平山元Ⅰ両遺跡の調査以後、少ないながらも増加する傾向にあり、今回、著者が同文化の全国的な資料の集成を行なう過程で少なくとも、両遺跡以外に八ヶ所の遺跡で土器の伴出が認められている。そのなかには近年、細石刃石器群との土器共伴を含めて話題となった上野遺跡も加えられているが、他は全て神子柴石器群との伴出で、全て無文土器である。以下、各地域単位に神子柴文化に帰属すると考えられる無文

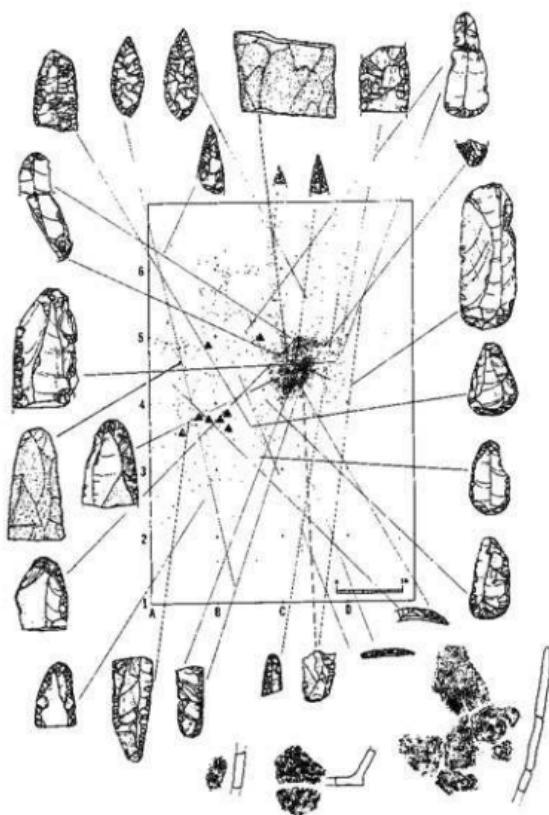


図7 東麓郷2遺跡遺物分布図（三角は土器）

北海道での類例は東麓郷1遺跡と同2遺跡に認められ、先に北海道地域の神子柴文化の編年で触れたように、前者が神子柴段階に、後者が長者久保段階にそれぞれ対比される。余談ではあるが、報告書では両遺跡出土の黒曜石の水和層年代が各々2点ずつ測定され、1遺跡では $10.700 \pm 600$ 、 $10.700 \pm 700$ 、一方、2遺跡では $12.000 \pm 600$ 、 $13.500 \pm 700$ の年代が算出されており、先の編年と同様に2遺跡が1遺跡に比べて時間的に先行することが明示されている。東麓郷1遺跡から出土した無文土器はわずかに1片であるが、有茎尖頭石器群によって構成されたブロックの中から検出された点に於いて貴重なもので、その共伴の可能性

は極めて高い。土器は「赤味を帯びた黄褐色」で、胎土に石英の混入が見られ、器面に黒い付着物がある。焼成は中位で器厚は $0.7\text{cm} \sim 0.8\text{cm}$ である」という。土器は胴部破片と考えられ、拓本を見る限り器面調整がなされているようである。

東麓郷2遺跡からは10片の土器が出土しており、うち8片は同一個体で復原されほぼ器形を窺うことができるものである。それによれば器高は15~20cmの小形の深鉢形を呈し、口縁は平縁で、口縁断面は多少丸みを持つ角形である。色調は赤褐色を呈し、厚さは0.7cmを計り、胎土中には白色の火山灰粒と石英を多量に含み焼成は悪い。他に出土した底部破片は胴部と底部の接合部に粘土を足して「く」の字状に整形している。底部は実測図から判断する限り、隅丸方形の形状を有するようである。なお、上器の口縁部に文様は見られず、その器面は丁寧な調整がされているという。これらの土器群は、一点が石器群のブロックの外縁部に存在するものの、他は全てブロックから5

m南西の地点にまとめて出土している。調査者は土器共伴の可能性は少ないとして否定的であるが、同じくブロック外に接した部分には搔器や削器、石斧、石槍があり、石器群とこれ等土器との共伴の可能性は極めて妥当性の高いものと思われる。

その他、北海道では増田遺跡(註51)からも無文土器2点の出上が報じられている。増田遺跡では径2mの円形のブロックのなかから、荒屋型彫器1点、細石刃45点、砥石(磨石)1点、石刀、剣片215点と共に出土したもので、厚さ0.6cm、表面は灰色で裏面は赤褐色を呈し、細砂粒を含んでいるという。増田遺跡から出土している荒屋型彫器とは、吉田や上口A、中本、東麓郷1などで出土しているものと同様に、基部を中心調整加工がほぼ全周し、

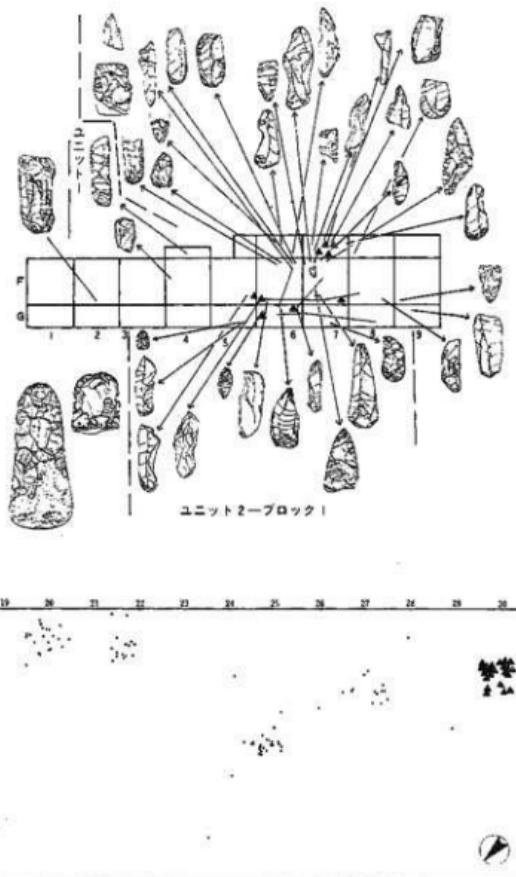


図8 大平山元I遺跡(上)と後野遺跡(下)の遺物分布図

その右肩から彫刀面作出の加擊が加えられたもので、やや大形の点、そして彫刀面加擊の為の打面が明確でない点などは吉田例や上口A例に類似する。伴出した細石刃とされたものと同様な例が東麓郷で多量に出土されており、一律的に細石刃と評すべきものではない。明確な細石刃核の出土が確認されていない事実も十分考慮すべき点である。加えて北海道の神子柴石器群に散発的ではあるが磨石を伴うことは、増田遺跡も同様な位置付けが可能であることを間接的に示す材料のように思われる。増田遺跡出土の土器は、北海道の早期土器群に類似するとされているが、東麓郷2遺跡の土器も早期土器に対比されている事例を考え併せると、むしろ两者間の近似性を物語るものとして受けとめるべきであろう。

東北地方では、大平山元I遺跡と福島県の油王田遺跡(註52)で無文土器の出上が報じられてい

る。大平山元Ⅰ遺跡は、他の時期の遺物の混入の恐れのない、しかも石器ブロックのなかから発見された資料であり、石器との共伴は疑いようのないところである。出土した土器は32点でうち9点は口縁部であるが、いずれも文様を持たない無文土器である。色調は黄褐色を呈するものと灰褐色を呈するものとがあり、その厚さは0.5~0.8cmで胎土に石英、長石、角閃石等を含み、若干植物性纖維を含む可能性のあるものも存在するという。土器の口縁はほとんど直上し、器面には入念な整形が認められる。底部破片は東麓郷2遺跡例に酷似するもので「く」の字状を呈して胸部へと連続し、底部形態は隅丸方形を呈す。なお本遺跡で隆起線文と捉えられた土器破片は、器面の一部が剥落せずに残存したものと考えられる(註53)。

油王田遺跡出土の土器は総点数8片で、拓本等がなくその詳細は不明だが、報告によればその厚さは0.5cm前後で、胎土中には石英、細砂粒子を含み焼成はあまり良くなく、器面の剥落している土器もあるという。石器群と同一層準から出土していることを考えると、本例も神子柴文化期の土器と捉えて差し支えないように考えられよう(註54)。

次に関東地方ではどうであろうか。関東地方では管見に触れた限りでは4遺跡で、神子柴石器群に伴う無文土器が報じられている。すなわち茨城県の後野遺跡A地区、同馬場尻遺跡A地点(註55)、東京都井の頭遺跡A地点、神奈川県上野遺跡第I地点である。順次、土器の出土状態とその特徴を見て行くことにしよう。後野遺跡からは2点の口縁部破片を含む37片の無文土器が出土している。土器は厚さ0.6cm前後を計り、石英、角閃石、細粒砂そして植物性纖維を含み、色調は赤褐色、黒褐色を呈する。土器の口縁部は湾曲が少なく、直立した形態を持ち、口径からすると隅丸方形の深鉢である可能性が高い。土器は拓本からも知られるように表面が凸凹になっており、手づくねによるものと考えられその器面、とりわけ口縁部付近には器面調整が著しく認められる。土器37点は石器ブロックから約5m離れて土器ブロックを形成している。

馬場尻遺跡は後野に比較的近い茨城県水戸市に存在し、ここからは総計17点の土器が出土している。土器は赤褐色や暗褐色の色調を持ち、厚さは0.4~0.9cmまでのバラエティを持っている。胎土中には石英、長石、そして若干雲母を含むものが存在し、全体的に焼成は良くなく、もろいと言う。土器は無文の土器と条痕を有する土器とに二分されるが、石器では前者がハードローム、後者がソフトロームにそれぞれ包含され、両者間には層位差が存在すると指摘されている。これらの土器は彫器を含む神子柴石器群に伴出し、層位も分布も同一のブロック内に収まる。

井の頭遺跡では2片の土器が出土している。井の頭遺跡のA地点では、石槍を主体とした神子柴石器群が土器出土地点から6m程離れて発見されており、両者の共伴性は高いものと言わねばなるまい。土器が石器ブロック中にではなくやや離れて存在する点、後野遺跡に相通するところがある。土器は2片で細かな属性についての記載は行なわれておらず不明である。

神奈川県上野遺跡から出土した土器は総数24片、いずれも小片であり口縁部や底部等は見られない。土器は無文で3~5mmの砂粒を混入し、色調は茶褐色のものと暗褐色のものとがあり、土器の厚さは1cm前後を計る厚手の土器である。上野遺跡では土器はニカ所にまとまりを持って出土し、その間の距離は約10mを計る。そのうちの一ヶ所のブロックはほぼ土器によって構成されるのに対し、もう一方のブロックでは細石刃や細石刃核の出土が認められ、その共伴関係について問題を投

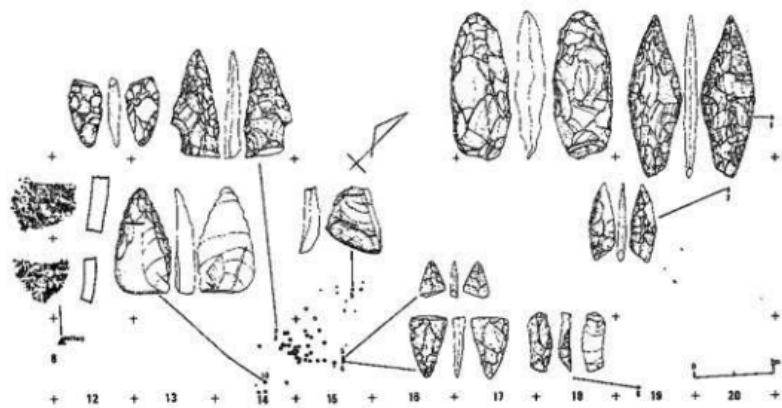
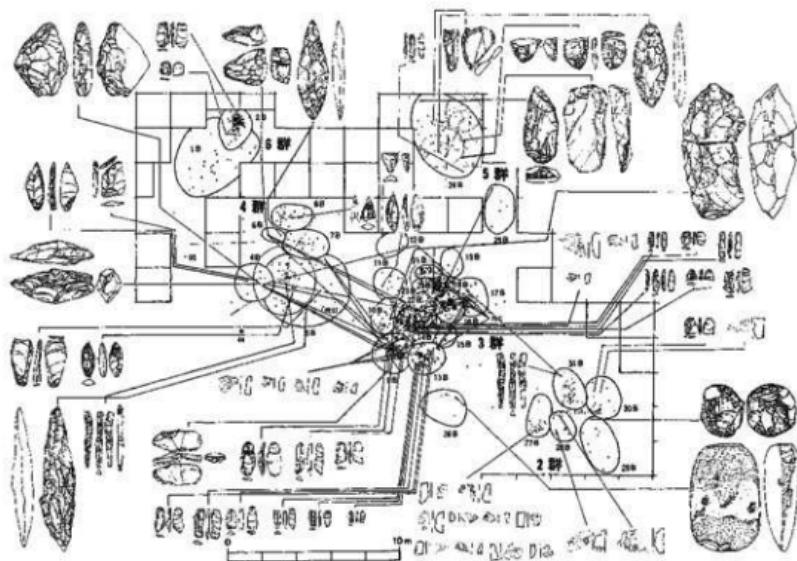


図9 井の頭遺跡A地点の遺物分布図



げかけている。

なお、中部地方では最近になって新潟県の大刈野遺跡で石槍を主体とする石器群と共に無文土器1片が発見されたという(註56)。また長野県の中島遺跡からも隆起線文の下層から無文土器が検出されたとの報道が一部で行われたが、報告書中では触れられていない。後者などは壬遺跡(註57)の下層土器との関連も気にかかるところではある。

以上、神子柴文化の石器群に土器の伴出した事例と、各遺跡での土器の特徴及び出土状態について触れてきたが、各遺跡が空間的に隔りを持ちながらも比較的類似した特徴を有していることに気付く。これは、土器の共伴について同文化石器群に他時期の土器が単に混入した、というように単純な反論ができるものではないことを示しているように思われる。土器はいずれも無文土器で文様、文様構成等の属性の比較は行ない不得、あくまで色調、胎土、形態等の比較にならざるを得ない。土器群は基本的に色調は赤褐色、胎土中に石英や砂を比較的多く混入し、器厚は0.7cm前後、口縁部を中心して器面調整がなされる点で一致している。形態的には東麓郷2や大平山元I、そして後野の土器から判断する限り隅丸方形の深鉢形を呈するものと考えられよう。とりわけ前二遺跡出土の土器底部の類似性は看過できぬものであろう。一方、こうした点と共に注意しなくてはいけない相違点も存在する。一つは大平山元Iや後野例は胎土中に明らかに植物性纖維を混入している点である。他の土器についても詳細な観察が必要となろうが、これが偶然でなければ土器は既に或る程度の改良をもって伝播した可能性さえ存在する。第2点として土器の器厚の相違であり、器種の違いや時間差もこの点に関しては考慮して行かなければならないが、上野例は他に比べ厚く、一方馬場尻例などはむしろ薄い傾向がある。資料的にあまり少量な為に、断定は行なえないものの北海道、東北例が比較的均一なのに対し、関東でのそれはバラエティがあるようにも思われる。この点については隆起線文土器との関連も問題となろうか。また後野で指摘された「手すくね」によるとされた土器製作技法も今後問題とすべきであろう。

無文土器を出土した遺跡では、その分布を見る限り二つの傾向が認められる。一つは大平山元Iや馬場尻、東麓郷1のように石器ブロックの内に土器が点在する例であり、もう一つは後野や東麓郷2、井の頭A例に見る如き土器が石器ブロックと隔りをもってブロックを形成する例(註58)である。こうした分布の二傾向がどのような背景の基に現象するものか、現状の資料をもっては明らかとはし難いが、この点で注意すべきは上野遺跡の土器出土状態である。細石刃石器群と土器とを共伴と見做す研究者もいる(註59)が、その点、確かに本文化層は上・下の文化層のブロックとの重複性がなく所謂文化層中の共存の可能性は極めて高いものと言えよう。ブロックの単位も比較的明瞭であり、この点でも土器と細石刃石器群との共伴は妥当なものと思われる。こうした点を認めながらも看過できないのは、一方では土器ブロックを形成しながらも(2群、27号ブロック)、他では3群の9・14号といった石器群ブロックの中にも土器が点在することである。後者の3群は4群のブロック群と頗著な接合関係を持ち、そこにも細石刃石器群が存在するが石槍・削器等も特徴的に見出される。加えて4群には本文化層の下位に位置する細石刃石器群文化層にも認められないナイフ形石器が出土している(註60)。仮に細石刃石器群と無文土器との共伴を唱えるとしたならば、当然のことながらそれら二者に加えてナイフ形石器、石槍、石斧をも同様に共伴の射程に入れ評価しな

ければなるまい。少なくとも著者の知る限り関東地方のみならず汎日本的に見て、石斧（刃部磨製）、石槍、そしてナイフ形石器を組成する細石刃石器群はないように思われる。上野の場合は、それに加えて土器を伴出するという。むしろ著者は、3群の北方約5m隔て石槍や尖頭状搔器を含む神子柴文化期の石器群が第5ブロックを形成していることから、先に指摘した該期土器分布の二傾向を考慮しつつ、本遺跡も後野例などと同じく石器群と離れて土器が分布或いはブロックを形成しているものと見做しておきたい（註61）。3群、4群に点在した石槍、石斧の類も同時期の所産と考えるべきことは言待たない。むろん、このような指摘のみで上野遺跡の細石刃石器群と土器との共伴を否定するつもりはなく、反対にそうした神子柴文化とそれ以前の文化との接触を想定しつつ、問題が複雑なだけに単に同一層準から出土したという論拠だけでなくより十分な分析の必要性をを説いておきたいのである。上野遺跡は額田大宮遺跡（註62）の事例などと共に、細石刃石器群と神子柴石器群の共存の当否という視点より改めて検討すべき資料のようにさえ考えている。

神子柴文化期に土器が存在するということは、これまで紹介した事例から判断して極めて蓋然性の高いものと考えられる。これ等無文土器を出土した遺跡の編年的位置を先の編年表から算出すると、既に長者久保段階から土器が認められると見做さなければならない。大平山元I→東麓郷2・後野→井の頭A・上野→東麓郷1という通時間的な神子柴文化での土器共伴を認めるならば、それぞれが保有する石器の型式性によって結ばれる同時期の遺跡に於いても、当然のことながら土器を共伴或いは保有していたと評価すべきであろう。そして今後、土器起源の問題は神子柴文化研究のなかで研究者一人一人が意識的に追求すべき重要課題として數えあげられねばなるまい。

#### 〈石器群の問題について〉

神子柴文化の石器群に関しては、とりわけその組成と石器型式の変遷に関しては前章にて詳細に検討を加えたところである。石斧と石槍とを主体とする当該石器群は、前半の長者久保段階に於いては彫器、搔器を比較的多く組成するのに対し、後半の神子柴段階に至っては彫器と彫搔器などはほとんど姿を消し、搔器や削器も若干減少するが、石槍、石斧は一層の型式分化とそこでの量的安定性を増す傾向にある。現状の資料から断する限り神子柴文化はその前半・後半を問わず細石刃石器群を組成せず、北海道を除いては有茎尖頭器の組成参入も認められない。同文化の編年から判断すれば、神子柴文化は日本列島の北側から順次南下するように伝播した文化であり、その後列島内で、わけても中部日本で発展した形跡が窺われる。このように認めるならば丸ノミ状や片刃の石斧のみならず石槍なども北方からもたらされた一種の「渡来石器」と考えるべきであろう。広郷角田や唐沢B、神子柴等で出している石斧を磨いた砥石なども、石斧と一体となって渡来した可能性がある。同様な点に於いて搔器、削器、彫器、彫搔器等に關しても、今後十分な論議が交されるべきである。そして注目すべきは、石器組成にやや不明な部分の残る北海道は除外して、本州地域では神子柴文化と細石器文化との連続性が認められないことであり、この点については以後、上野遺跡や額田大宮遺跡の十分な検討が望まれるが、長者久保段階では後野遺跡に見るよう両石器群間に明確な層位差が存在する事実があるし、大平山元I遺跡では両石器群が大きく地点を違えている。有茎尖頭器をも含めてこれら三者を一体的に捉え「複合石器文化（註63）」などと解することは、むしろ該期研究を後退させその本質を見誤る恐れさえ内包している。同一層内より一緒に出土したと

いう事例、しかも単数に近い事例は直ちに出土遺物の共時性に結び付けられるものではないことは火を見るよりも明らかであり、考古学的方法論はそこから第一歩抜き出る為にまずははあるのである。同様な意味で北海道地域に於ける細石器文化の石器組成も、むしろ単純遺跡の通時・共時双方の検討を通じて神子柴型石斧・石槍の組成の当否をチェックし直す必要があろう。

ただし、編年表を瞥見しても理解されるように長者久保併行の時期に、少なくとも中部やそれ以西に長者久保類似の資料が欠落しているからといって空白のままであろうはずがない。必ずやこの空白を埋める石器文化が存在しており、現地のところ福井洞穴や泉福寺洞穴での細石刃石器群の残存を見る限り、それは細石器文化であった可能性が強い。今後は、こうした共時態に於ける異石器文化系統の接点を見極めてゆくことが急務となろう。

言うまでもなく、このような研究と共に神子柴文化の石器群自体の発展の方向性を研究してゆくことも重要である。とりわけそうした方向性にあっては長者久保段階から神子柴段階への変化のより過程的な研究が不可欠となるであろう。そこでは神子柴系石斧の型式学的検討が重要なウェイトを占めることは言を待たない(註64)。所謂丸ノミ状の刃部を持つ石斧は前段階にほぼ限定されるようであるが、それを含めた長者久保段階の石斧群が一体どのように型式変化を遂げ、一部は神子柴例に、そして一部は持川例などに受け継がれていったものなのであろうか。他にも小形石斧などの型式変化も予想されるが、その点を含めて当然のことながら前者の中部日本での、後者の東北日本でのそれぞれ地域的な発展ということとも考慮されなければなるまい。事実、神子柴や唐沢Bなどから出土している「ワラジ状」を呈する重量感のある石斧の出土遺跡は中部北半にほぼ限定される傾向が見られる。これも地域的に発展した石斧型式の一つの姿として捉えるべきものなのであろう。この問題に關係して注意を促す必要があるのが、石斧型式とその出土状態にある。特定の遺跡の括出土遺物をその地域の代表的遺物型式と認定することは、或る意味で当然のことであるが、所謂デボ跡の場合は状況が異なる。岩手県持川遺跡や長野県宮ノ入遺跡では(註65)、いずれも大形石斧が小ピット中から重なり合った状態で発見された。前者は真岩、後者は安山岩系の石材によってそれぞれ製作されたものであるが、これらは石材ばかりではなくその側縁、基部、刃部の調整加工をはじめ研磨の有無、全体形状等に於いて極めて齊一性の強いものである。むろんこれら石斧群は各地域の石斧型式の範疇を大きく逸脱するものとは言い難いが、遺跡ごとの石斧属性の齊一性は型式的類似性を大きく上回るものである。著者はこの点を出土状態やその数量も加味して、個人単位の製作に要因した齊一性と解しており、その製作も時間的限定性を伴うものと考えている。このような石斧群をそのまま地域を代表する石斧型式を認定し、それを基準に他に類例を求めてゆくことは困難となろうし、誤った編年観が導き出される危惧さえ存在するからである。こうした所謂デボについては、別稿をもって再論及する準備を行なっているが、次の点は留意しておく必要があろう。現在、明らかにデボと考えられる遺跡として北海道陸別遺跡(註66)、岩手県持川遺跡、秋田県綾子遺跡(註67)、埼玉県大宮バイパスNo 4 遺跡(註68)、長野県横倉遺跡(註69)、同宮ノ入遺跡、福井県鳴鹿遺跡(註70)がある。これらの遺跡は特定の石器の出土に限られており、石斧と石槍に限定される。この点、神子柴や唐沢Bなどの遺跡は明らかに様相を異にしている。神子柴文化のなかにあって石斧や石槍の安定化は、先にも述べたように神子柴段階に至って認められる現象であり、両石器

の埋納もそうした最的安定化と無関係とは考え難い。持川や宮ノ入の石斧には、刃部形状が丸ノミ状を呈するものではなく、しかも横断面形状は台形やレンズ状のものが主体で、そうした点は明らかに神子柴段階の特徴を兼ね備えているものと言える。横倉、鳴鹿両遺跡の石斧の型式的特徴、そして後者での有茎尖頭器の埋納を考え併せると、デボという現象は神子柴文化のなかにあっても後半の神子柴段階より現われるものと推測されよう。加えて各遺跡の埋納遺物と遺物間相互のチェックを行うと、その初期には石斧が主体で、後期に石槍・有茎尖頭器が埋納されていったものと考えられてくる。所謂デボが通常の生活跡の遺跡とどのような結び付きを持つのか、デボは単にデボの分析だけでは有効な視点を持ち得ないし、さらに神子柴文化の物質的研究にはこのような総合的な視点と研究が今後ますます重要なものとなってくることは間違いないであろう。

有茎尖頭器の研究も、今後神子柴文化の研究のなかで追求して行かなくてはならない課題である。本州地域にあっては、神子柴石器群と有茎尖頭群とは明確に一線を引き得るようにも考えられる。ただし、東北地方に限ってみれば沼ノ平遺跡(註71)の石器群等を一括り得るものとすれば、神子柴段階の後半に立川系の有茎尖頭器が組成してくる可能性もあり、東北を中心とした古相立川系有茎尖頭器の検出とその組成を検討する必要があろう。北海道地域に於いては、神子柴文化の後半段階に明確に有茎尖頭器が組成入りしている。上口A遺跡や東麗郷1遺跡などは、こうした仮説を成立させる有力な資料であり、以前に指摘したように有茎尖頭器は北海道から本州へ伝播した(註72)ものであることが一層明瞭となった。それは、あたかも神子柴文化の伝播経路をなぞるかのような現象であったものと考えられる。

再三に渡って論及したように、神子柴文化の石器群のなかに本ノ木遺跡のような細身で長身の石槍は認められず、さらに抉入状の刃部を持つ削器の組成入りも神子柴文化には見られない。神子柴文化にあって削器や搔器はほとんど石刃、或いは石刃状の縱長剣片を素材とし、本ノ木とは石器組成のみならずその技術基盤を異にしている点は注意すべきであろう。從来言われてきたような未発達な茎部を持つ有茎尖頭器を神子柴文化のうちに見い出すことはできず、本ノ木の類似資料は隆起線文直後の段階以外に対比できるものがなくなるのである。本ノ木論争については、渡来石器の研究(註73)とこの神子柴文化石器群の研究とをもって一応の決着が見られるのではないかと思う。

### おわりに

本文では、特に未だ編年の定まっていない神子柴文化の時間的変化の姿を、石器組成とその内の石器型式の変化という二視点をもって抽出することに最大の力点をおいた。周知のように本文化期の資料数は極めて少なく、ここに示した編年も細部にあっては今後の資料増加に伴い訂正される部分もあるかも知れないが、長者久保→神子柴という編年的骨子に影響はないものと見ている。

神子柴文化は、多種の完成度の高い石器を組成している。だが、同石器文化は、例えば先土器時代のナイフ形石器文化から槍先形尖頭器文化へという変化のように一部が重複するのでもなく、前石器文化の影響を残している形跡がほとんど見られない。この現象の背景には、神子柴文化の石器群の完成度とその出自が強く影響しているものと考えている。少なからず神子柴文化を先土器時代の槍先形尖頭器文化や細石器文化の伝統のなかで生み出された文化と考えることは不可能であろう。

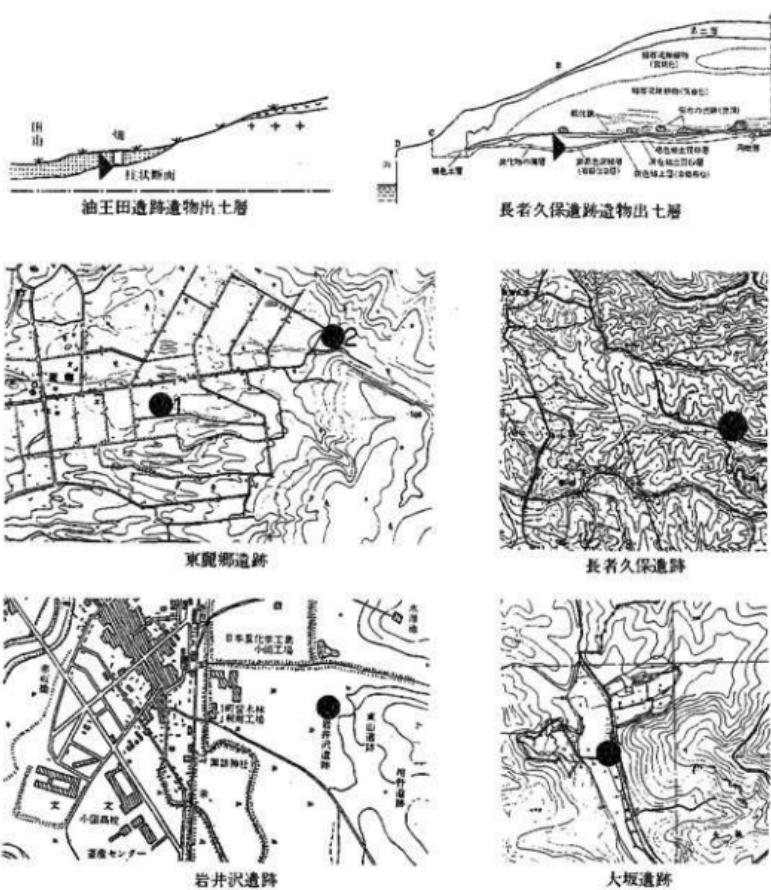


図11 神子柴文化期の遺跡立地

この点、神代文化の出現は考古学の小時代区分のうえでも重要な画期を示しているものと評価したい。

それは、いくつかの事象によって表わされる特質が神子柴文化のかなに存在するからである。第一に同文化の遺跡立地があげられる。長者久保遺跡は谷底とも言える低地に存在し、しかもその包含層中には流木やゴミシの翅が見られ、当時は湿地的な場所にあったことが知られる。ローリングの痕跡を留めない石器群の出土とその分布は、ここが生活跡であったことを示している。東麓鄭2遺跡や大坂遺跡、岩井沢遺跡なども全く同じ立地条件の基に形成されている。他のモサンル、立川、大平山元I、持川、横倉、鳴鹿などの諸遺跡も河岸段丘直上に占地しており、台地上や高原に遺跡集中を示す先土器時代とは著しい遺跡立地条件の差異を示す。当時の採集、狩猟経済下にあつ

て遺跡の占拠は、その生産性の高低を決する条件でもあろうから、神子柴文化は前代とは相違した経済構造を持っていたものとも考えられる。デボの現象も同様に評価し得るものであろう。さらに神子柴文化には既に土器が出現している点も看過できない。現在の列島内での複数遺跡に於ける神子柴石器群と無文土器との共伴は、とうていそれを混在や攪乱という次元のもとに片付けるべきものでないことを教えている。以後、土器起源の問題は、神子柴文化の研究の進展と共に、新たな局面をむかえるものと信ずる。いずれにせよ、神子柴文化の研究が今後、土器起源の問題ばかりではなく縄文文化の起源問題、さらに先上器と縄文の画期という時代区分の問題に派生することは十分に考えられるし、また我々はそうした研究姿勢を貫いてゆくべき義務を当然負っているものと自覚せねばなるまい。

今日は神子柴文化の編年とその問題点をとりあげて論を展開してきたが、検討対象が広範に及び、しかも思いのほか資料実見とその集成に時間がかかってしまった為、後半の論点に関しては十分に論を尽ぜずに紙面が尽きてしまった。次の機会に再論したいと考えると同時に、今後は先土器時代との比較・検討も進めて行きたい。あくまで今日はそうした方向性に則った一連の研究の為の序論としての意味合いを持つものと考えていただきたい。

最後になってしまったが、本文の構想から資料見学、そして分析・検討に至るまでの過程で次の方々にお世話をになった。ここに記して感謝の意を表したい。

麻生 慎、岩手県埋蔵文化財センター、江釣子町立歴史民俗資料館、岡本東三、大塚達朗、上伊那郷土館、鶴志田篤二、川口 潤、笠原信男、佐藤雅一、白石浩之、瀬川 滋、千田和文、東北歴史資料館、田中英司、寺崎康史、戸沢充則、土肥 孝、長沼 孝、中島 宏、西井幸雄、野辺地町立歴史資料館、松谷純一。

なお本論は、昭和61年度当事業団の研究助成による成果の一部である。

(1987. 9. 5 脱稿)

## 註

1. 文化化はこれまで「神子柴・長者久保文化」或いは「長者久保・神子柴文化」と呼称に統一がなかつた。筆者の見る限り、長者久保遺跡も神子柴遺跡も共に本文化を語る場合、極めて重要な位置を占めることは疑いないが、こうした呼称のそれぞれは自らの各遺跡への関与性、及びその立場を要因にしていくように思われる。以下、本論での分析結果からすれば、当然のことながら編年の見地より「長者久保・神子柴文化」と称すべきところではあり、筆者もそれがより好ましいものと考えている。だが、本文化期を代表する石斧や石槍については、その内容は不明瞭と言わざるを得ないが「神子柴型」と型式的な把握がなされ一般化している。現状に於いては、型式名の冠された遺跡名をもって本文化を呼称しておくこととしたい。

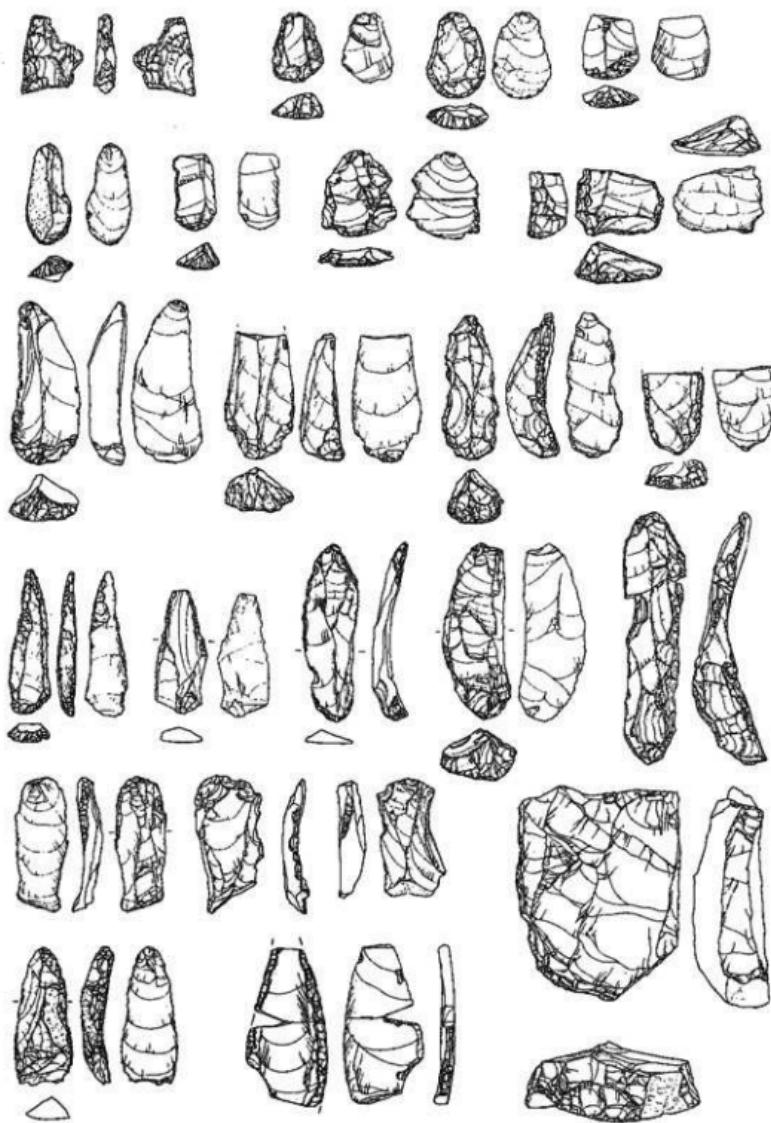
2. 林茂樹・藤沢宗平 (1961) 「神子柴遺跡——第一次発掘調査概要——」『古代学』9—3
3. 錦木義昌・芹沢長介 (1965) 「長崎県福井岩陰」『考古学集刊』3—1
4. 山内清男・佐藤達夫 (1962) 「縄紋土器の古さ」『科学読売』14—2  
山内清男・佐藤達夫 (1964) 「日本先史時代概説」『日本原始美術』1
5. 麻生 優 (1973) 「泉福寺洞穴の第四次調査」『考古学ジャーナル』88
6. 芹沢長介 (1967) 「日本の旧石器(6)」『考古学ジャーナル』13
7. 後野遺跡調査団 (1976) 「後野遺跡」
8. 三宅徹也・井上 久・天間勝也 (1976) 「大平山元I遺跡調査概要」青森県郷土館調査年報2  
青森県立郷土館 (1979) 「大平山元I遺跡発掘調査報告書」
9. 大塚達朗 (1987) 「泉福寺洞穴出土隆起線紋土器群理解の視座——「豆粒文土器」の編年的位置をめぐって——」『日本考古学協会第53回発表要旨』  
栗島義明 (1985) 「草創期土器型式変遷に於ける一考察」『信濃』37—4
10. 栗島義明 (1986) 「『渡来石器』考——本ノ木論争をめぐる諸問題——」『旧石器考古』32
11. 森嶋 稔 (1968) 「神子柴石斧をめぐっての試論」『信濃』20—4。森嶋 稔 (1970) 「神子柴石斧をめぐっての再論」『信濃』22—10
12. 間本東三 (1979) 「神子柴・長者久保文化について」『研究論集V』奈良国立文化財研究所学報第35冊
13. 中東耕志 (1985) 「土器出現期における局部磨製石斧の一様相——群馬県境町神谷遺跡の石斧——」  
『群馬県立歴史博物館紀要』第6号
14. 林 茂樹編 (1966) 「上伊那の考古学調査」
15. 平尾 黙・角鹿扇三・佐藤達夫 (1960) 「甲地村長者久保出土の石器」『上北考古学会誌』第1号  
山内清男・佐藤達夫 (1967) 「下北の無文土器文化」『下北』九学会
16. 註 8 文献
17. 註 7 文献
18. 石鎌が大平山元I遺跡以外で神子柴石器群に伴出した例はなく、しかも後続する隆起線文化にあっても石鎌の出現はその後半段階にある。大平山元例は形状もさることながら、石材は他の石器と異質な黒曜石であり、出土層位は表土である。ブロックの外側からの出土状況も考慮するならば、共伴と積極的に評価する根拠は見当らない。
19. 彫搔器に関しては、神子柴石器群の古相段階に特徴的に認められるが、それが他の石斧・石槍などと共にセットとして伝播してきたものか、或いは在地（特に東北地方）のナイフ形石器文化の彫搔器の系譜を引くものか、今後追求すべきであろう。
20. こうした点から中東氏は長者久保と大平山元Iとの時期差を説くが、果してどうであろうか。両者間には石器組成と共に以下に述べるように視点を変えれば強い類似性も認められるのである。
21. 村越 漸 (1975) 「大森勝山遺跡」『日本の旧石器文化2 遺跡と遺物(上)』有山閣
22. 加藤 稔編 (1972) 「上屋地遺跡」所収
23. 森嶋 稔 (1968) 「長野県小県郡真田町菅平B遺跡の調査」『日本考古学協会昭和43年度大会研究発表要旨』

- 森鶴 稔 (1970)『菅平の古代文化』
24. 三鷹市遺跡調査会 (1990)『井の頭池遺跡群A地点発掘調査報告』三鷹市埋蔵文化財報告第5集
25. 大和市教育委員会 (1986)『月見野遺跡群上野遺跡第1地点』大和市教育委員会
26. 東洋大学 (1976)『中道遺跡』
27. 松本 茂・佐藤俊雄 (1984)「大坂遺跡出土の先土器時代終末期の石器群」『大坂』福島県相馬郡飯館村教育委員会
28. 加藤 稔 (1972)『上屋地遺跡』
29. 鈴木孝志 (1968)「北上川中流域の無土器文化」『北上市史』第1巻
30. 鈴木孝志・鎌田俊昭 (1971)「北上川中流域の石器」「遮光器』5号
31. 北海道地域では、未だに遺跡出土遺物の共時性を前提とする傾向がある。層位的分離の困難な地域では石器群の技術的検討の以前に、分布論的検討が不可欠であろう。言うまでもなくそれはブロックの認定を含めた個体別資料分析を意味する。こうした努力と実践を行わざして「個体別資料分析への過信と住居に結びつく時間幅の概念の欠如を読み取ることができる」とは、個体別資料分析の優劣化以前の方法論的認識の欠如をこそ、そこに読みとることができる。ただし、近年北海道でもブロックの分析から石器群を見直す方向が表れており、今後の展開が待ち望まれる。
- 鶴丸俊明 (1987)「日本、考古——回顧と展望——」『史学雑誌』第96編第5号
- 長沼 孝編 (1985)『今金町美利河1遺跡——美利河ダム建設事業に伴う埋蔵文化財発掘報告書』財団法人北海道埋蔵文化財センター
- 松谷純一 (1987)『白滝第4地点遺跡』北海道白滝村教育委員会
- 杉浦重信 (1987)『東龍郷1・2遺跡』北海道富良野市教育委員会
32. 岩本圭輔 (1972)「北海道モサンル遺跡の石器」『歴史』第24号
- 芹沢長介編 (1983)『モサンル』東北大学文学部考古学研究会 考古資料集第4冊
33. 例えば註の32の岩本論文など。
34. 註31文献
35. 加藤晋平・藤本 強 (1969)『一万年前のたんの』端野町教育委員会
36. 註35文献
37. 加藤晋平・桑原 譲 (1969)『中本遺跡』
- 38~40. 加藤晋平・鶴丸俊明 (1981)『北見市史』上巻 北見市
41. 橋爪 実 (1985)『日出-11遺跡』訓子府町教育委員会
42. 吉崎昌一編 (1973)『タチカルシュナイ遺跡1972』遠軽町教育委員会
43. 吉崎昌一編 (1960)『立川』市立函館博物館
44. 註31文献
45. こうした彫器が細石器文化の系統のうちで解されるべきか、或いは神子柴文化の石器組成の一員なのか今後追求すべきであろう。本彫器型式の神子柴文化のなかでの後出性を考慮すると、より後者の可能性が高いようにも思われる。
46. 註43文献

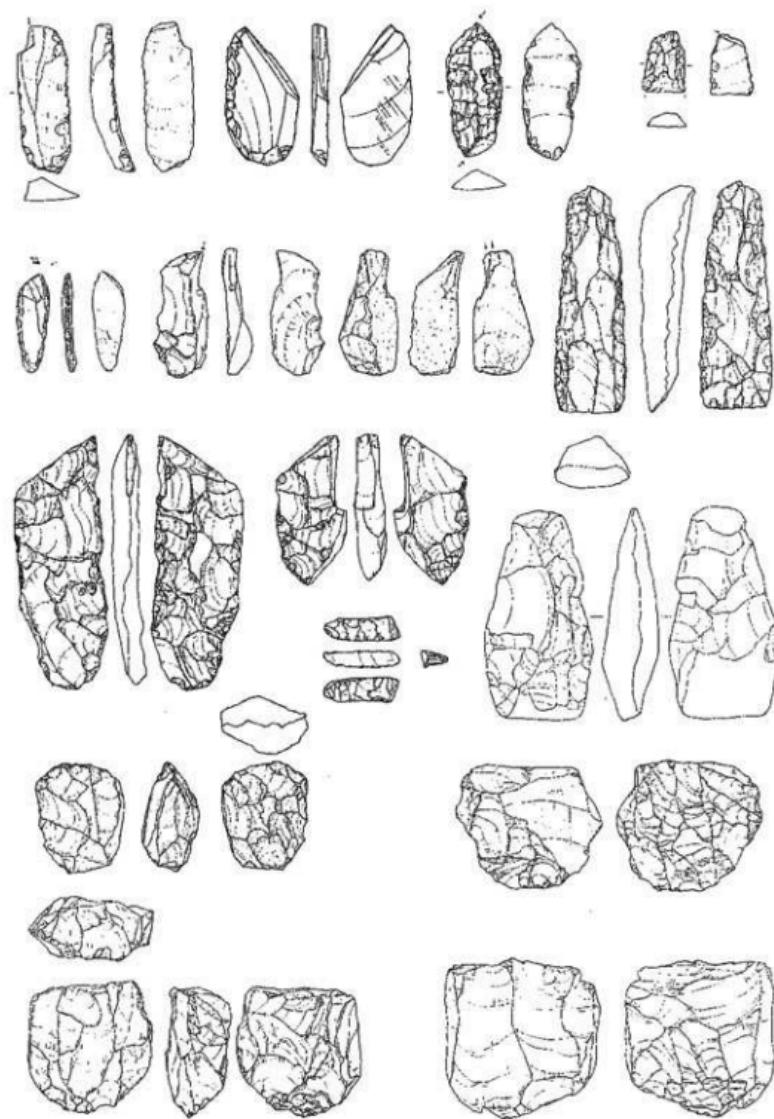
47. 栗島義明（1984）「有茎尖頭器の型式変遷とその伝播」『鞍台史学』第62号
48. ただし、中部地方の北部、新潟県などでは長者久保段階と併しき資料も存在し、今後注意を要する。
- 藤森栄一（1931）「北越後村杉の墨青質石器に就いて」『考古学』8—10
49. 麻生 優編（1984）『京福寺洞穴の発掘記録』佐世保市教育委員会
50. 佐藤達夫（1971）「繩文式研究の課題——特に草創期前半の編年——」『日本歴史』277
51. 鶴丸俊明（1975）「増田遺跡」『日本の旧石器文化2 遺跡と遺物（上）』雄山閣
52. 矢島俊雄（1980）「油王田遺跡出土の石器とその問題点」『油王田遺跡』福島県安達町教育委員会
53. 三宅徹也氏の御配慮により、土器を実見させていただいた時の観察による。
54. 油王田遺跡の石器群のなかには典型的な神子柴石槍が存在するものの、半磨製石錐や磨石・石皿などは混入と考えられる。ただし、後述するように遺跡立地の形態などは極めて長者久保などに類似し、この点も考慮して本文化期の所産であると見做した。
55. 茨城高等学校史学部（1979）『馬場尻遺跡A地点発掘調査概報』
56. 佐藤雅一氏の御教示による。
57. 国学院大学考古学研究室（1982）『壬遺跡 1982』
58. この点に關注して看過できないことは、後野例などは土器の外面にではなく内面に炭付物の付着が見られることで、実見した上器の大半に共通して認められた特徴である。焼跡等の伴出が形成要因の一つには屋外使用という場の機能を反映している可能性も想定されよう。
59. 上野遺跡の細石刃石器群と土器の伴出を共伴と解するのは確かに一つの見方ではあるが、著者が疑問とするのはそれを福井・泉福寺などと同様な様相として土器起源（西南日本の様相）の問題に直接的に対比することにある。問題はより複雑でより深いところにあるように思われるが、如何なものであろうか。
60. 不思議なことに細石器と土器の共伴は話題とされたが、同じブロックから出土しているナイフと土器の共伴は未だに問題とされたことがない。仮に土器と細石器の共伴をいっしょに出土した点をもって提唱するならば、当然のことながらナイフ形石器と土器の共伴も問題としなければならないはずである。
61. 先上器時代に於いては、同一遺跡内にて先行する遺構（礫群、ブロックなど当時にあっても可視点な遺構）に新しく移り住んだ人々が遺物を廃棄するという行動様式の存在が想定されている。同様な要因が上野例にも作用している可能性は強い。
- 栗島義明（1982）「ブロックの構成と機能——個体別資料分析から見たブロックのあり方——」『多聞寺前遺跡II』
62. 川崎純徳（1976）『福井大宮遺跡』那珂町教育委員会
63. 比田井民子（1985）「先土器時代終末期における複合土器文化」『考古学雑誌』第70巻3号
64. このような点からも一連の森嶋 稔氏の研究と岡本東三氏の研究は高く評価されるべきであり、今後のより一層の体系化を待ち望むものも決して筆者一人ではないであろう。
65. 註11文献
66. 明石博志 1983 「陸別遺跡」 陸別町教育委員会

同報告によれば、石器は2.5m四方の小範囲から21点の出土が確認されたという。石器は大形木葉尖頭器と中形柳葉形尖頭器を主体とし他に石刃を含んでおり、尖頭器は大形のものが25cm以上、中形のものが15cm前後である。石器の集中性、特定器種への片寄り、完成度等からみてデボであることは間違いないであろう。

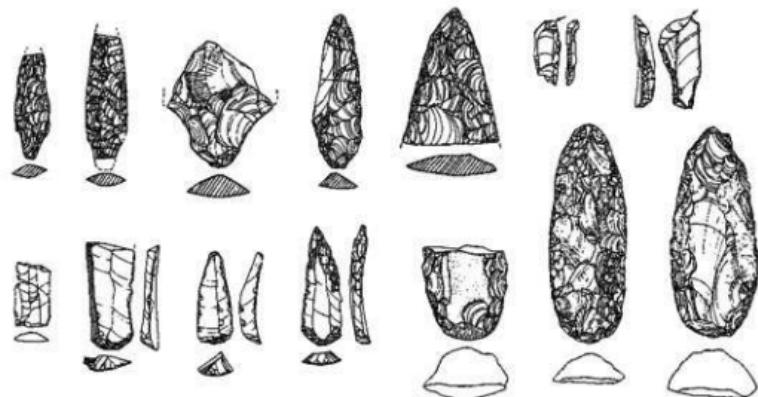
67. 八幡一郎 (1938) 「原始文化の遺跡」『日本文化史大系』1
68. 山形洋一他 (1986) 『西大宮バイパスNo.4 遺跡』 大宮市遺跡調査会
69. 神田五六、永峯光一 (1958) 「奥信濃横倉遺跡」『石器時代』5
70. 沼 弘、増田進治 (1968) 「福井県鳴鹿遺跡出土の旧石器」『福井考古』1
71. 阿部祥人 1975 『沼ノ平遺跡出土石器群の研究』 学生社
72. 註47文献
73. 註10文献



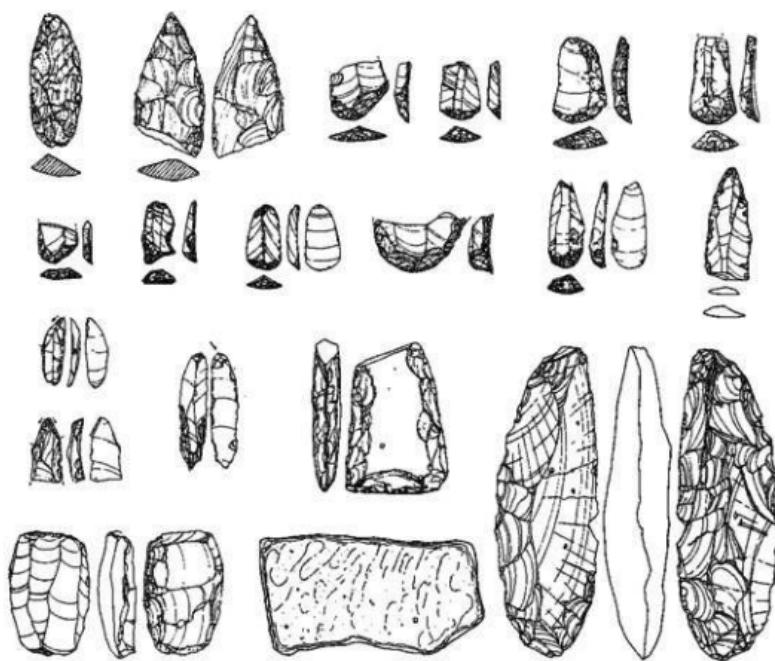
第1図 <北海道> モサンル遺跡(1)



第2図 <北海道> モサンル遺跡(2)

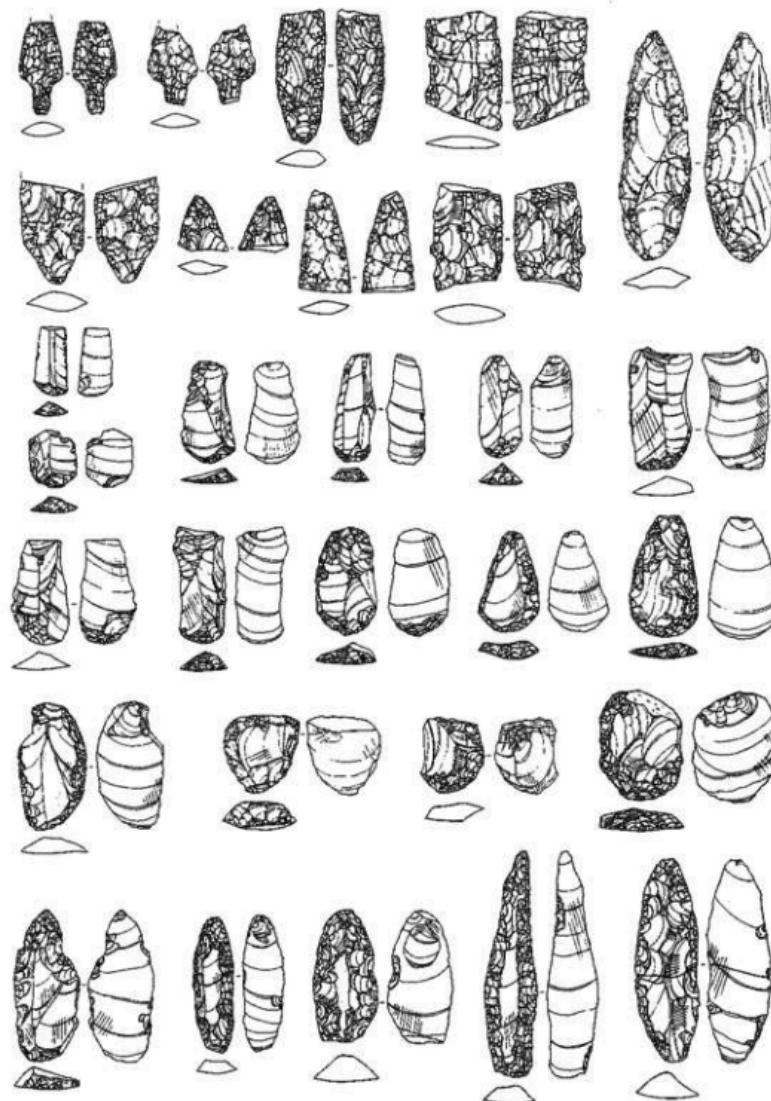


上口 A 遺跡

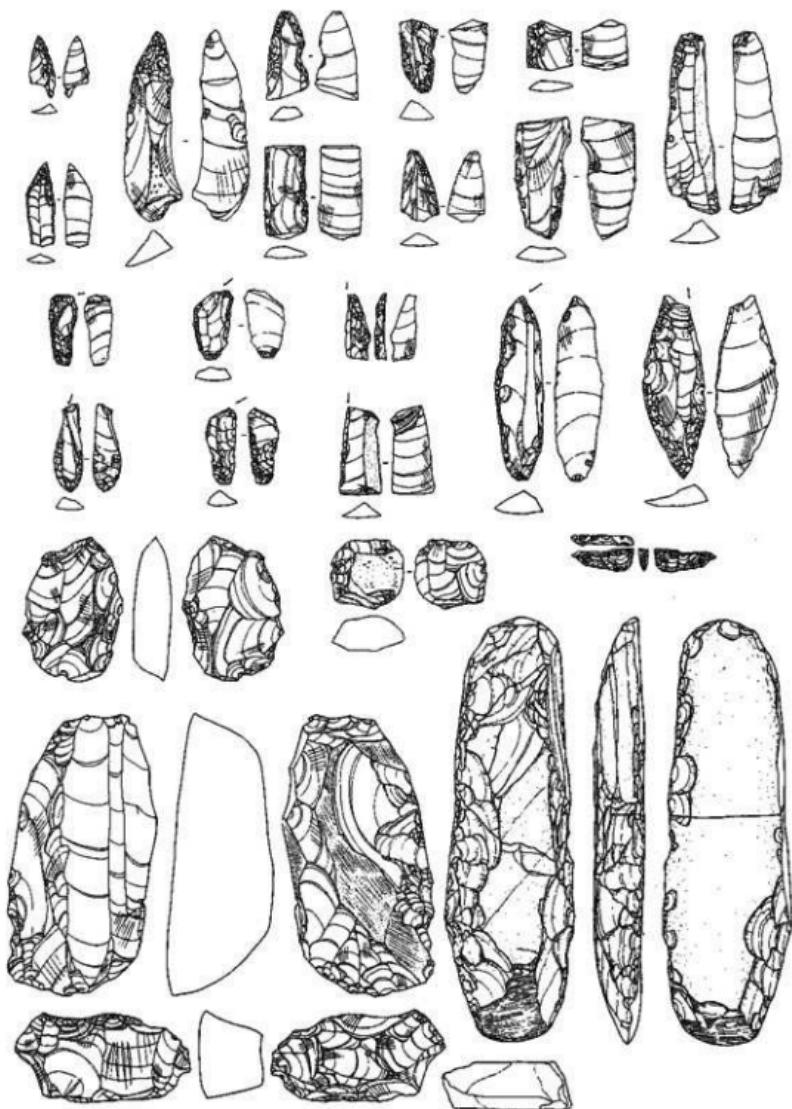


吉田遺跡

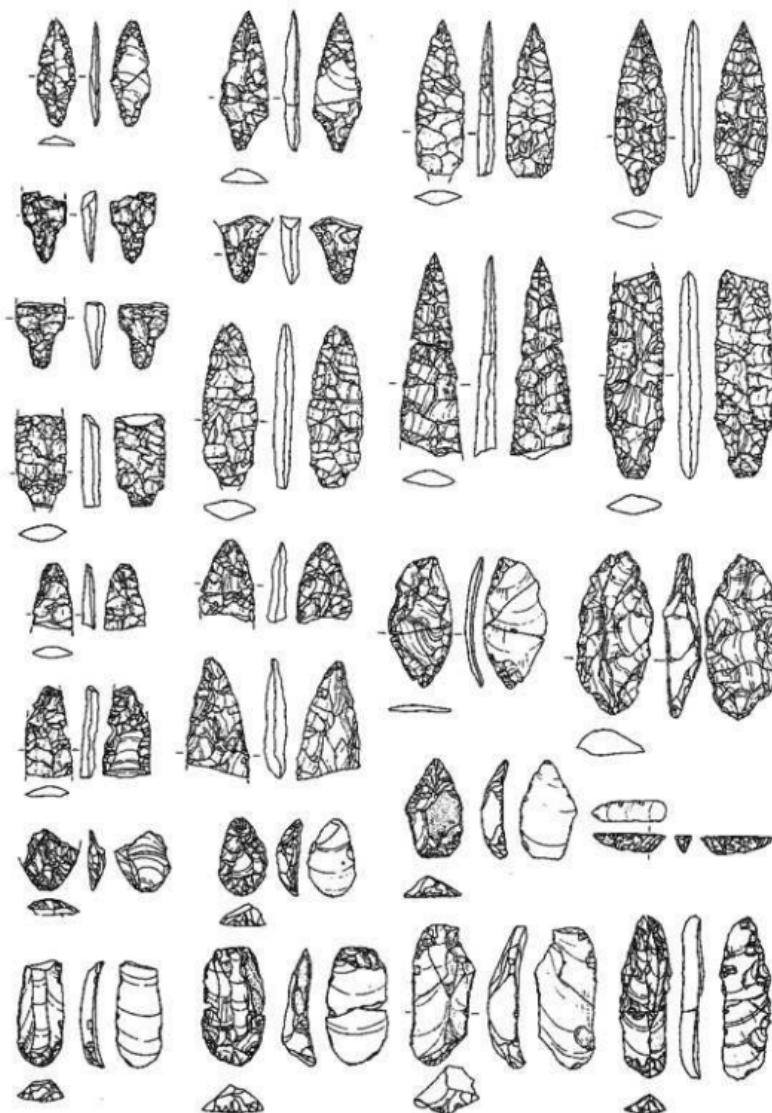
第3図 <北海道> 上口 A 遺跡・吉田遺跡



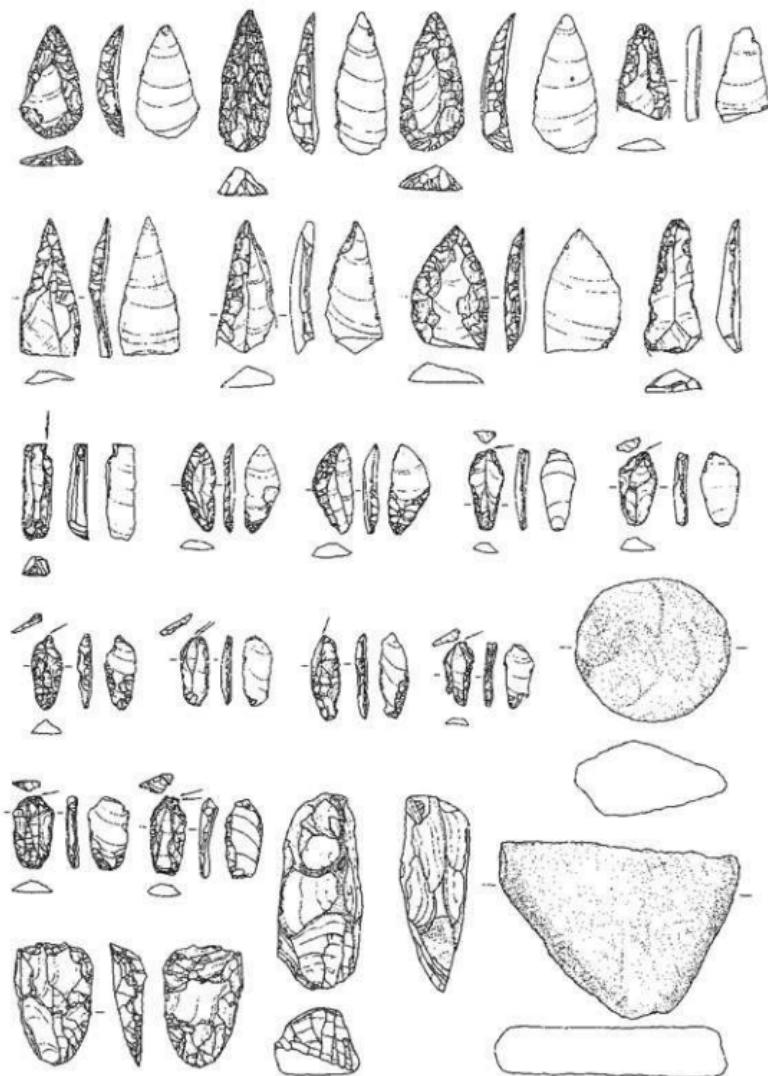
第4図 〈北海道〉 日出一ノ遺跡



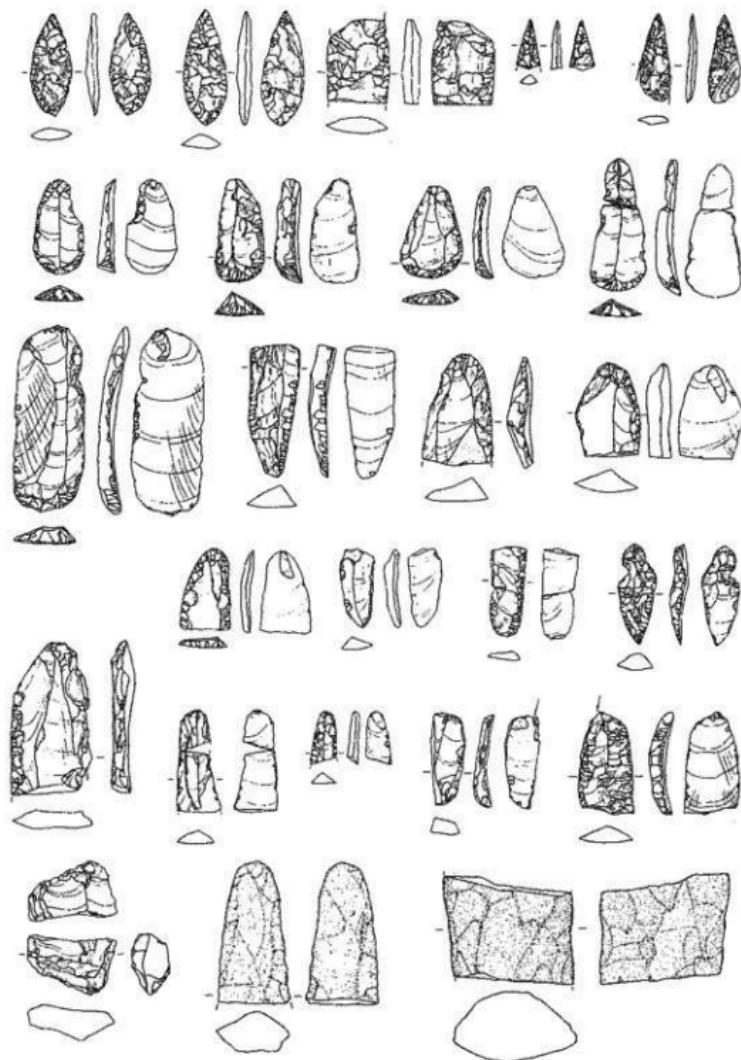
第5図 <北海道> 日出-11遺跡



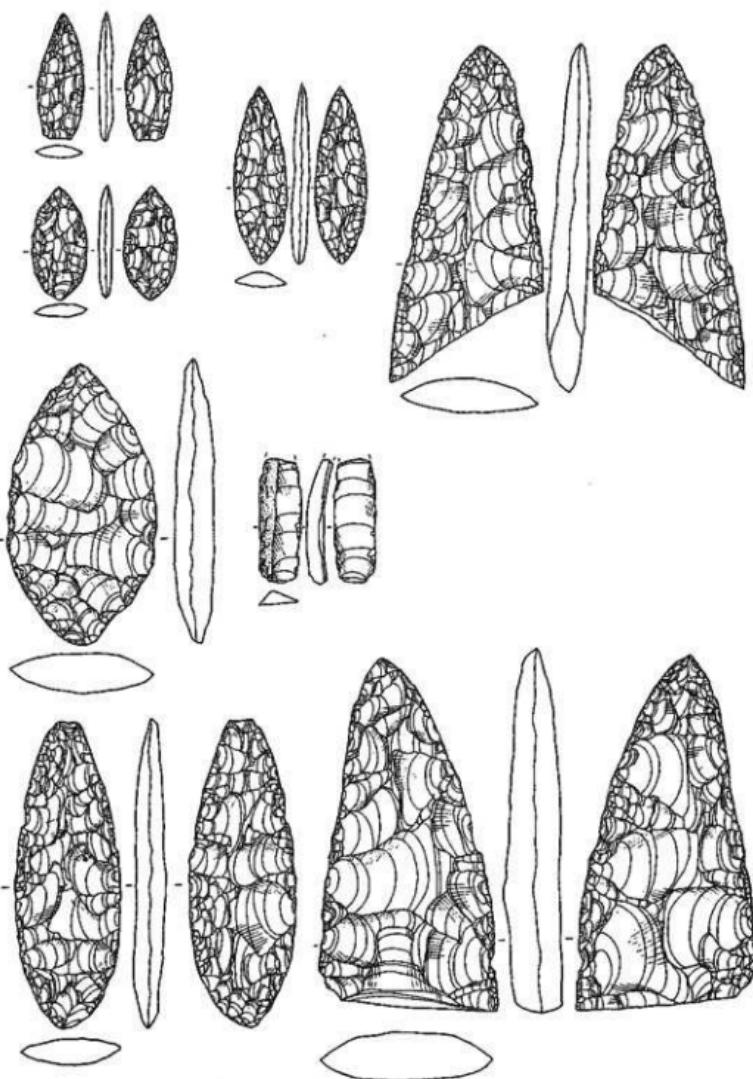
第6図 <北海道> 東藍擧1遺跡(1)



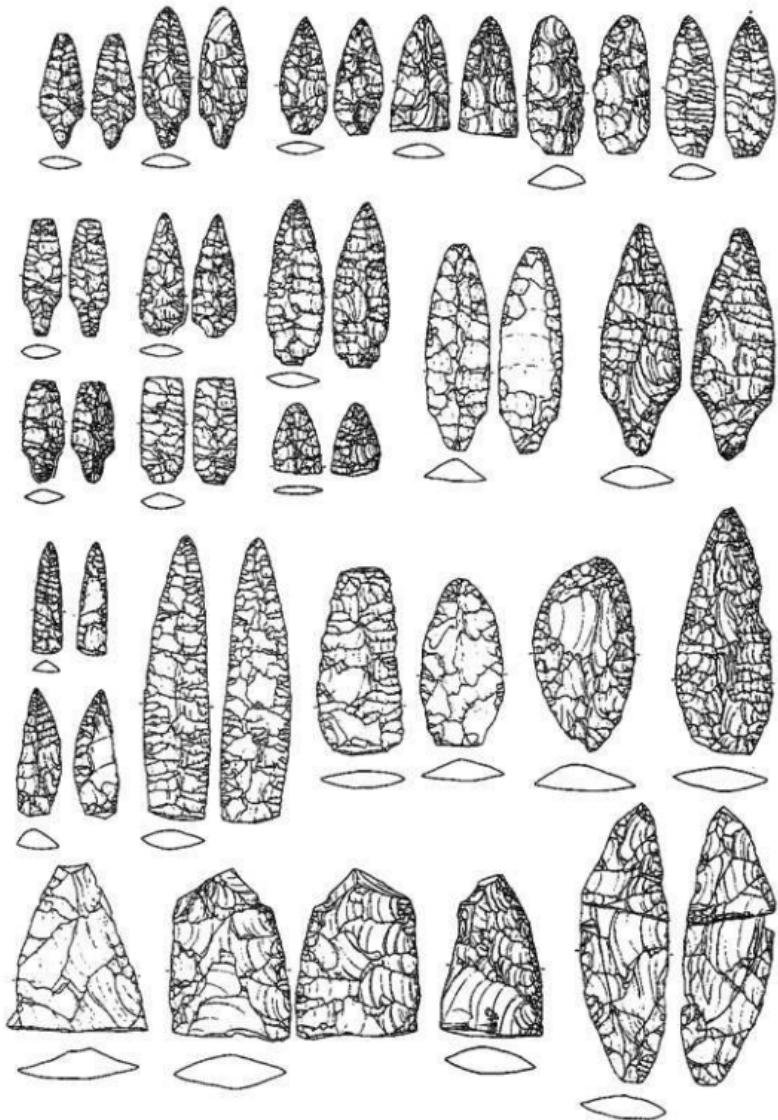
第7図 〈北海道〉 東龍郷1遺跡(2)



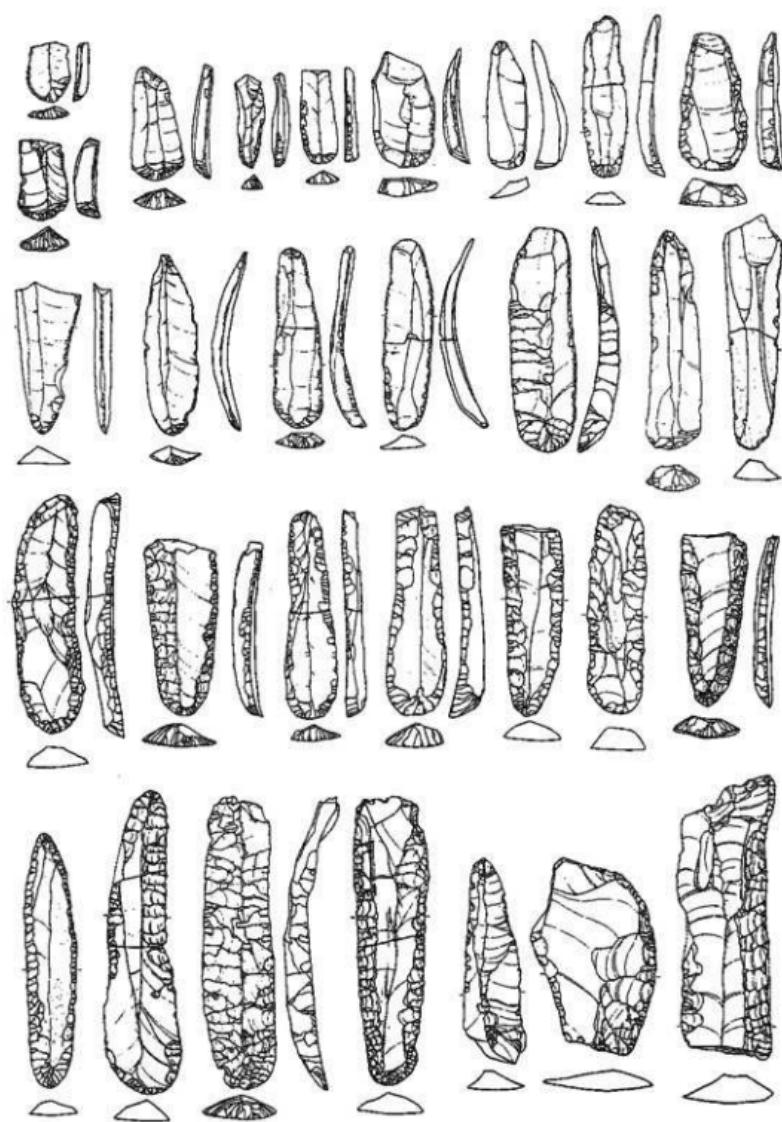
第8図 <北海道> 東龍郷2遺跡



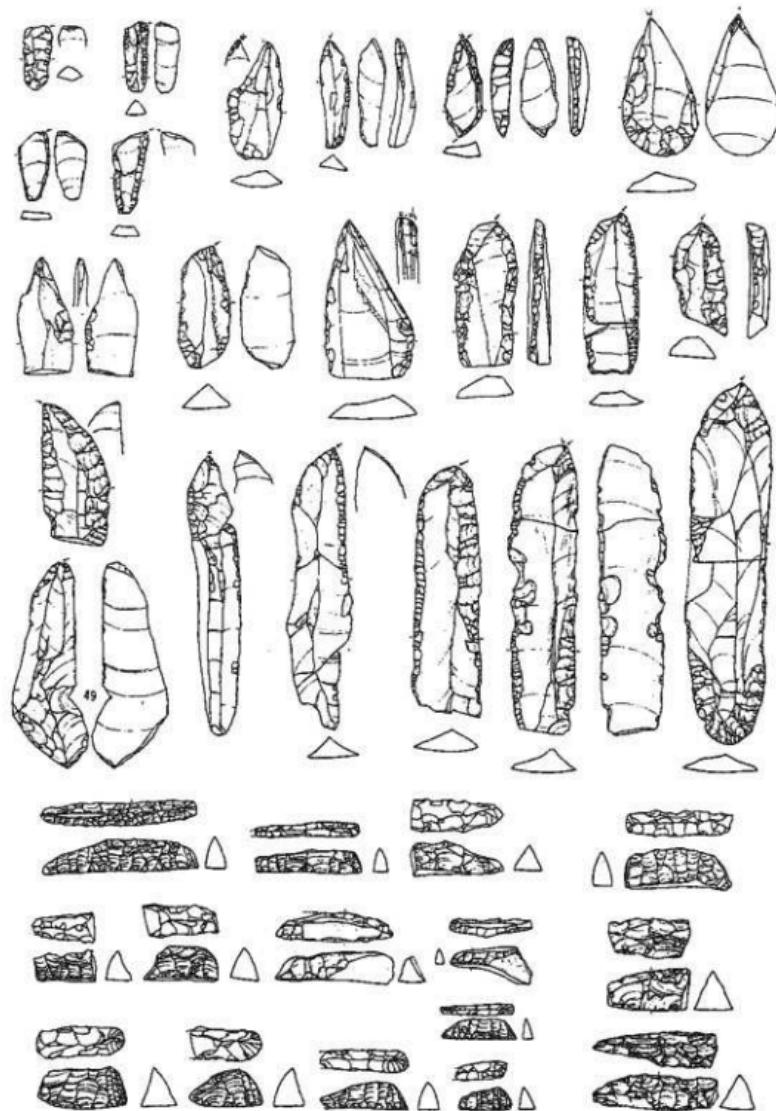
第9図 <北海道> 陸別遺跡



第10図 <北海道> 中本遺跡(1)

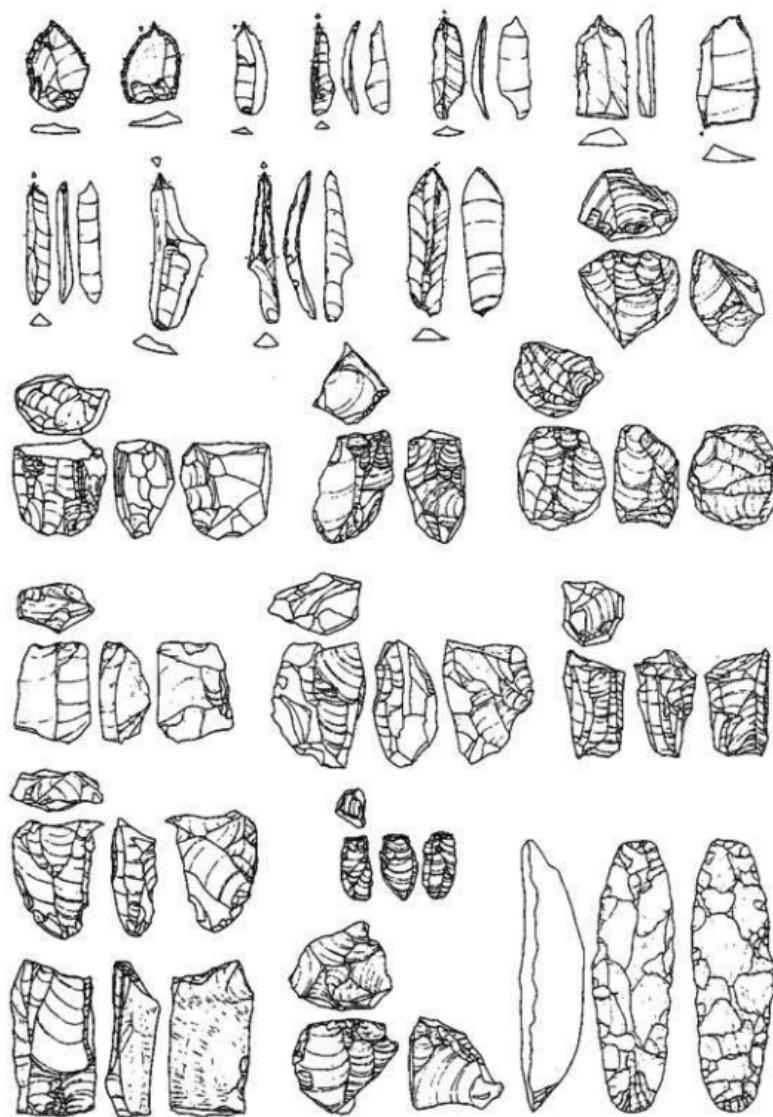


第11図 <北海道> 中本遺跡(2)

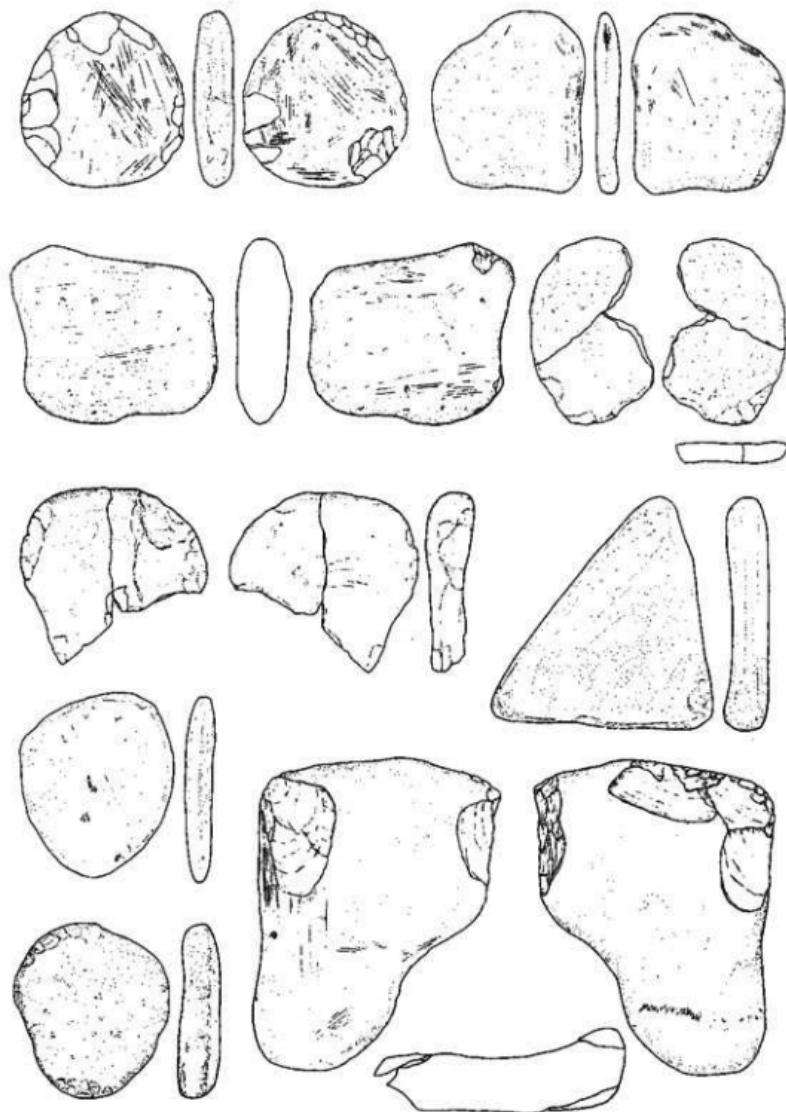


### 第12回 <北海道>

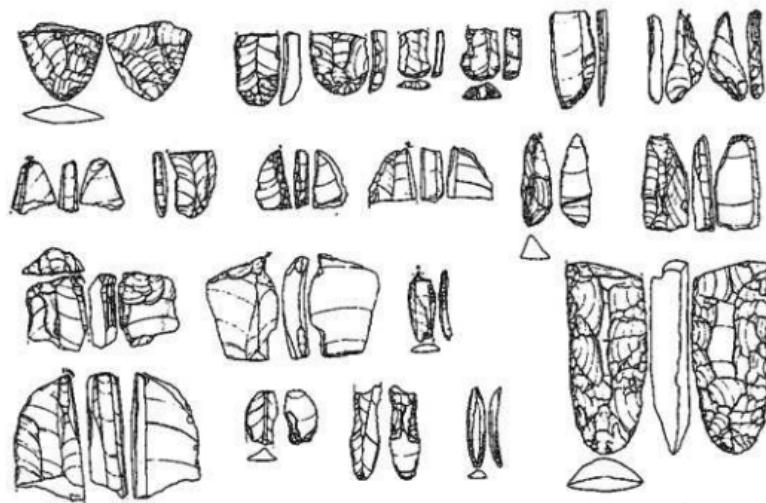
中本遺跡(3)



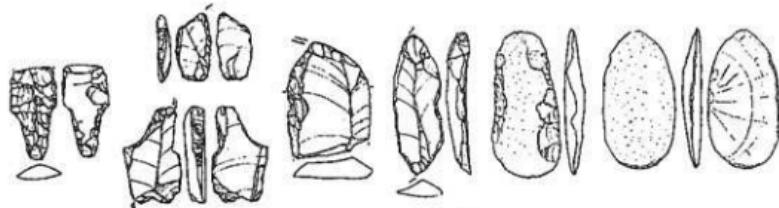
第13図 <北海道> 中本遺跡(4)



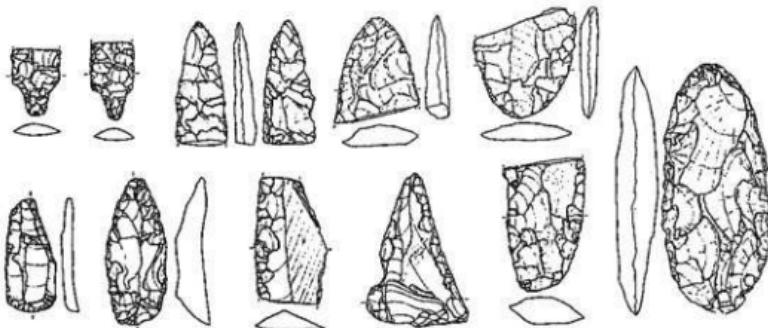
第14図 <北海道> 中本遺跡(5)



間村遺跡

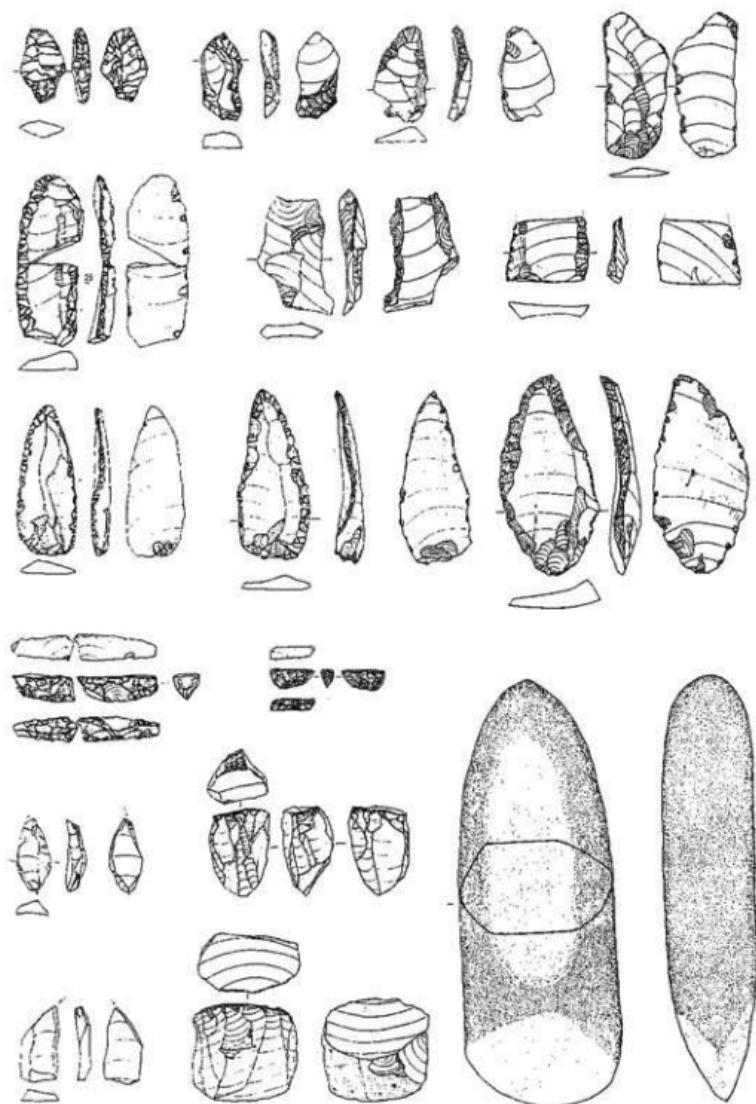


広郷20遺跡

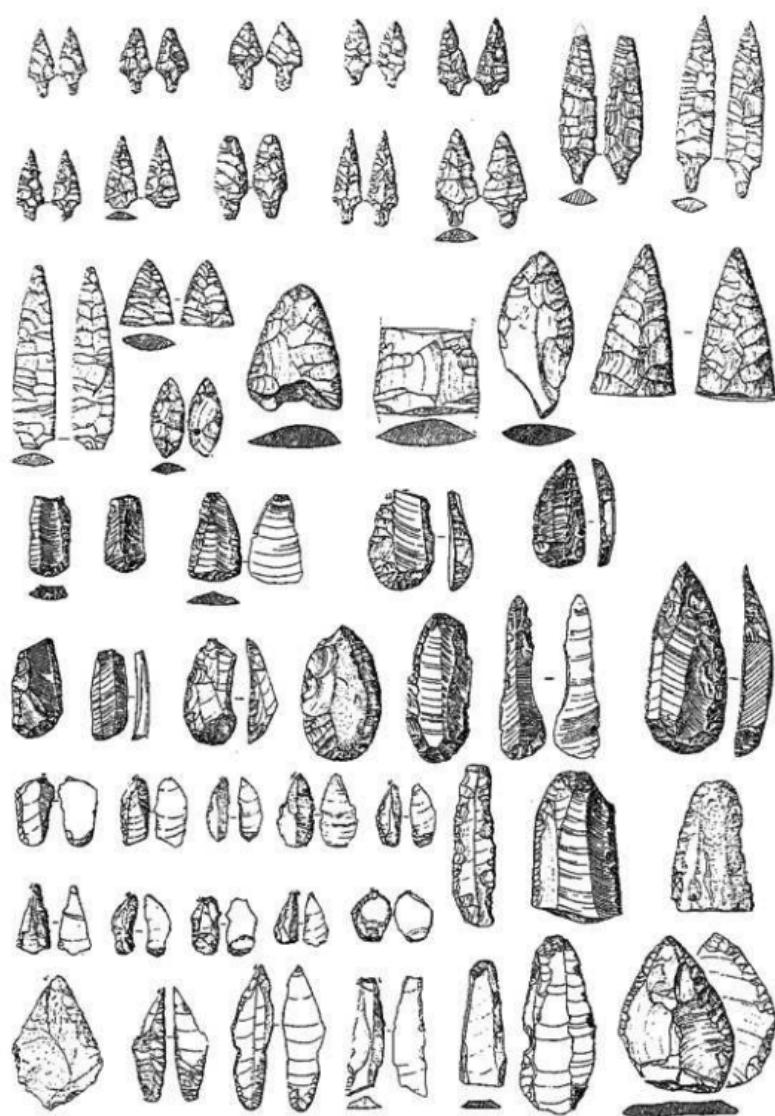


広郷31遺跡

第15図 <北海道> 間村遺跡・広郷20遺跡・広郷31遺跡

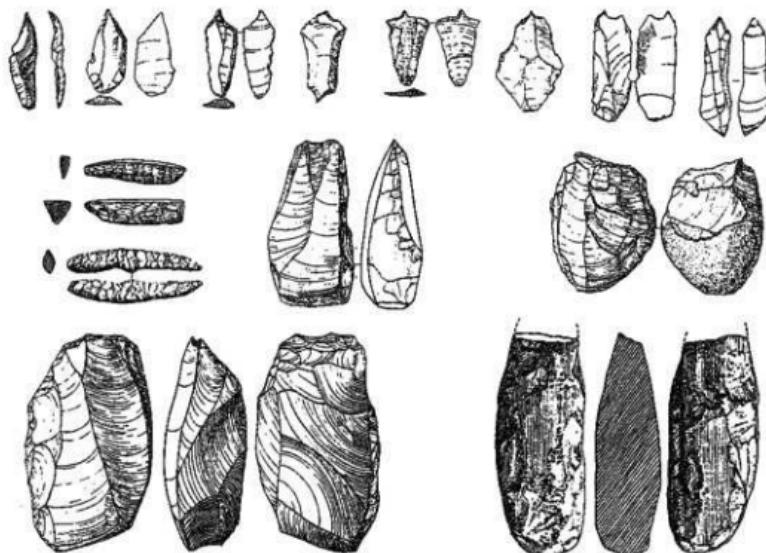


第16図 <北海道> 上似平遺跡

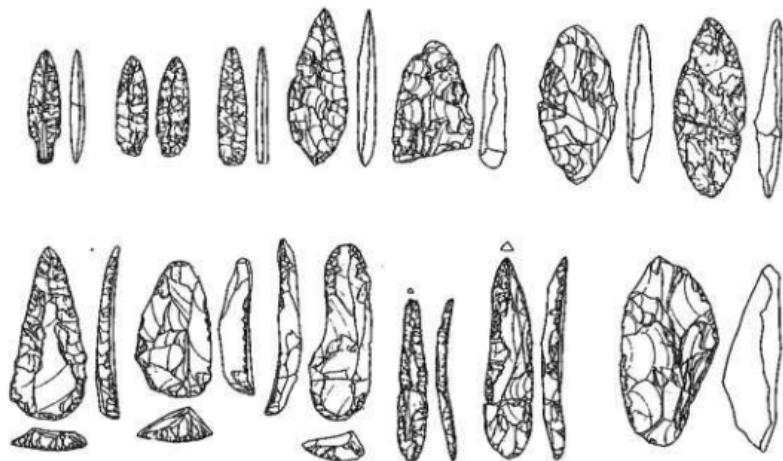


白滝第4地点（C I ブロック）

第17図 <北海道> タチカルシュナイV遺跡(2)・白滝第4地点（C I ブロック）



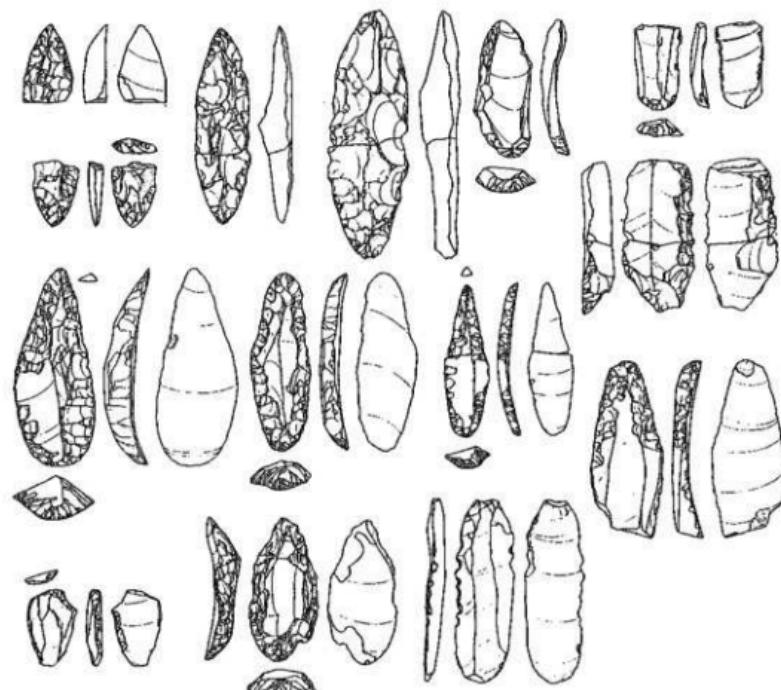
タチカルシュナイⅤ造跡(2)



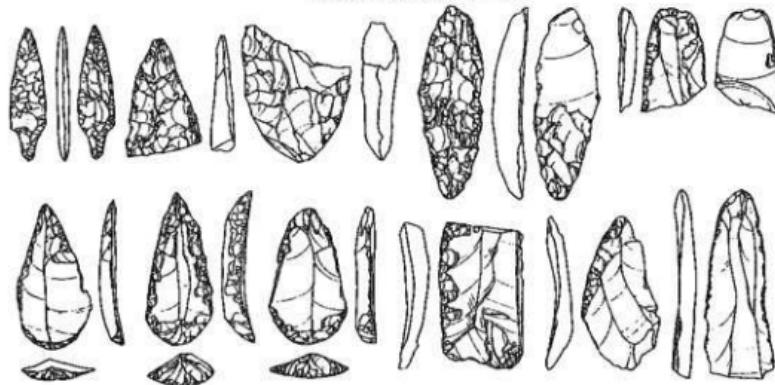
白滝第4地点 (E II ブロック)

第18図 <北海道>

白滝第4地点 (A I ブロック) · (E II ブロック)

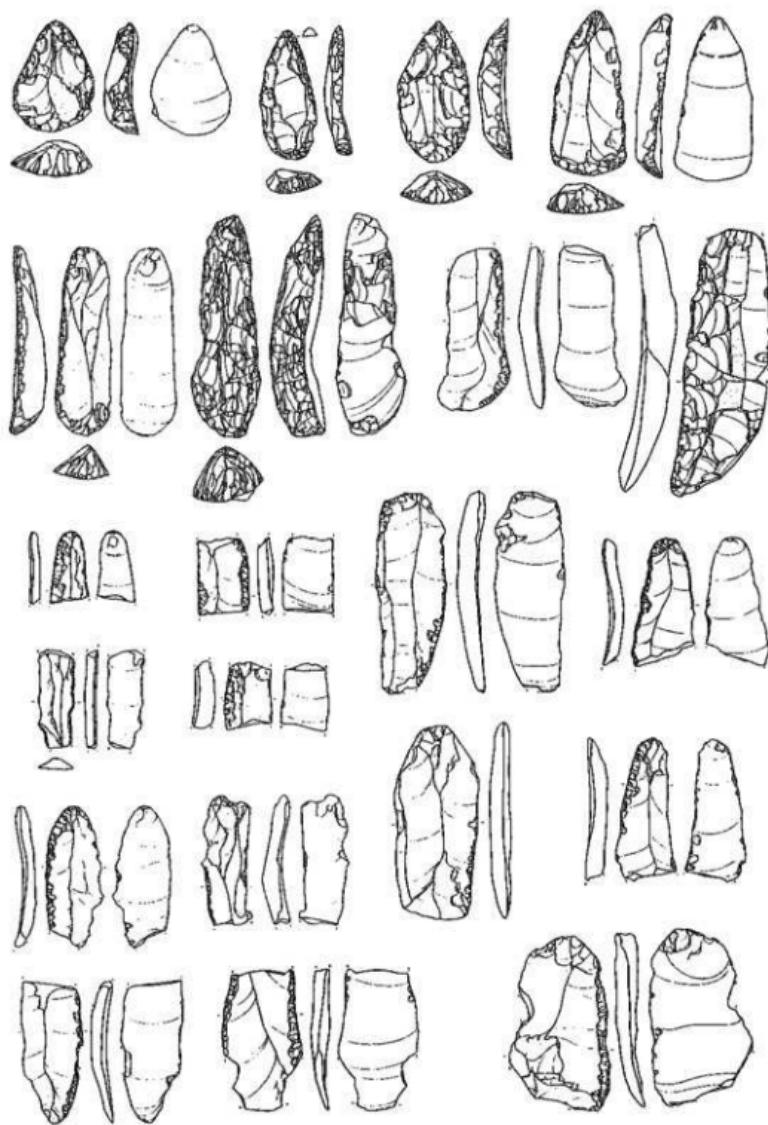


白滝第4地点（A I ブロック）

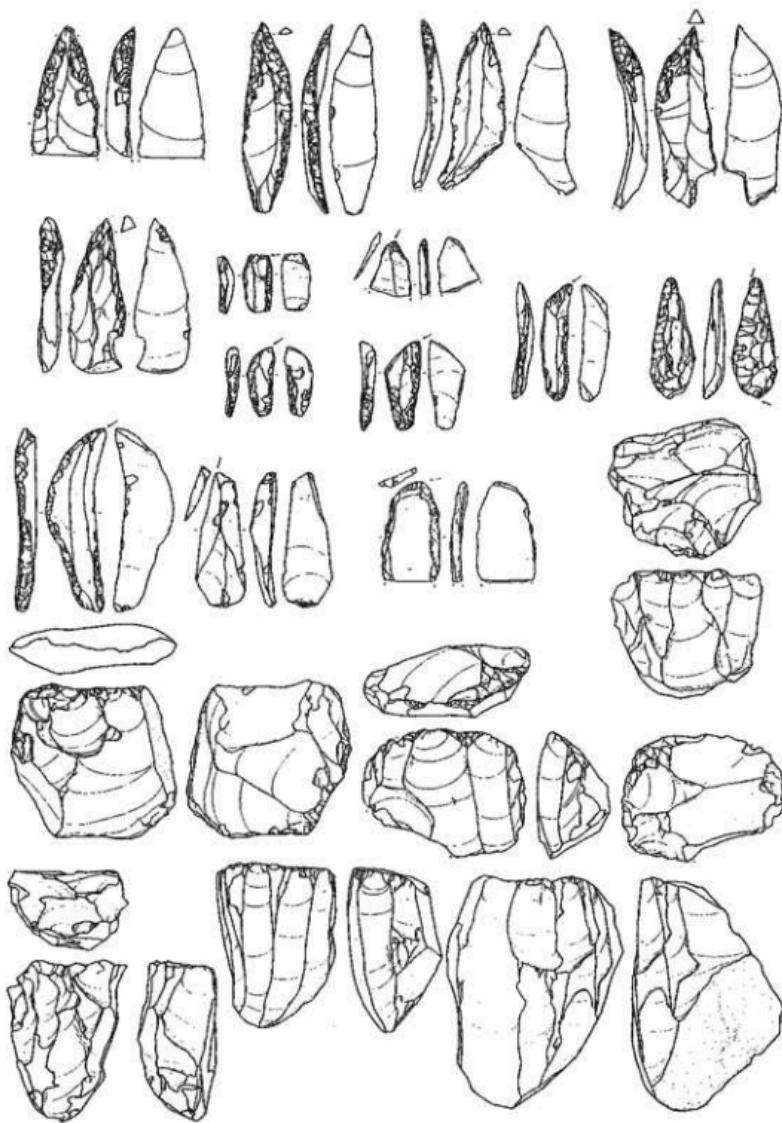


第19図 <北海道>

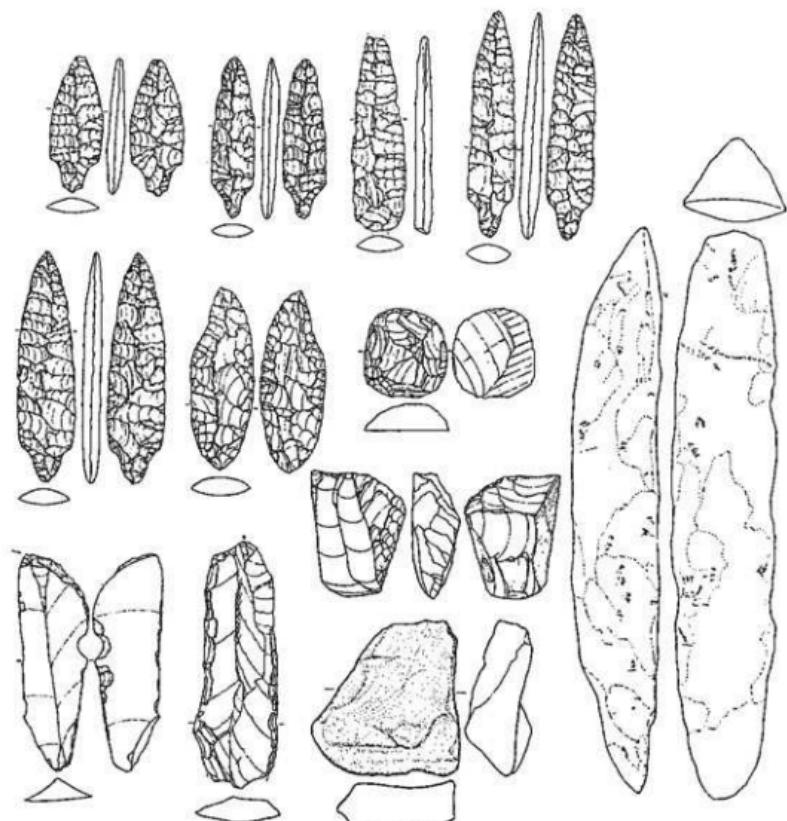
白滝第4地点（E II ブロック）



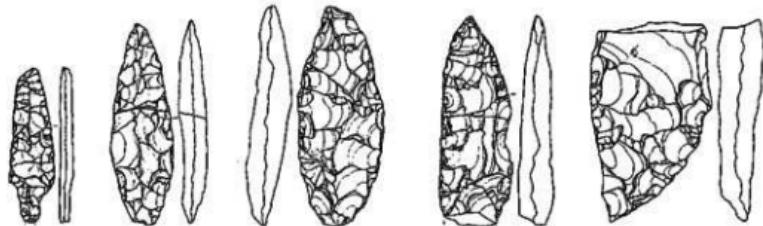
第20図 <北海道> 白海第4地点遺跡



第21図 <北海道> 白滝第4地点遺跡



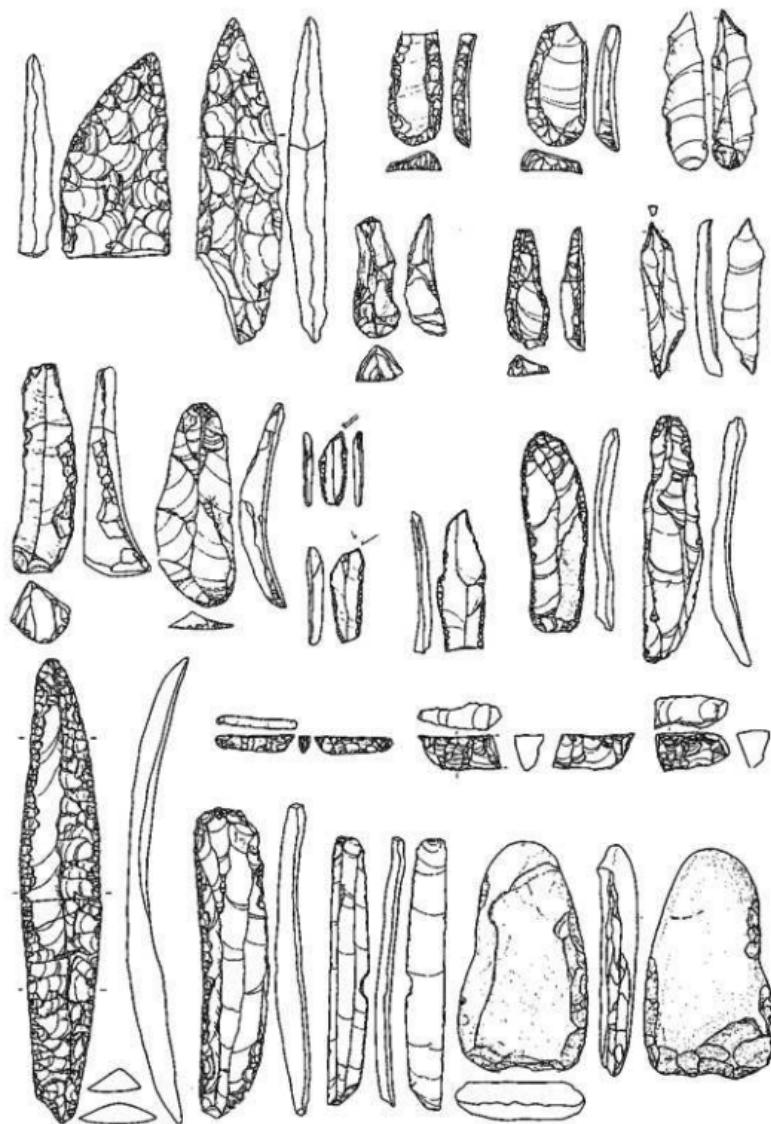
広郷角田遺跡



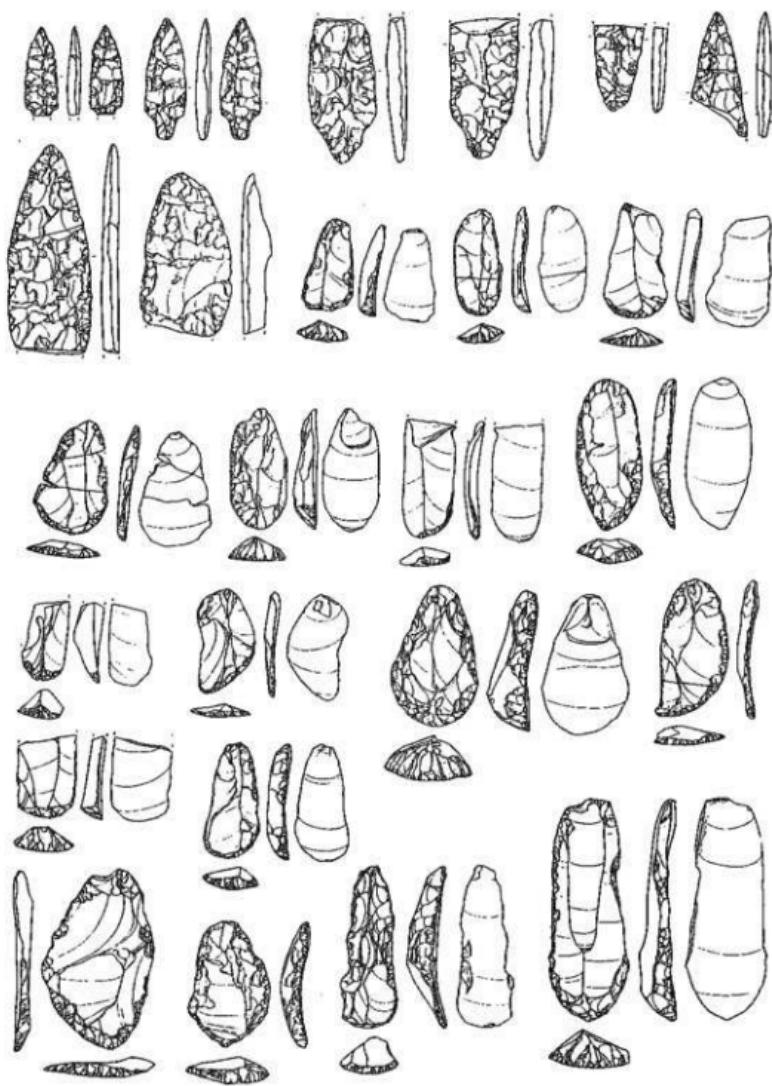
美利河 I 遺跡

第22図 〈北海道〉

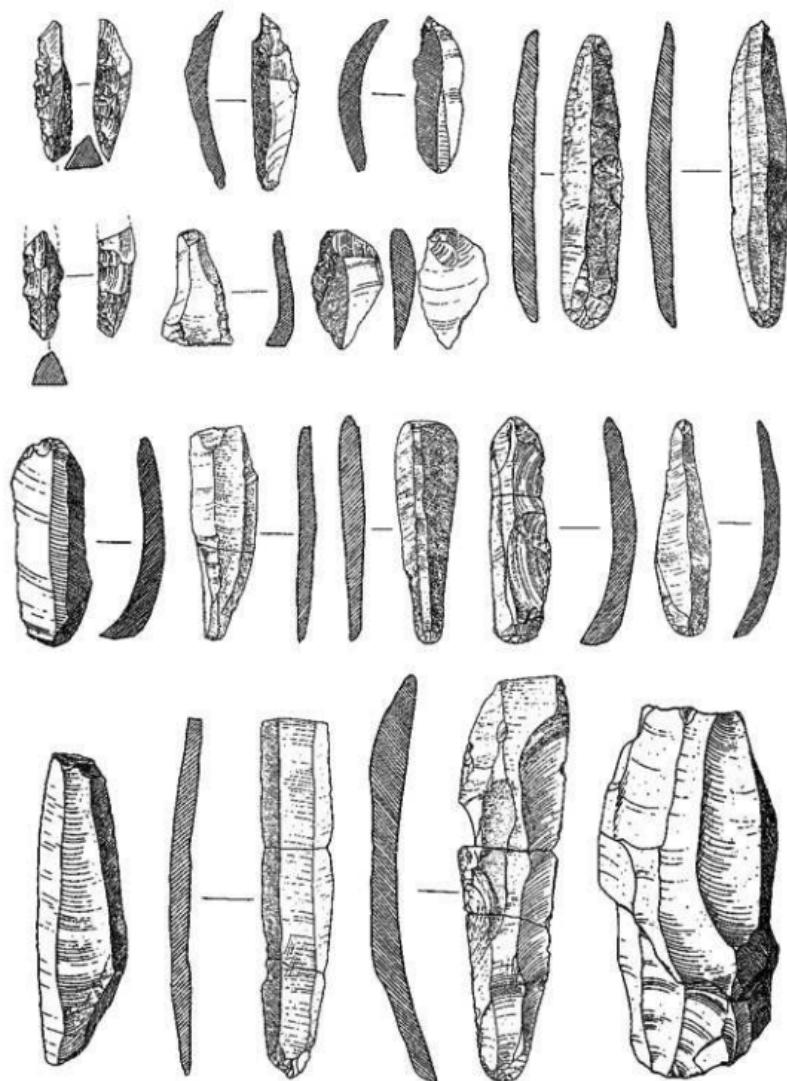
広郷角田遺跡・美利河 I 遺跡



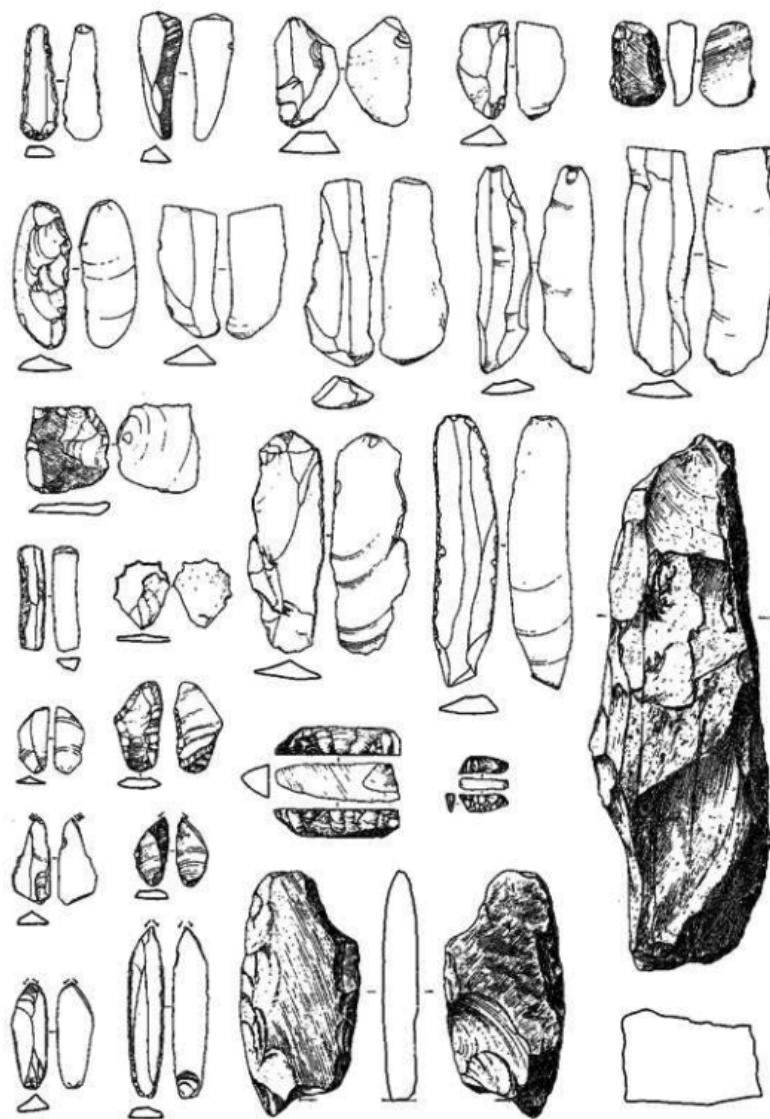
第23図 <北海道> 美利河I遺跡



第24図 〈北海道〉 美利河 I 遺跡



第25図 〈北海道〉 樽岸遺跡

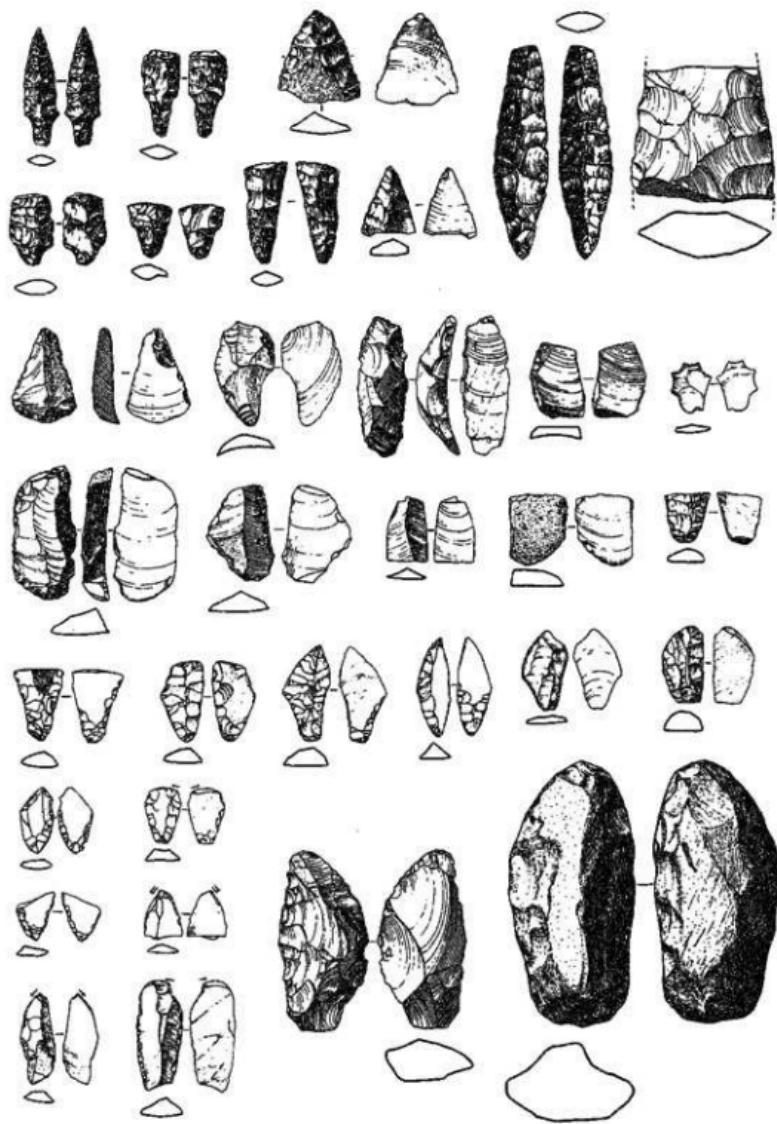


第26図 <北海道> 立川遺跡 第I地点



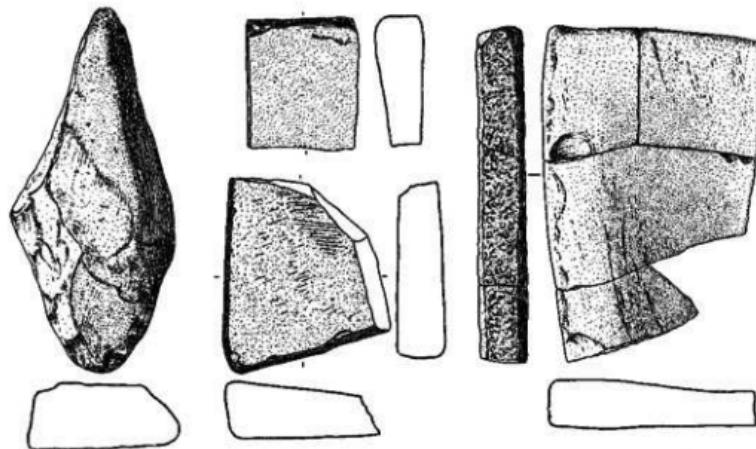
第27図 <北海道>

立川遺跡 第II地点

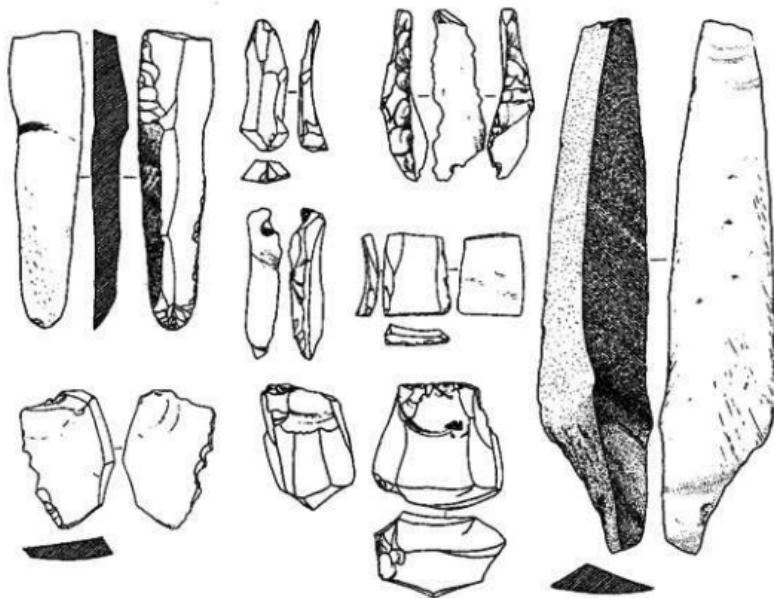


第28図 <北海道>

立川遺跡 第Ⅲ地点(1)

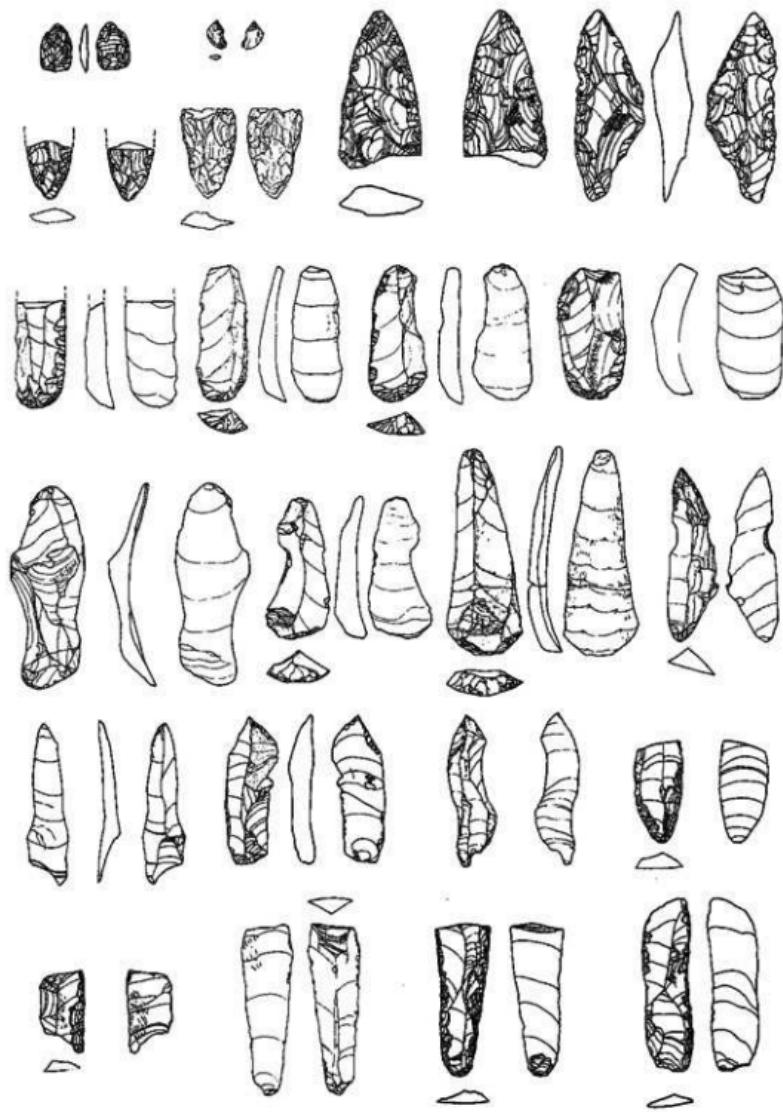


立川遺跡第Ⅲ地点(2)



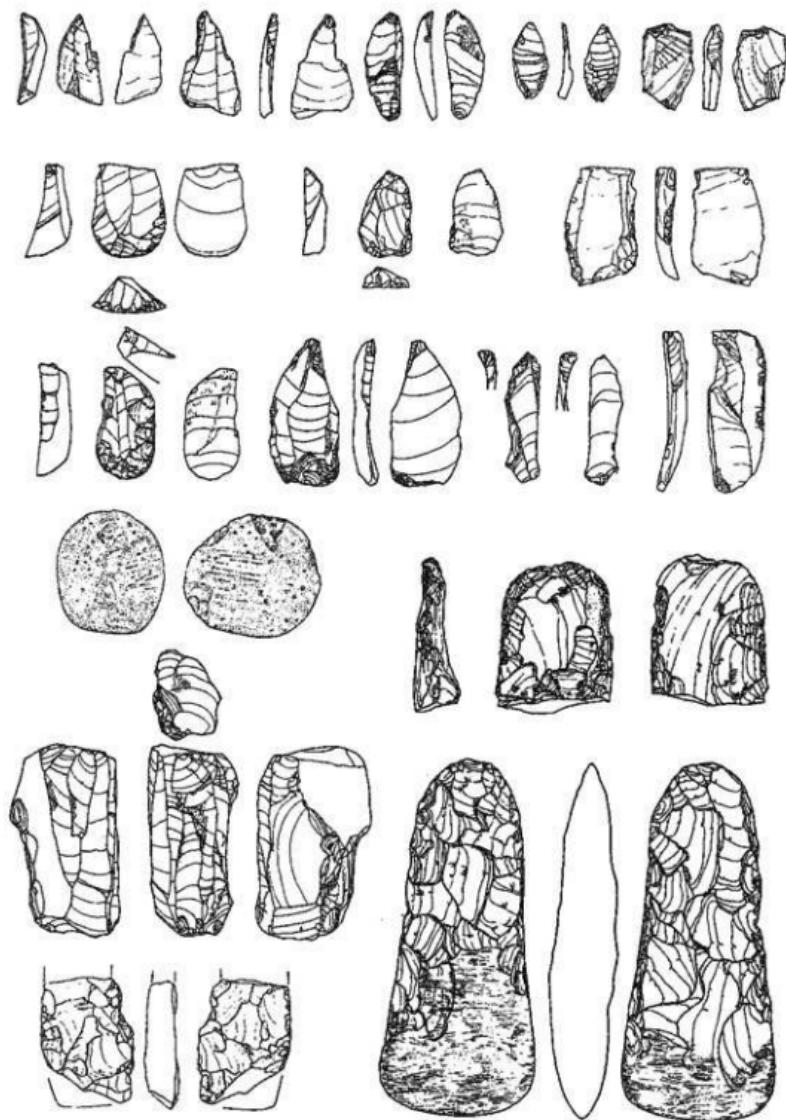
立川遺跡第Ⅳ地点

第29図 <北海道> 立川遺跡第Ⅲ地点(2)・第Ⅳ地点

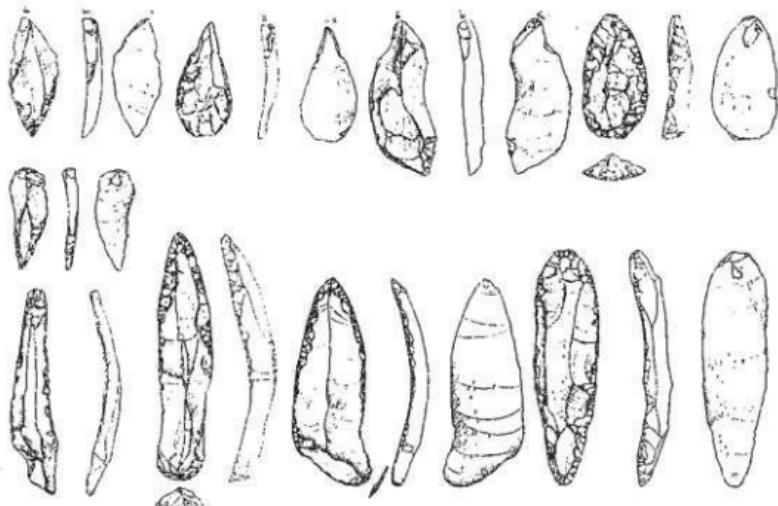


第30図 <青森県>

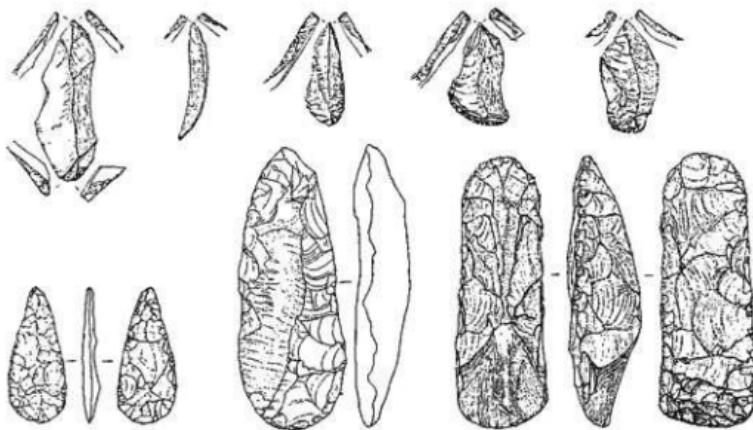
大平山元Ⅰ遺跡(1)



第31図 <青森県> 大平山元Ⅰ遺跡(2)

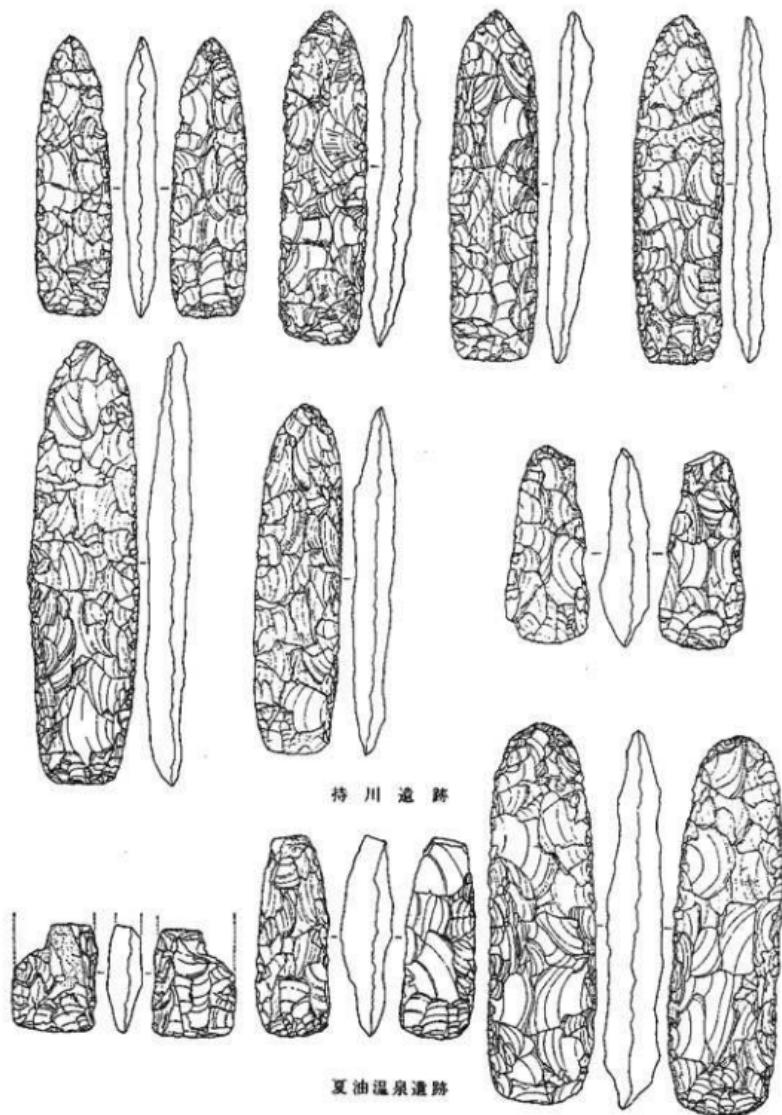


大森勝山遺跡

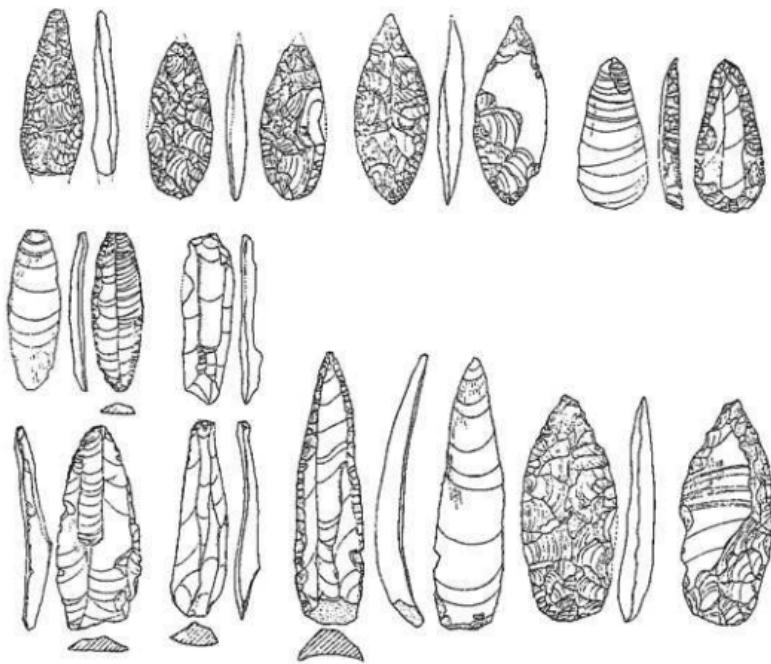


長者久保遺跡

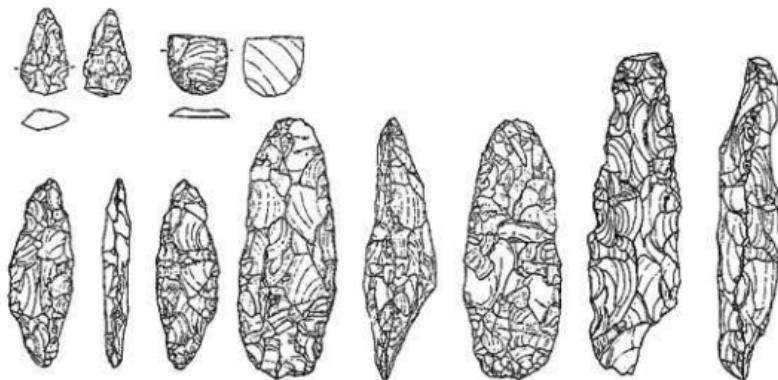
第32図 <青森県> 大森勝山遺跡・長者久保遺跡



第33図 <岩手県> 持川遺跡・夏油温泉遺跡



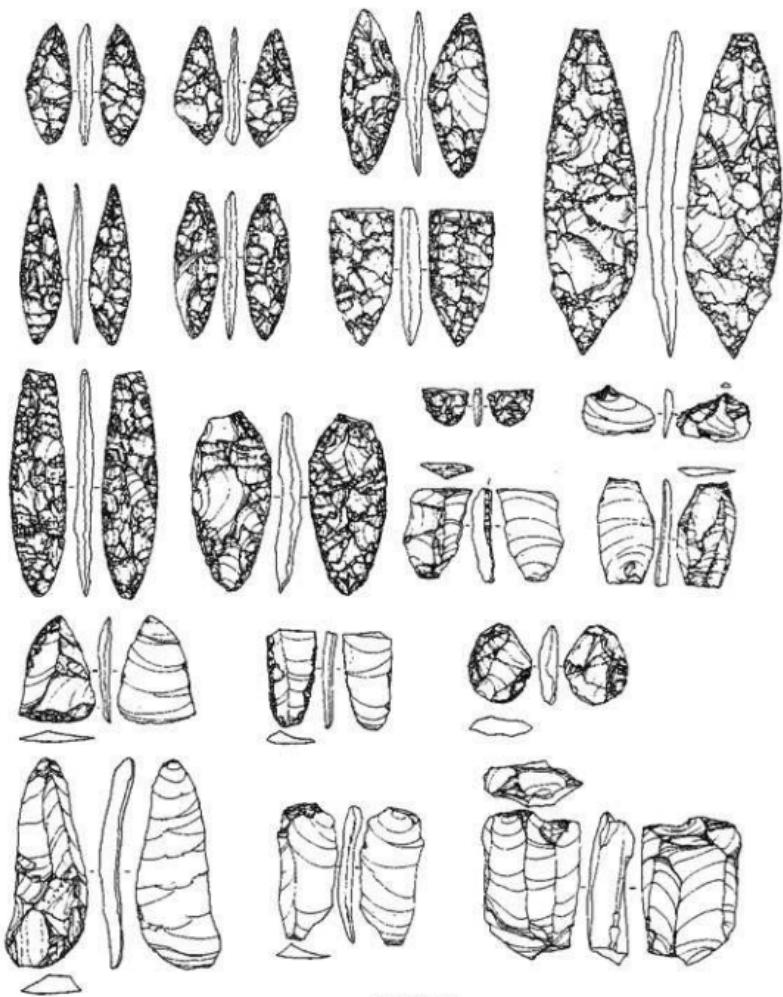
東山・紺野遺跡



上屋地 A 遺跡

第34図 <山形県>

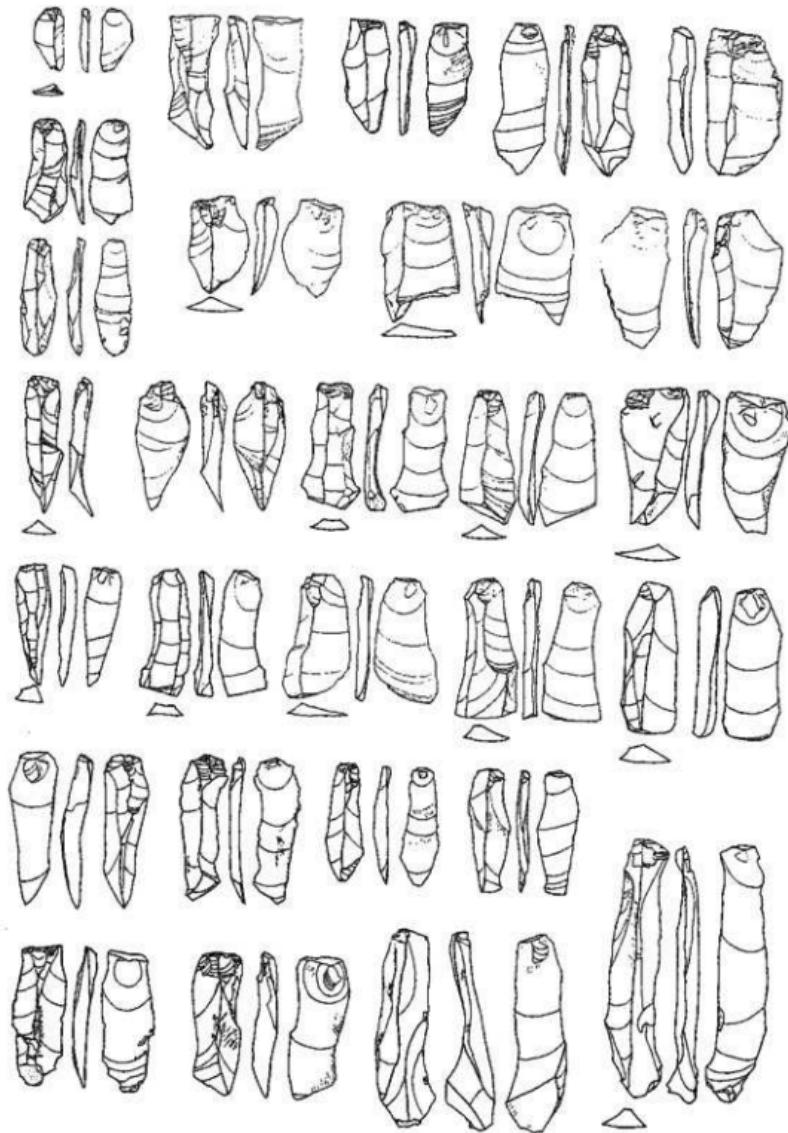
東山・紺野遺跡・上屋地 A 遺跡



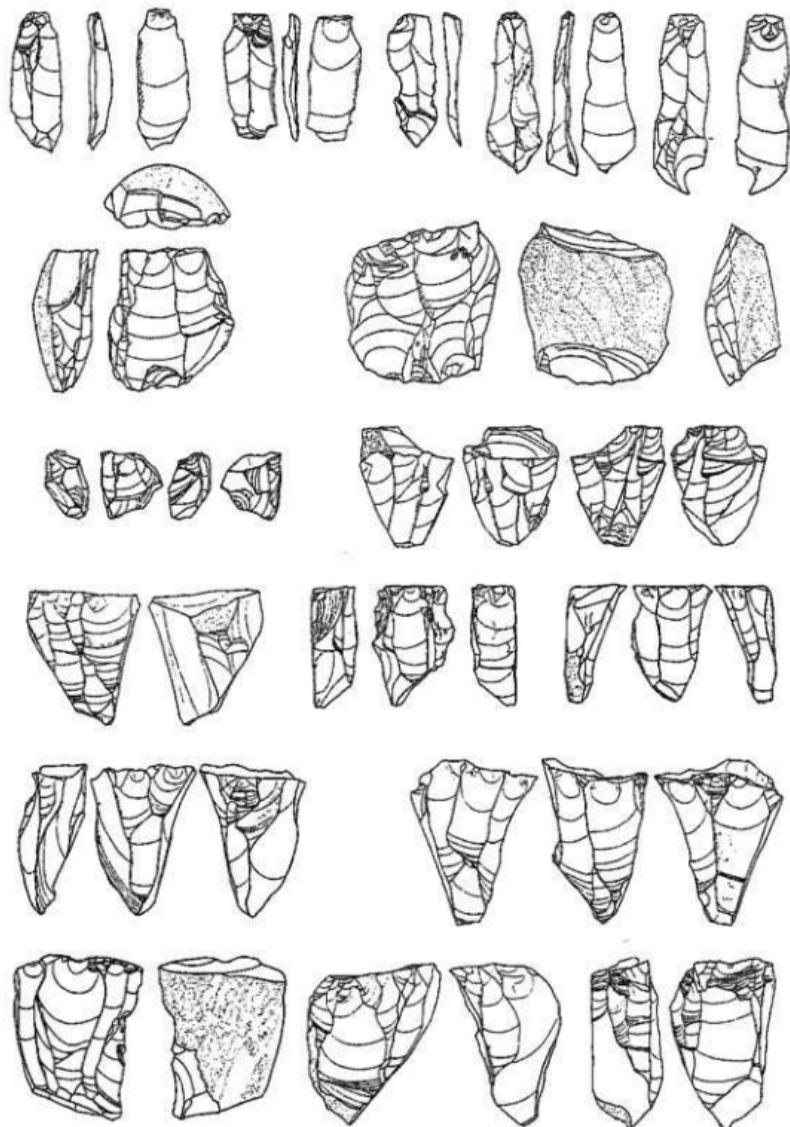
月山沢遺跡

第35図 <山形県>

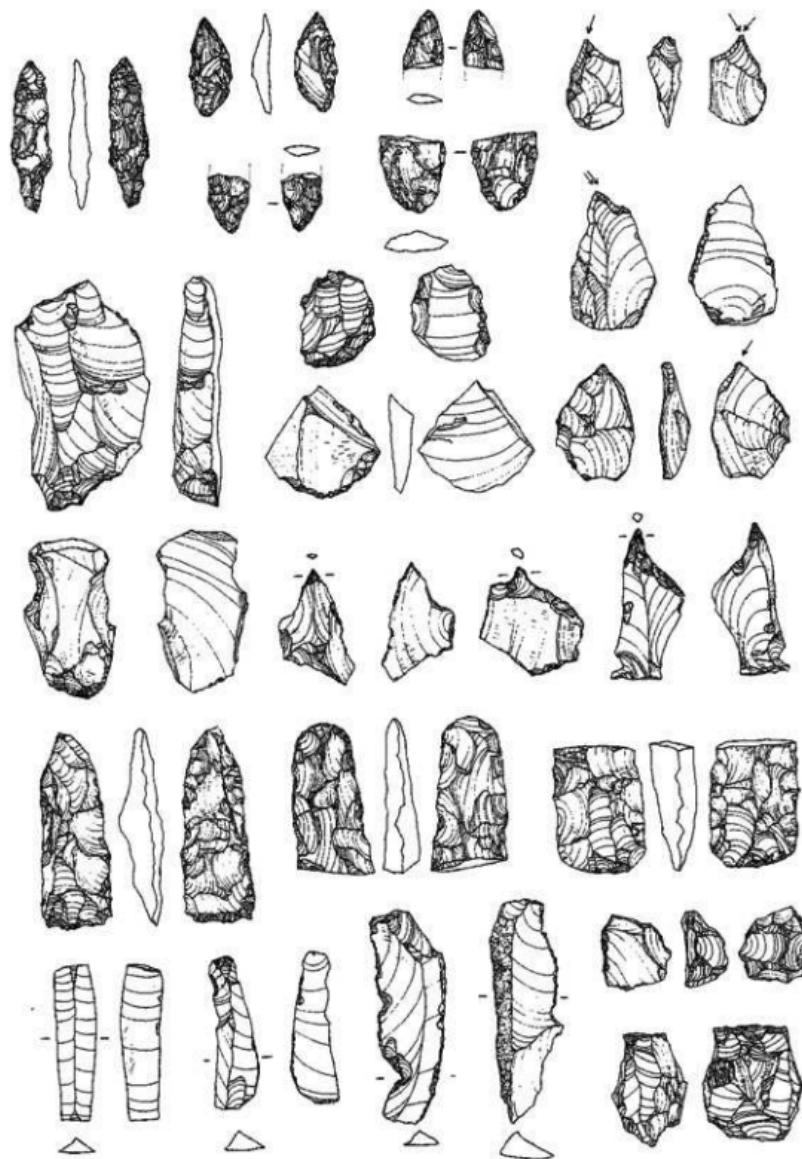
月山沢遺跡



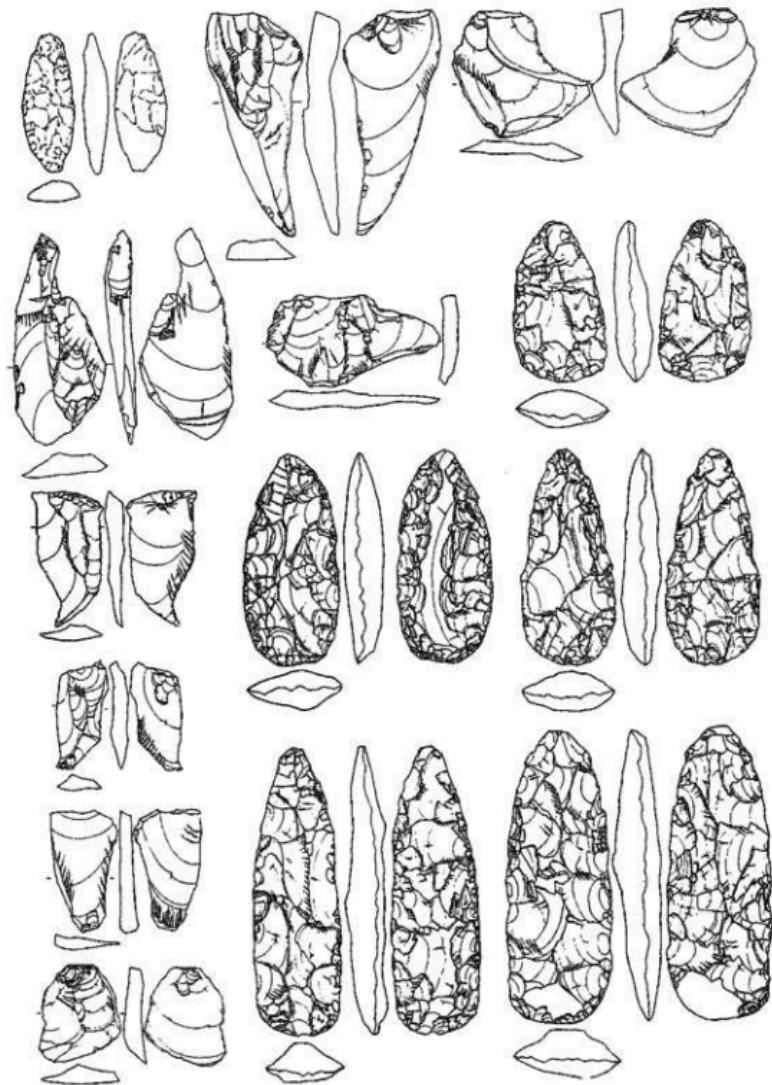
第36図 <山形県> 岩井沢遺跡(1)



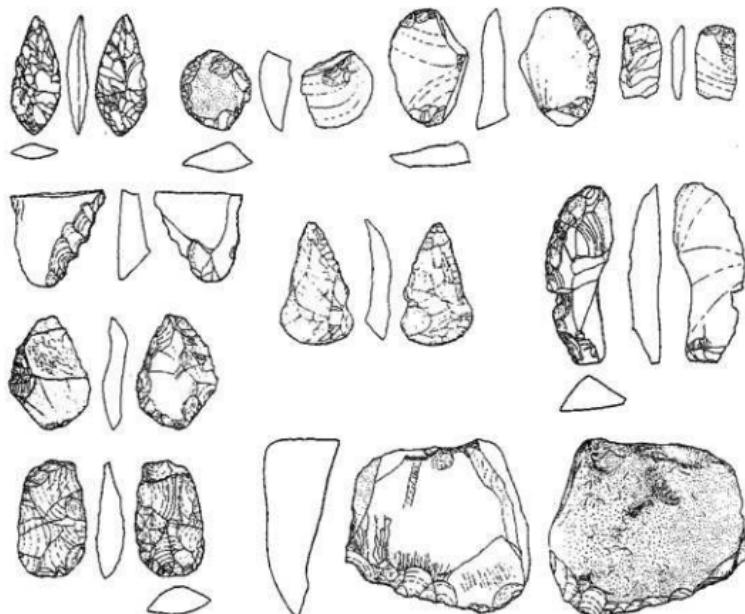
第37図 <山形県> 岩井沢遺跡(2)



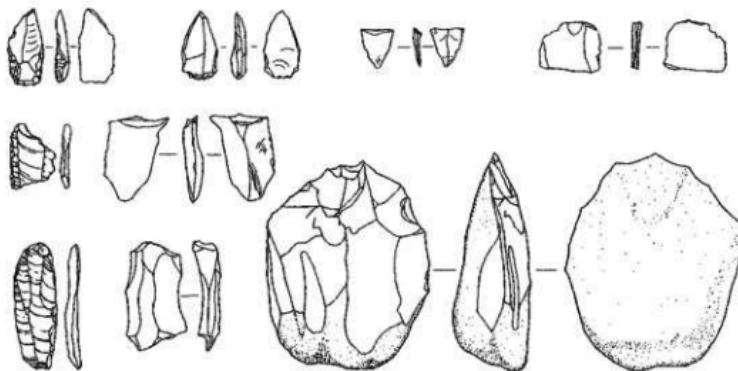
第38図 <山形県> 沼ノ平遺跡



第39図 〈福島県〉 大坂遺跡



油王田遺跡

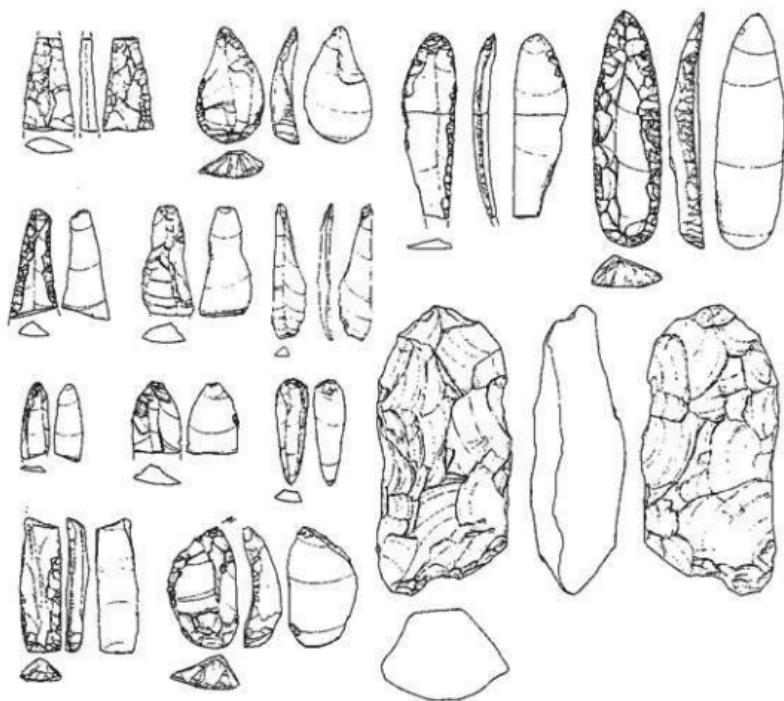


馬場尻遺跡 A 地点

第40図

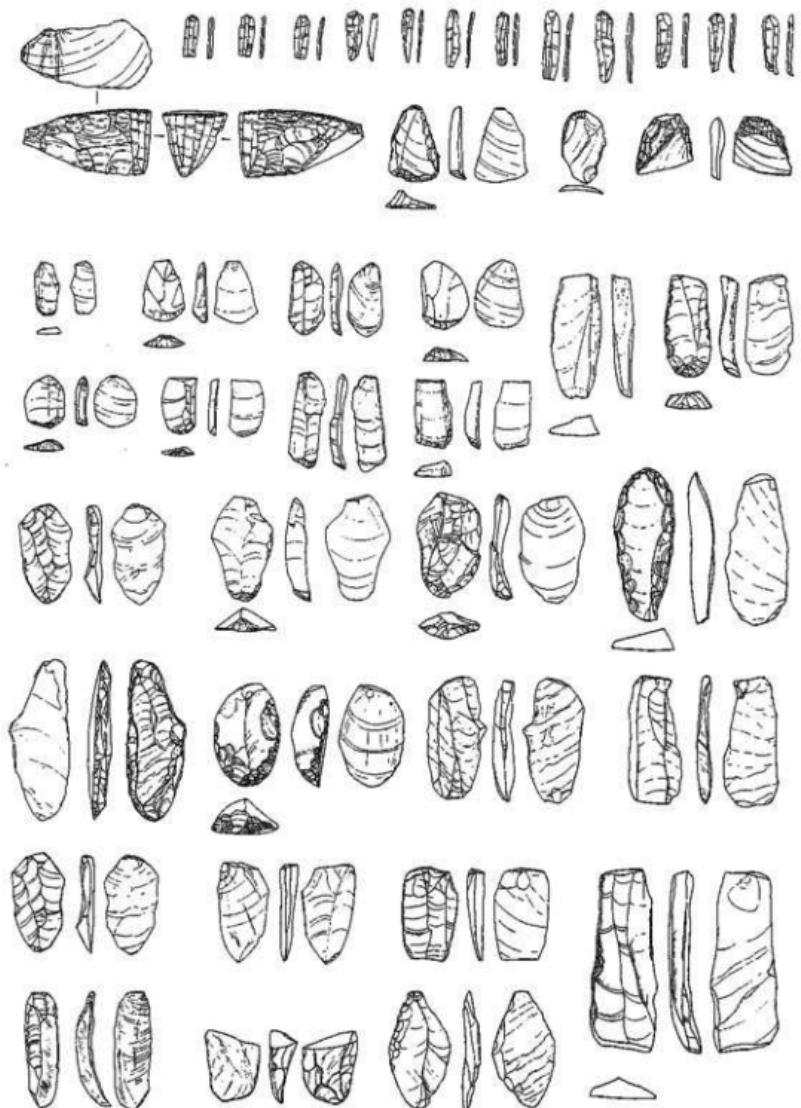
〈福島県〉  
〈茨城県〉

油王田遺跡  
馬場尻遺跡 A 地点



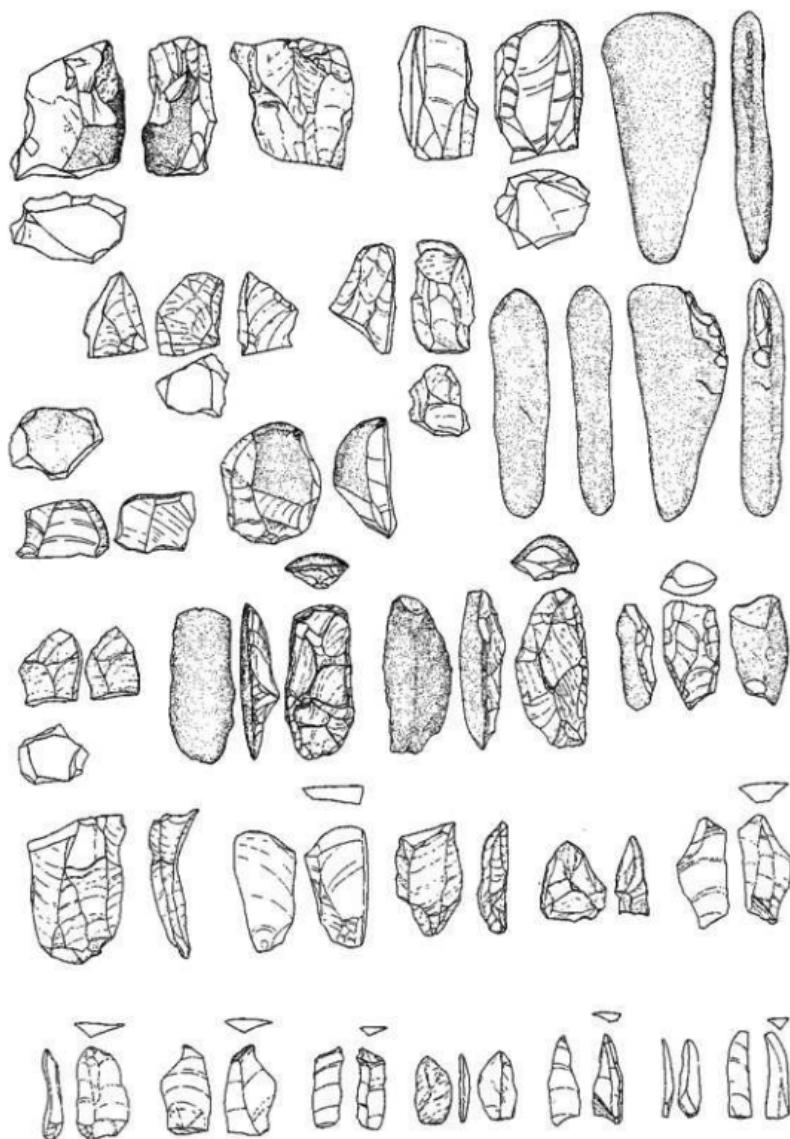
後野遺跡

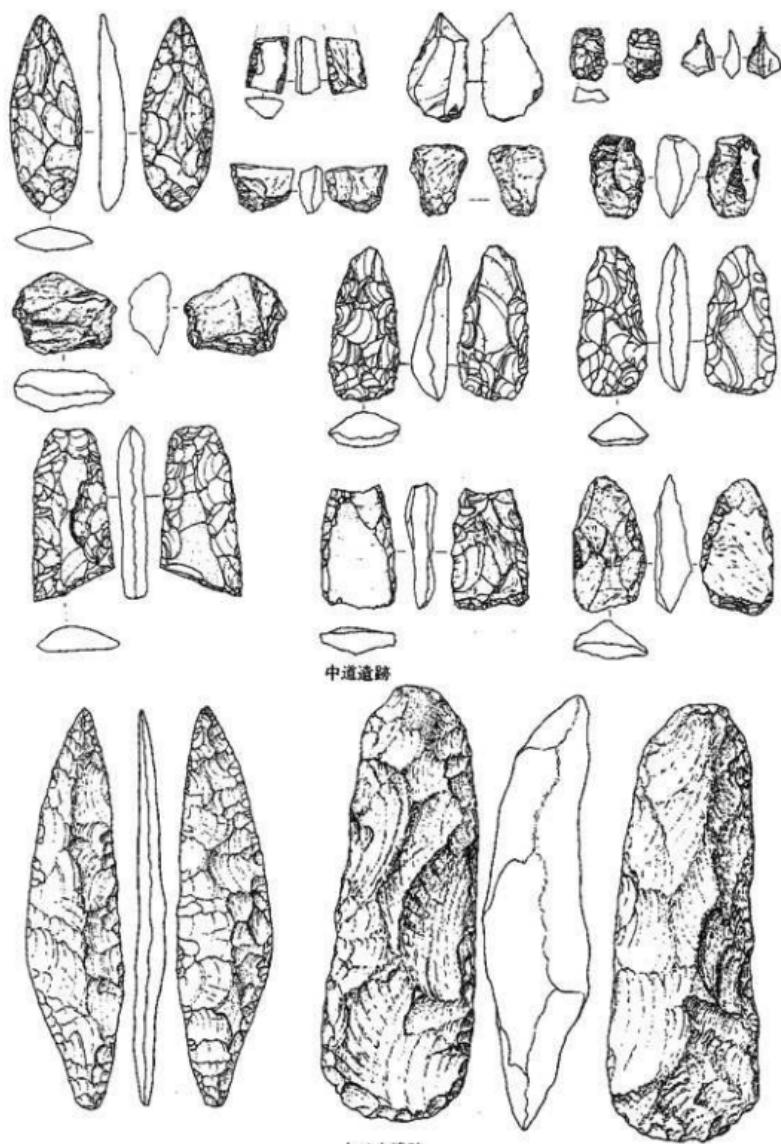
第41図 <茨城県> 後野遺跡



第42図 〈茨城県〉  
額田大宮遺跡(1)

圖43圖 〈赤城縣〉 銀田大宮遺跡(2)

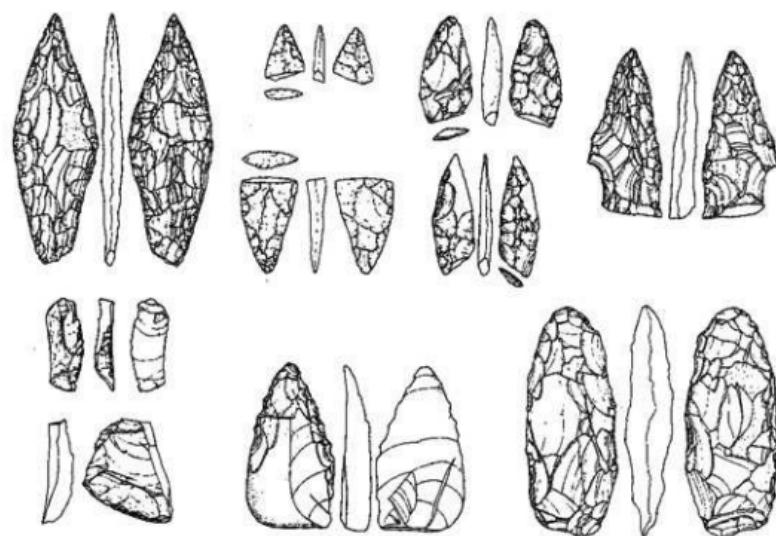




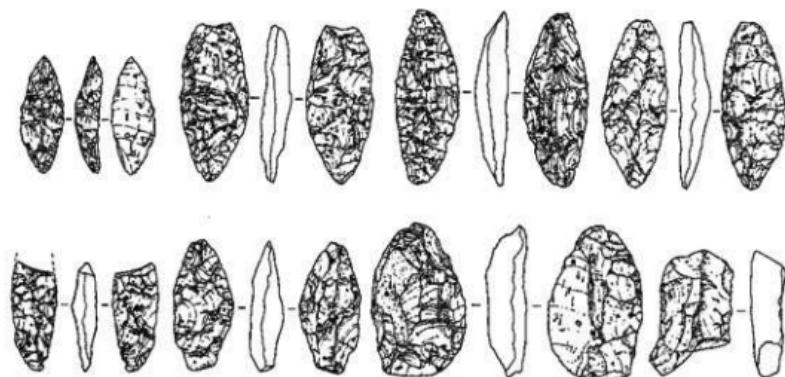
第44図

〈埼玉県〉  
〈東京都〉

中道遺跡  
上ノ台遺跡



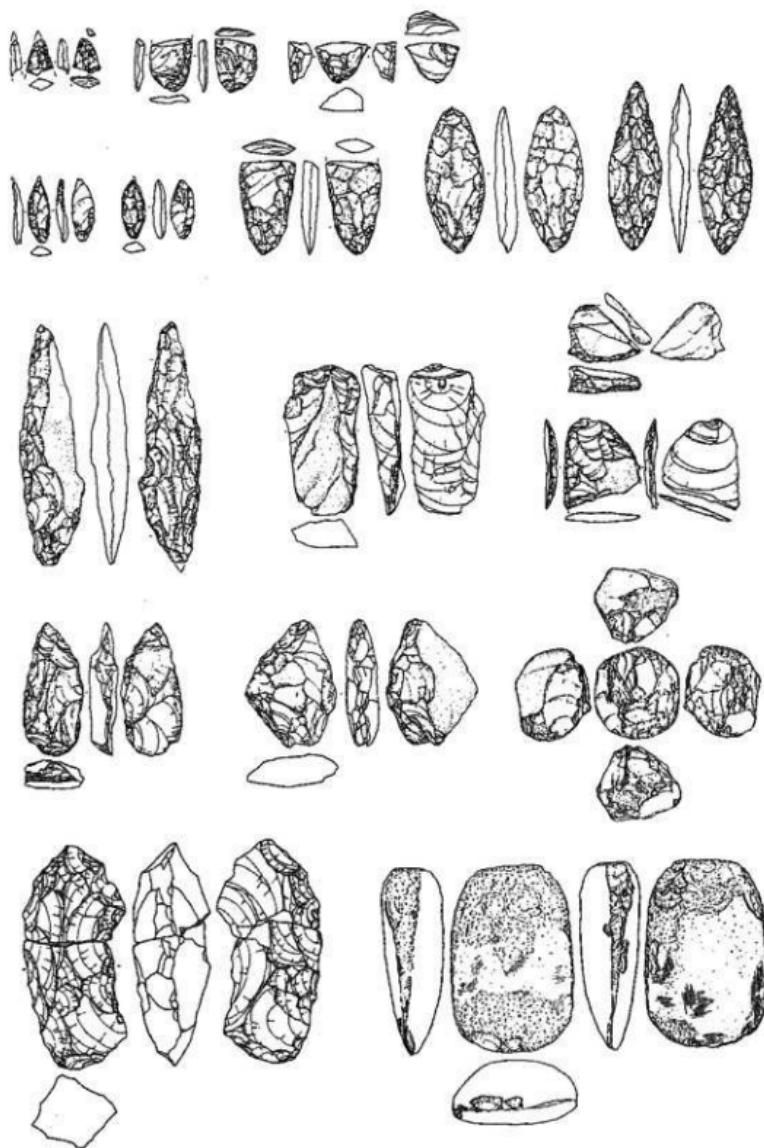
井の頭遺跡 A 地点



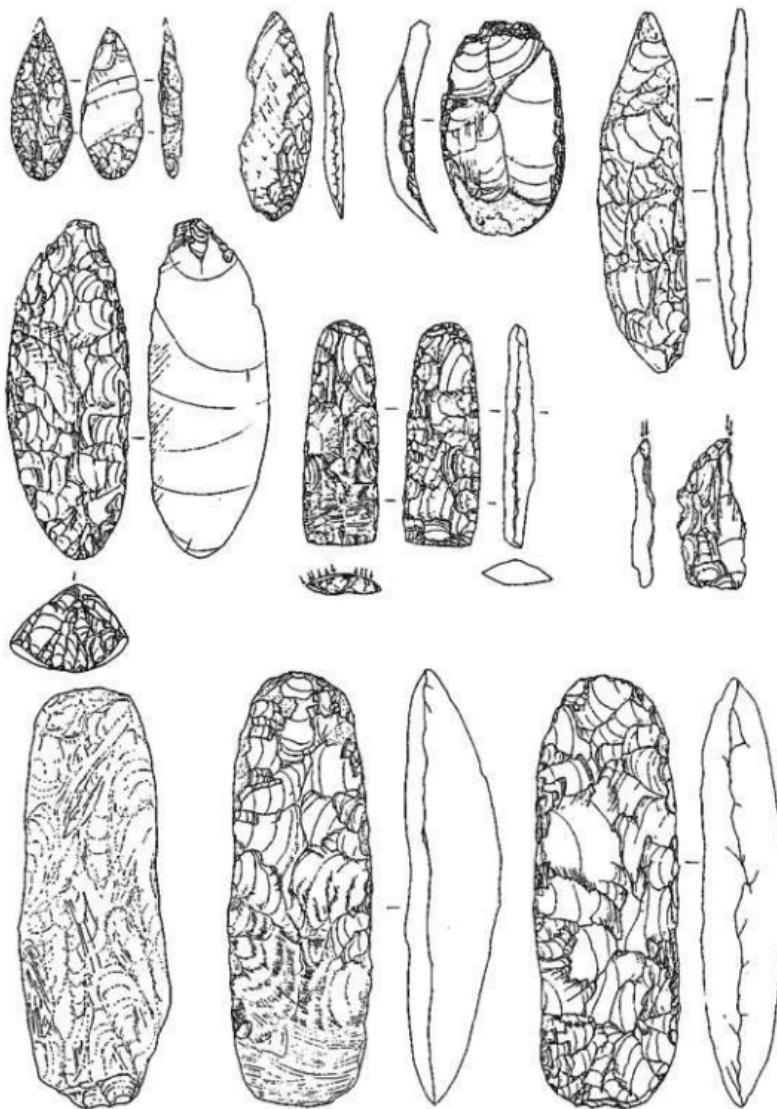
西大宮バイパス No. 4 遺跡

第45図 <東京都>  
<埼玉県>

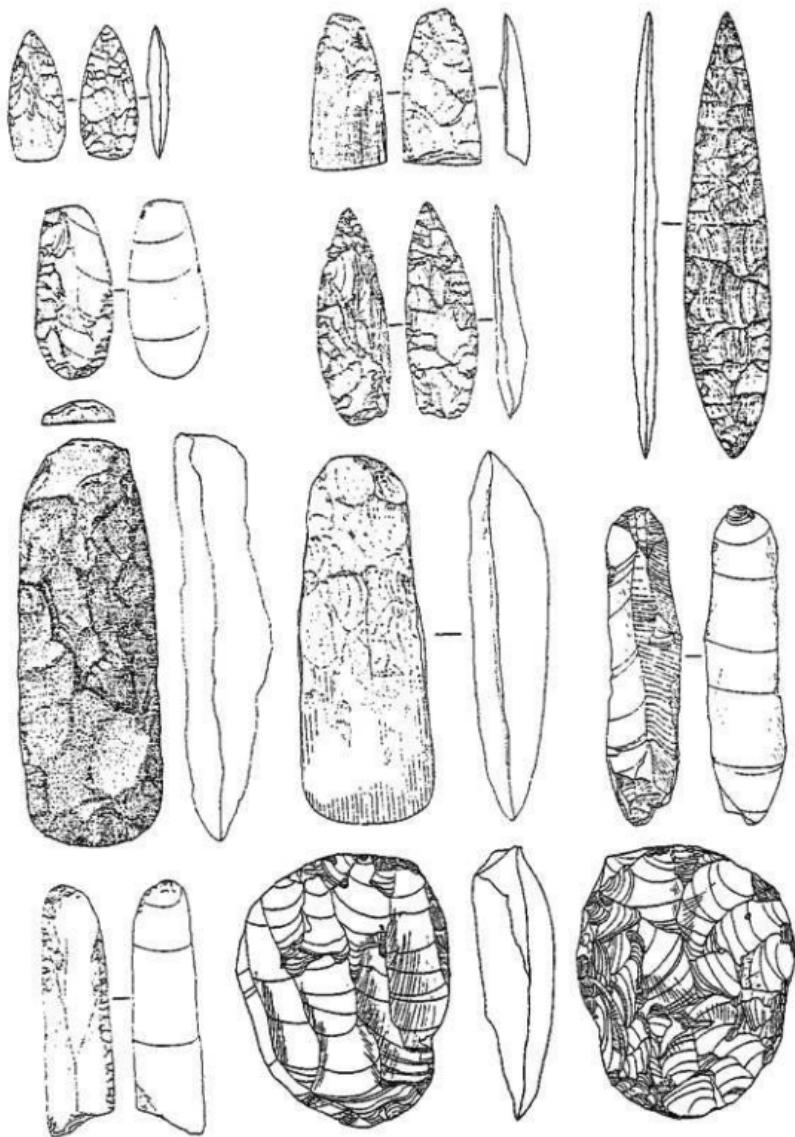
井の頭遺跡 A 地点  
西大宮バイパス No. 4 遺跡



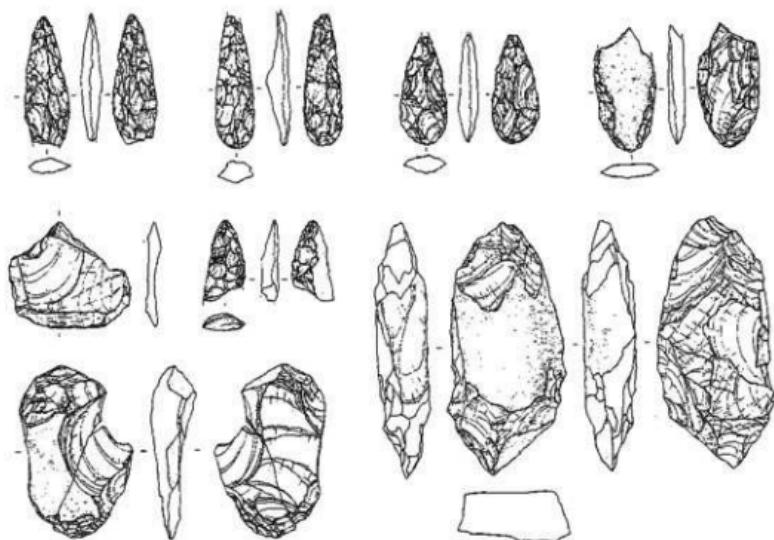
第46図 <神奈川県> 上野遺跡



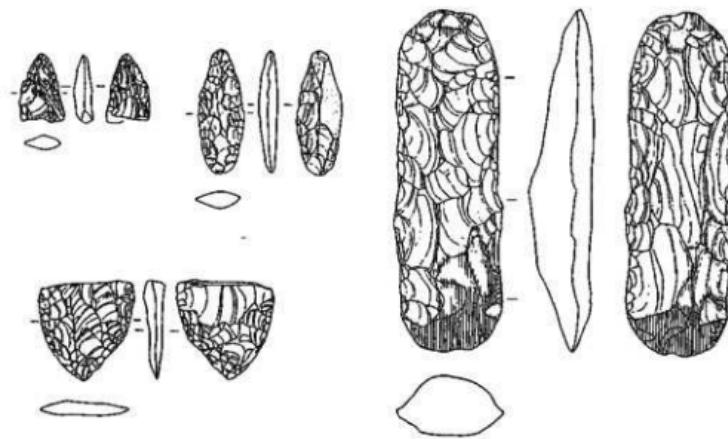
第47図 <長野県> 唐沢B遺跡



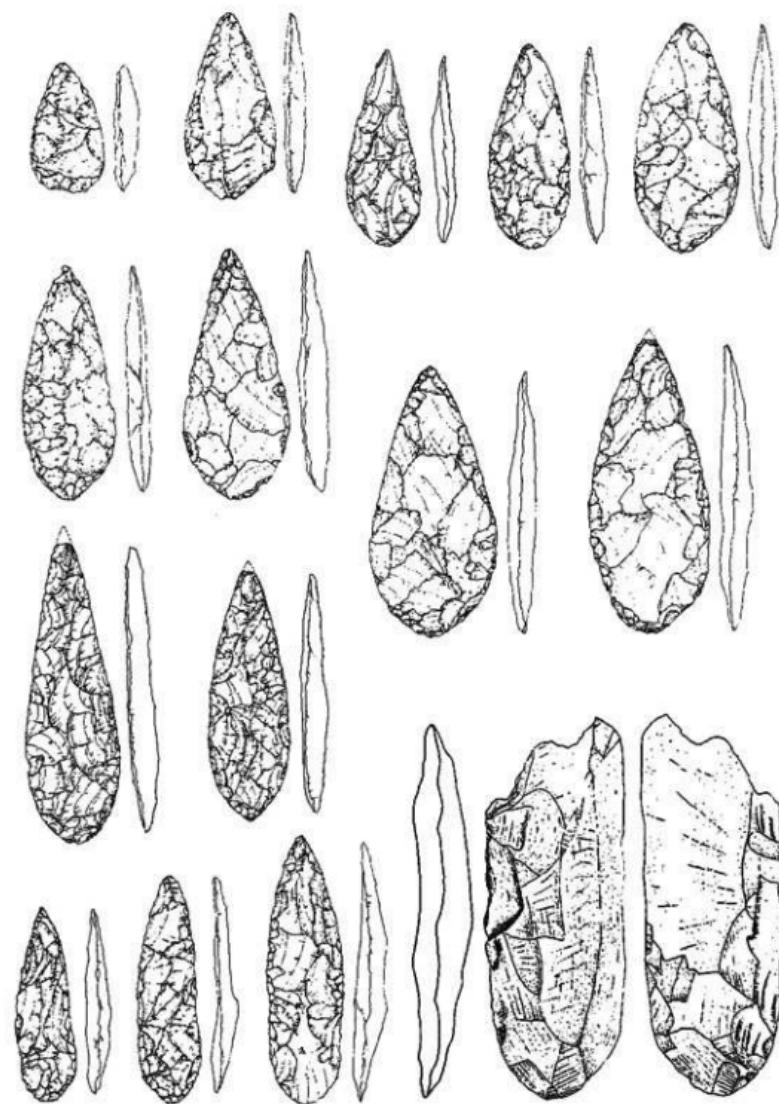
第48図 <長野県> 神子柴遺跡



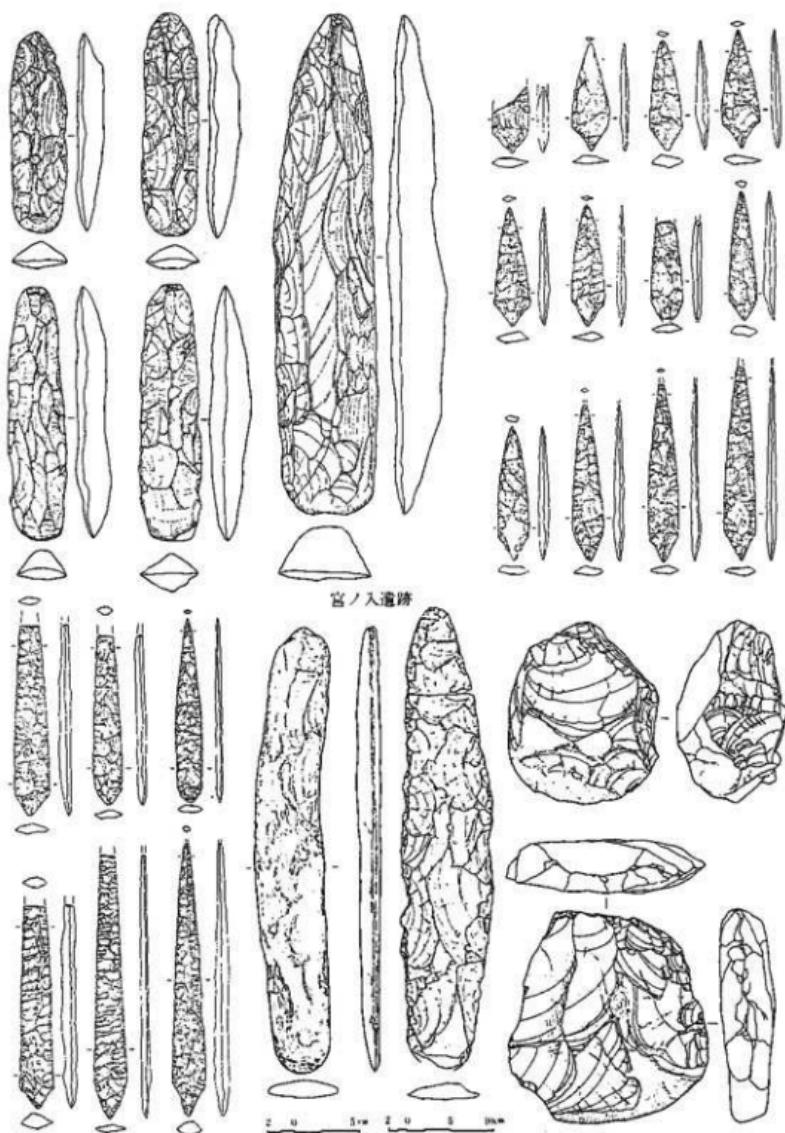
中島B遺跡



青木沢遺跡



第50図 <長野県> 横倉遺跡



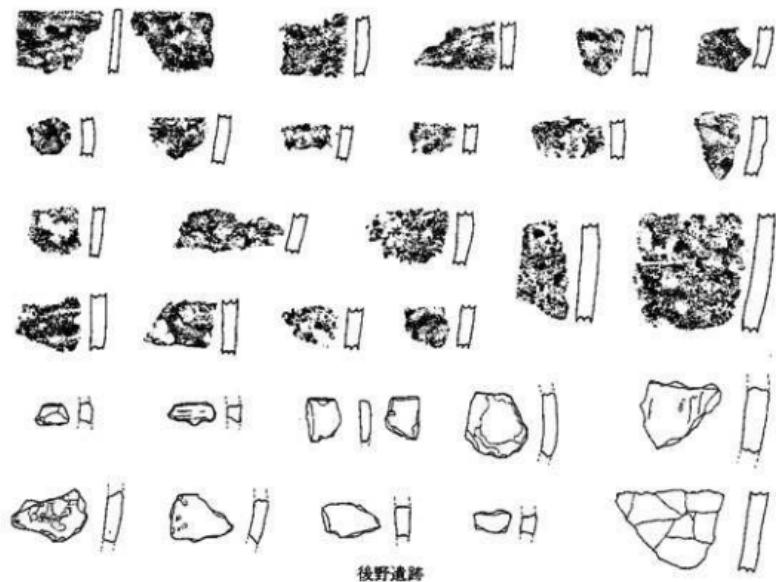
鳴鹿山鹿遺跡

第51図 <長野県>  
<福井県>

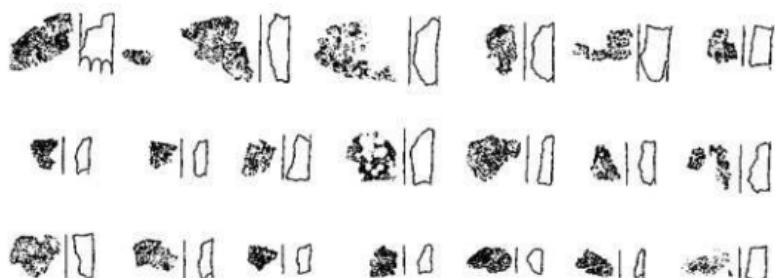
宮ノ入遺跡  
鳴鹿山鹿遺跡



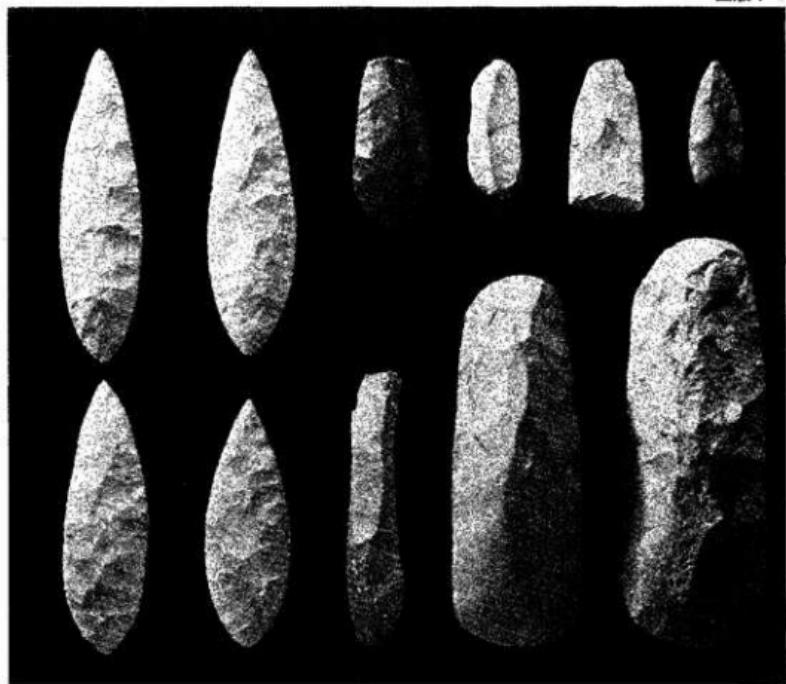
第52図 神子柴文化に伴う無文土器(1)



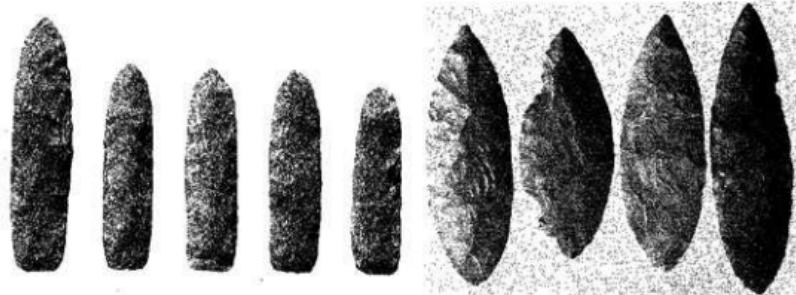
井の頭遺跡A地点



第53図 神子柴文化に伴う無文土器(2)



神子柴遺跡出土石器

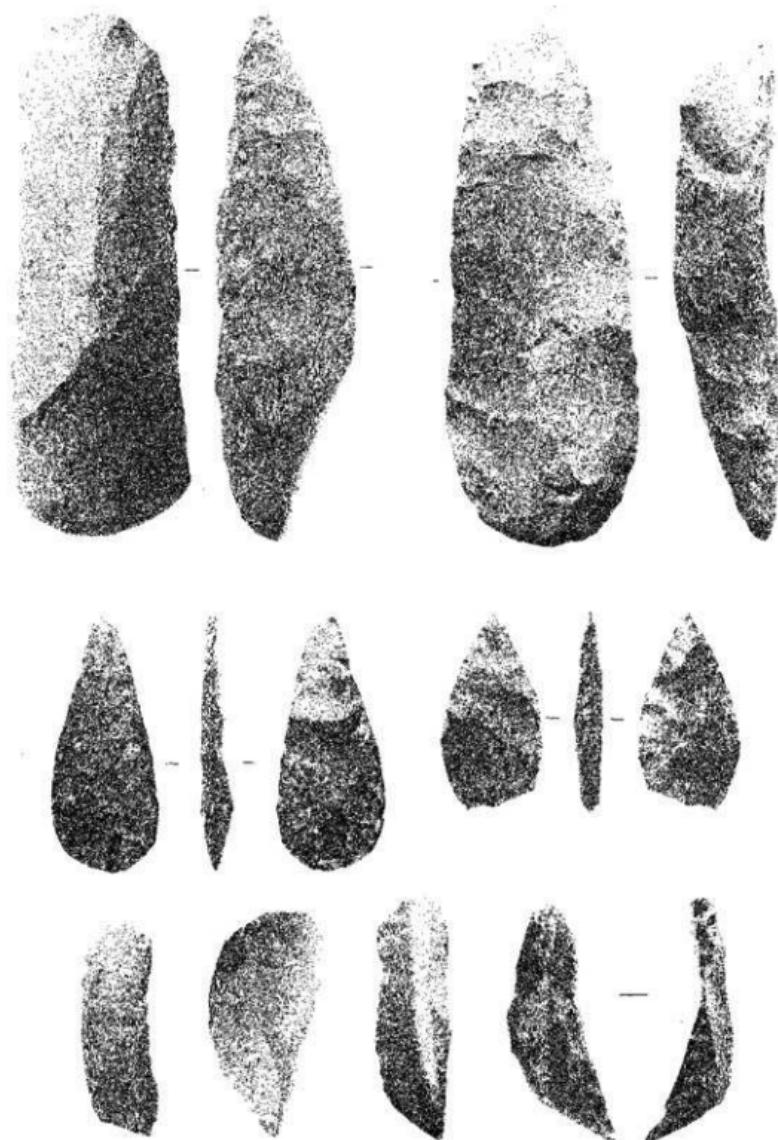


持川遺跡出土石斧

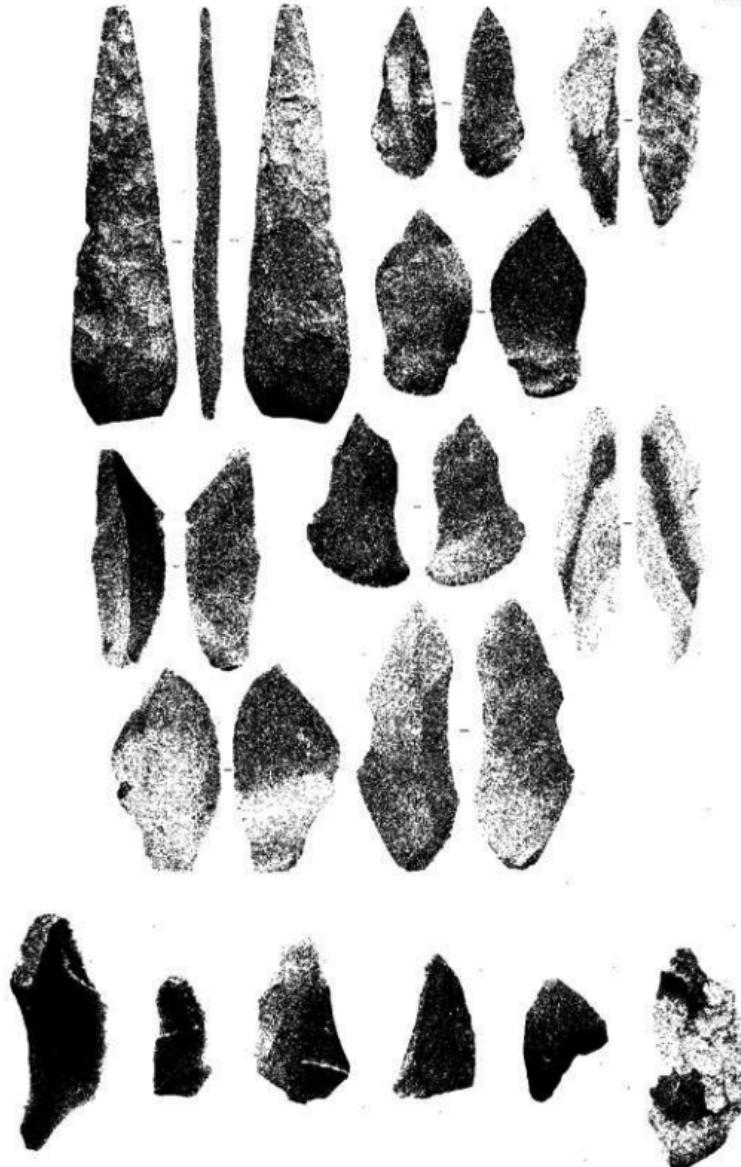
綾子出土石椎



唐沢B遺跡出土石器



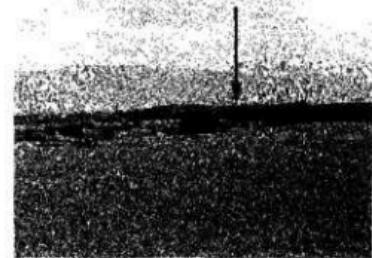
長者久保遺跡出土石器(1)



長者久保遺跡出土石器(2)



長者久保遺跡出土石器(3)



神子柴遺跡

(矢印の下位の平坦面に位置する。中央に見える帯状の森は天竜川の段丘。後方を犬竜川が流れる。)



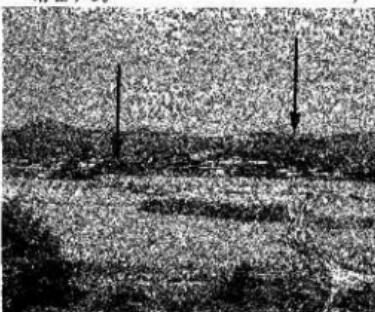
長者久保遺跡

(写真中央は、手前の谷へ半島状に突き出した古地。遺跡はその舌状台地の基底部に存在する。)



大坂遺跡

(中央の電柱付近が遺物採集地点。長者久保と類似した地形であったと考えられる。)



大平山元 I 遺跡

(写真手前を流れる蟹田川の左岸段丘上に存在する。右矢印は大平山元 II 遺跡。)



持川遺跡

(和賀川の作り出した低位段丘上に存在する。齊一性の強い石片が重なって出土した。)



横倉遺跡

(信濃川左岸の段丘上に存在する。石片がまとまって出土した。)

草創期遺跡の立地

## 研究紀要 第4号

1988

昭和63年1月25日 印刷

昭和63年1月30日 発行

発行 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒331 大宮市郷引町2-499 0486-52-2231

印刷 関東図書株式会社